
白猫の恋わずらい

みきまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白猫の恋わずらい

【Nコード】

N7296W

【作者名】

みきまる

【あらすじ】

生まれつき色素がうすく、他人に気味悪がられて生きてきたルチノ。生まれ育った孤児院の閉鎖で、一人、猫となって生きていくことにした。冷たい雨の降る中、出会ったのはひげもじゃの大きな人で……王道猫モノが書きたくて！後にいちゃらぶになる予定です。表に投稿するのははじめてです。よろしくお願いします。

1 雨の中の出会い（前書き）

*****で視点が切り替わります。

1 雨の中の出会い

冷たい雨の降る日だった。

俺、カールⅡヘルベルトⅡヴュストは、外套の合わせ目を両手できつちりと閉めて家路を急いでいた。

なーう……

聞こえたのが奇跡のような、小さな声だった。

周囲を見渡すが、雨にけふる田舎道は視界が悪く、草むらや木々の間に目をこらしてもわからない。

気のせいだったかと、歩を進めようとしたとき。

なーう……

もう一度、聞こえた。

猫。

それもまだ小さい子猫の声だ。

代々猫好きで、実家では常に何匹もの猫を飼っていた。

ブルクハルト国の騎士団に入り宿舎で生活するようになると、猫を飼うことは許されず、道ですれ違う野良猫を時折からかうくらいだった。

そのうち戦果をあげ女を覚え、相応の部屋を与えられるようになる
と、猫をかまうことはなくなった。

それが今。

冤罪で辺境の警備などにまわされた自分に、子猫の音がする。

「こんな冷たい雨の中では・・・死んでしまっぞ」

声を頼りに、草むらに分け入る。

なう、なうと鳴いていたのが、だんだん弱弱しくなり、鳴き声の間隔があいてくる。

「おい、どこだ。おい！」

焦ってガサガサと藪をかきわける。
道からはずいぶん離れてしまった。

外套のフードは脱げて、伸ばしっぱなしの髪から冷たい雨がしたたる。

「んなー・・・」

ザツと勢いよく踏み出した足元で、思いがけず声がした。

「ああ！こんなところに！」

危うく踏んでしまっところだった。

藪の中、丸まる小さな子猫。

そっと抱き上げると、ぐっしょりと濡れてなんとも情けない姿だった。

目は目やにがついて、ほとんど開けられないようだ。

「もう大丈夫だ。俺の家うちに来い。

男一人の何も無い家だがな、雨風くらいはしのげるぞ」

子猫は灰色の体をぶるぶると震わせている。

外套の合わせ目を開いて、胸の内に抱きこんだ。

かなり冷つひゃとしたが、子猫に己の体温を分け与えるために我慢する。

「帰ったら風呂に入ろうな。ミルクも温めてやる。もう少しだ、がんばれ」

家につくまで、俺は子猫に話しかけ続けた。

この辺境の村にきて、仕事以外でこんな話したのははじめてだった。

近所の村人ともろくに話はしなかった。

都落ちした自分を、村人がさげすんでいるような気がしたからだ。

それでもはじめは何かと世話を焼こうとしてくれたが、露骨に避ける俺に、いつしか誰も話しかけなくなった。

気が楽になった反面、孤独感に襲われた。

ああ、でも今日からは一人ではない。

守るべきものを見つけた俺は、足取りも軽く、しかし最大限に急いで家へと帰った。

孤児院こいが閉鎖されることになった。

生まれつき髪が白く赤目の私は、生みの親にさえ気味悪がられて、14年前、この街はずれの孤児院の前に置き去りにされた。唯一の親とのつながりは、かろうじて覚えていた“ルチノー”という自分の名前だけ。

誕生日すらわからないが、たぶん今年16歳になる。

それ以来孤児院の院長先生を義母ははと呼び、後から来た義妹いせうとや義弟おとうとの面倒をみながら生活してきた。

しかし長年孤児院の後援者パトロンだった子爵が亡くなり（院長先生のお兄さんだそうだ）、経営が立ち行かなくなって閉鎖されることになった。

そして、とうとう明日、孤児院うちがなくなるといふ日。

院長先生と囲む夕餉の食卓は、どんよりと重い空気に包まれていた。

「あとはおまえだけだね……」

「はい……ごめんなさい、お義母さん。迷惑をかけて……」

「いいんだよ。おまえの良さは見た目なんかじゃわからないのにね。いや、その髪もその瞳も、私はとても美しいと思っっているよ。」

ただ他の人にはね……」

孤児院の閉鎖に伴い、院長先生は子どもたちの里親を必死に探してくれた。

ごく小さい子やある程度の年ですぐ働き手になる子はすぐに行先が決まって、他の子もなんとか閉鎖前日の今日までには新しい扶養者の元へ旅立った。

でも私だけは、この髪や目が気味悪がられて売れ残ってしまった。

「まあいざとなれば私が引き取ってやるさ。」

おまえ1人くらいどうとでもなる」

院長先生は微笑もうとしたんだと思う。でもそれは失敗に終わっていた。

蠟燭の炎に映し出されるその顔は、閉鎖が決まる前の資金繰りの心労と、連日の里親探しのため、ひどくやつれて深いしわを刻んでいた。

院長先生自身、親類の家に身を寄せると言っていたので、赤の他人の私などが一緒に行けるわけがない。

どこか働き口はないのか。

いつそ髪を染めて目をつぶして、夜の街にでも立とうか。

そんなことを考えたとき、コンコンと玄関の扉を叩く音がした。

こんな時間に誰だろう。

「夜分遅くに申し訳ありません。

旅の途中、日が暮れてしまい途方に暮れています。

一夜の宿をお貸し願えませんか」

のぞき窓から外を見ると、そこには外套を目深にかぶった細身の人影があった。

街はずれにたつ孤児院こどもには、時折こうして旅人が訪れることがある。いつもなら下働きの男手などもあるので快く迎え入れていたが、今夜はもう私と院長先生の2人しかない。

困っている人を助けたいのはやまやまだが、もし悪い人だったらどうしよう。

身の安全を考えると簡単には扉を開けることはできなかった。

私が扉の前で逡巡していると、院長先生がやってきて、場所を変わるように動作で示した。

背伸びをしてのぞき窓から外を伺う。

院長先生ももう年だからすっかり腰がまがってしまった、私でも届くのぞき窓が背伸びをしないと届かなくなっていた。

「怪しい者ではありません。どうか……」

「ではフードを取ってくださいませんか」

「ああ、これは失礼」

旅人の顔を見て、院長先生は入れてあげることにしたようだ。かんぬきをはずし、扉を開ける。

「ありがとうございます！本当に困っていたんです」

見ればその旅人は、人懐っこい目をした女性だった。なるほど、院長先生が扉をあけるはずだ。

旅人はエメと名乗り、王都の知り合いのところへ行く途中で、東の国の魔術師だと言った。

この国にも魔術師はおり、主に病気の治療や占いなどをする。悪い魔術師になると呪いを請け負うこともあるそうだが、エメさんはそんな風には見えなかった。

院長先生が部屋へ案内する間、私は調理室に戻り、夕餉の残りのスープを温めてエメさんに届けた。

「ありがとうございます！うわあ、なんて良い匂い！

温かい食べ物なんて久しぶり！ずっと旅してきたからさあ」

エメさんは温かいだけでたいした具も入っていないスープをおいしそうに口に含み、添えた固いパンもスープに浸しながらぺろりと平らげてしまった。

「おいしかった！これはあなたが作ったの？上手ね！」

エメさんは、私に目を合わせてそう言った。

「ほめてくださってありがとうございます。」

あの・・・私が気持ち悪くないんですか？」

「気持ち悪い？なぜ？」

「だって・・・こんな見た目だから・・・」

「ああそうか。あなたは自分がアルビノなことを気にしているんだね」

「アルビノ？」

「魔術の世界で希少価値の高い、生まれつき色素が薄い個体をそういうんだよ。」

私たち魔術師にとっては貴重でとっても大事な存在なんだけどな」

貴重。

大事。

自分の見た目をそんな風に言われたことはなかった。

「じゃあ魔術師なら私を高く買ってくれますか？」

「んん？そんな魅力的な話を気軽にしちゃいけないよ。」

ふふ・・・なんてね。

まさか人を魔術の道具にするわけにはいかないでしょう。人の売買は禁止されてるしね」

「ああ・・・そうですよね・・・」

「どうしたの？一宿一飯の恩で話くらいきくけど」

そして私は今の状況を話した。

「なるほどね。あなたは院長先生に迷惑をかけたくなって、一人で生きていけるようになりたいんだ」

「はい・・・」

「その思い、本物なら協力できなくもないよ。成功するかしないかはあなた次第だね」

エメさんがそう言って耳打ちしたのは、私にとってはすばらしい提案だった。

「猫になる!？」

次の日。

院長先生の部屋をたずねて、私は思い切って話をした。

「ええ。エメさんが私に魔法をかけて猫にしてくださいさるそうです。

猫ならばどこでも生きていけますから。これ以上お義母さんに迷惑をかけたくないんです」

変化の術はそう簡単にできるものではない。

運のいいことに、エメさんはかなり高位の魔術師だったようだ。

「迷惑だなんてお言いでないよ。」

おまえ・・・そんなことを考えていたなんて・・・」

「大丈夫です。この魔法はルチノーちゃんがもう猫を辞めたいと思つた時か生活が安定したときには解けるようにしておきます。

一生猫のままというわけではないんです」

いつの間にか隣に立っていたエメさんが口添えをしてくれた。

「そこまで言うのなら・・・でも私はかまわないだよ。一緒に行こうよ、ルチノーや」

「ありがとうございます・・・でも私、決めましたから」

「ルチノー・・・。」

わかったよ。困ったときはいつでも頼っておくれ」

「はい！」

そうして私は魔術師エメさんの術を受け、猫になったのだった。

2 一緒に風呂

「さっぱりしたなあ。おお、おまえ、白猫だったんだな！」

湯に入れて、石鹸で洗ってやると、真っ白な毛並みが現れた。灰色だと思ったのは汚れだったらしい。

目やにはまだ完全にとれていなかったが、とりあえず風呂からあげてミルクを与える。

匂いをかいで、そおっと口をつけたのを確かめてから、俺は茹でた鶏肉を細かくちぎって隣に置いた。

子猫は、今度は躊躇なくはぐはぐと勢いよく食べ始めた。

「ははっ・・・腹、減ってたんだな」

俺も鶏肉の茹で汁に細かく切った野菜を入れ塩コシヨウで味を調えてスープとし、自分で焼いたパンを添えて夕食とした。

与えた食事をすべて平らげた子猫は、ぷっくり膨れた腹を重そうに引きずってよたよたと部屋の隅へ歩いていったかと思うと、ぼてつと倒れた。

そのまま丸くなる。

これは・・・寝る態勢だ。

本当は一緒に寝たかったが、小さいとはいえ野良猫。

初めて会った人の前で餌を食べただけ上等だろう。
ピンクの鼻先がぴすぴすと動いている。
時々ぴくっとひげが揺れるが、もうすでに夢の中なのは確実だ。
外と違い、部屋の中は温かい。
生死の危険はないだろう。

「おやすみ、猫」

明日は名前を決めてやろう。
そう思いながら、俺も眠りについた。

子猫になって、街へ出た。
10年以上暮らした街である。
どこに何があるかはわかっている。
そうはいつでも人の目線と猫の目線は違うので、はじめはずいぶん戸惑った。
すぐに着くと思ったところが意外と遠かったり、楽に通れると思っていたところが高すぎて通れなかったり。
逆に猫ならではの道もたくさんあった。
しかし誤算もいくつかあった。
16と言えば人間ならそれなりの体格のはずだけど、なぜか猫になった私は小さな子猫だった。

「わー、なんだこの猫！目が赤いぞ！」

「うわあ、捕まえる！」

ある日子供たちに追いかけられ、とっさに私は通りがかりの馬車に飛び乗った。

荷物にまぎれこんで身を隠す。

ほっと一息ついた後、馬車の振動が心地よく、私は眠ってしまった。

どれくらい眠ったのだろう。

「うおっ、なんだ、猫か！あっち行け、シッシッ」

馬車の持ち主に追い立てられて目が覚めた。

思わず飛び出て呆然とした。全く知らない場所だったのだ。

人は少なく、緑ばかりの田舎の村。

勝手知ったる街だから生きていけると思った。

いざとなったら院長先生のところへ行けば私を私とわかってくれる
と思った。

こんな何もない場所で生きていけるのだろうか。

カラスにでもつつかれたら終わりである。

途方に暮れて、とにもかくにもとぼとぼと歩いた。

そのうち冷たい雨が降ってきた。

ああ、もうだめ。

猫なんてやめる。

気味が悪いと言われたってこんなところで死ぬのは嫌だ。
嫌？

じゃあ生きててどうなるっていうんだらう。

働く場所もなく体を売るしかないじゃないか。

そこまでして生きていたいだらうか。

それならいっそのこと自然に還り、他の生き物の糧となったほうが
よっぽどいいじゃない？

そう思ったのだけど。

「なーう」

寒さと空腹と心細さに耐えきれず、一縷の望みを込めて鳴いてみた。

「なーう」

助けて。

「なーう」

誰か助けて……。

「おい、どこだ。おい！」

それが私と彼との出会いだった。

3 名前は？

カリカリカリ

カリカリカリ

頬を小さな爪でひっかかれて目が覚めた。

「・・・おはよう。なんだ、腹減ったのか？」

俺の胸の上に乗って、覗き込む子猫がいた。
目やにだらけの目をうつすら開けている。

「赤いなあ。充血してるのか。
拭いてやるから、飯はその後だ」

子猫を肩に乗せ、台所にある水瓶に向かう。
子猫は小さな爪を精一杯伸ばして、俺の肩にしがみついている。

・・・一晩でずいぶん懐いたもんだ。

そう思うと口の端が無意識のうちに上がる。
昨日無理矢理寝台に連れ込まなかったのがよかったのか、子猫は自分から近づいてきた。
肩にかかる頼りない重さがくすぐったい。

濡らした手巾で丁寧に目元をぬぐってやると、よつやく子猫は両目をしっかりと開けることができた。

「あれ、充血じゃないな。元々赤い目なのか。きれいだなあ！」

わきの下に手を入れて抱き上げ、紅玉ルビのような目をじいつと見る。白猫といえば青目が黄目。

左右の色彩が異なるオッドアイも飼ったことがあるが、赤目は初めてだ。

「真つ白で赤目か。うさぎみたいだな。名前、うさぎにするか」

「なあうー」

「ん？嫌なのか。じゃあスノウは？」

たしたし！

手の甲を前足で叩かれた。

「それもだめか。ルビーでどうだ」

「なう！」

「ル？」

「んなつ！」

「ルビー？」

たしたし！

「なんだよ。ビーはいらねえのか。」

じゃ、ルウな。おまえの名前は今日からルウだ」

なあうー・・・

なんだかもう少し言いたいことがあるそうだが、しよせん猫語。名前はルウにした。

「さて、俺は仕事だ。昨日の雨で異変がなかったか見回りをしてくる。」

大人しくしてるんだぞ」

本音を言えばルウと遊び倒したかったが、後ろ髪をひかれる思いで家を後にした。

今日は早く帰ってこよう。

そう心に決めて。

私を拾ってくれた親切な人は、とっても大きかった。

子猫目線だからではないと思う。

室内の家具は一般的なものだと思うけれど、鴨居にいつも頭をぶつけそうになっていて通るたびにかがんでるし、寝台からは足がはみでていた。

体格もがっしりしていて筋肉質。

ごつごつした手は、私を撫でるときはとても優しい。年はよくわからない。

髪だか髭だか区別がつかない毛が顔を覆っていて、はっきり見えな
いから。

40代かな、と思ったけれど声は若いような気がする。

かるうじてわかるのは、髪の毛の隙間から覗く瞳が深い碧みどりであるこ
と。

私を見ると途端に細められ、笑顔の形になる・・・はずなのだがこ
れがとても怖い。

にんまり、というのかな。

ひげもじゃの口の端があがり、目じりが下がる。

本来ならごく一般的な笑みの形のはずだ。

それがこの人の場合、元々の不審者面ふしんしゃつらが奇妙に歪み、“悪鬼が残忍な方法で敵を葬る方法を思いついた”みたいな凶悪な顔になるのだ。はじめてごはんをもらったとき、私を見つめるその顔があまりに怖くて部屋の隅に逃げてしまった。

本当あたたかそんな布団で寝たかったのに。

だから今日は勇気をだして起こしてみた。

彼の顔も見慣れれば平気になるかもしれない。

周囲に気味悪がられて生きてきた私が、人様の顔ひとさまに文句をつけるな
んておこがましい。

ましてや彼は命の恩人。

怖いなど言っつては失礼だ。

しかも名前もつけてくれた。

「ルチノー」と一生懸命言っただけで、さすがにそれは通じな
かつたみたい。

でも「ルウ」という本名に近い名前をつけてもらえた。

すごくうれしい。

早く帰ってこないかな。
今度は彼の名前を知りたい。

4 カールという人

「隊長、今日はなんかご機嫌っすね」

辺境の警備隊。

王都でそれなりの地位にいた俺は、左遷され警備隊の隊長などという役職を与えられていた。

田舎の村のすぐそばに隣国との国境があり、この警備隊は一応その国境を見張る役目を負っている。

しかし300年以上良好な関係を続けている両国に何かあるわけはなく、警備隊の主な仕事は雨で崩れた土塀を直したり、野生動物に壊された柵を修理したりすることだった。

今俺に話しかけてきているのは、前隊長で今は俺の補佐官となっているギユンターだ。

くすんだ金髪に灰色の瞳^{ケレ}。

多少軽薄そうではあるが、隊で唯一俺に気軽に話しかけてくる奴だ。3か月前、俺が赴任したせいで隊長から補佐官となったにもかかわらず、恨む様子はない。

「隊長は顔が怖いんすよ。暗いしね。」

隊長職？別にいりません。俺、所詮、牛飼いの小倅^{こせがれ}っすから」

警備隊のほとんどはこの土地で徴兵されたもので、家の仕事を手伝いつつ警備の仕事もしている者ばかりだった。

専門の武官は俺一人といってもいい。

つまり俺の仕事は、辺境の警備といつつも村の便利屋と隊の連中の訓練というわけだ。

「ほんと、何かありました？」

柵の修理に使う板を運びながら、ギョウターが尋ねてくる。

この男、俺がいくら無愛想にしてもひるむ様子がない。

図太いのか無神経なのか。

・・・たぶん後者だろう。

「猫を拾ってな」

あまりにしつこいのでしぶしぶ答えた。

「猫お？」

「昨日の帰り、雨の中鳴いていたから保護した」

なんとなく言い訳じみてしまう。

「へえ、そりやお優しいことで。ま、猫一匹で隊長の機嫌がよくなるなら大助かりですよ。

隊の連中も最近は何れてきたとはいえ、まだまだ隊長のこと怖がってますからね」

「・・・」

「髪、切りゃいいんじゃないすか」

「・・・ふん」

今の自分の顔がお世辞にも人にいい印象を与えないのはわかっている。

王都にいたころは身ぎれいにし、もう少し愛想もよかったのだが、ここに来て何もかも面倒になってしまった。

目にかかるうっとおしい前髪も、外界と自分を分けてくれるように安心する。

早く帰ってルウを撫でたい。

その一心で、俺はこれ以上話しかけるなという^{オーラ}気を放ち、兵どもとともに柵の修理に励んだ。

「ルウ。ルウ？」

夕方。

仕事を終え、勢い込んで玄関を開けたが子猫^{ルウ}の姿はなかった。どこへいったのか。

すべて施錠して出たはずだから、逃げ出すとは思えない。

「ルウ！」

さして広くもない家の中をどこかかと捜し歩くと、「んなー」とどこからか声が聞こえた。

「ルウ！」

ルウは戸棚の上に置いた長靴の中から顔を出した。

「なんでそんなところにいるんだ。」

ああ入ったはいいが出られなかつたんだな。仕方ないやつだ」

抱き上げるとほこりまみれだった。

今日は一日部屋の中を探検して歩いていたらしい。

書類を机の上に放り出し、一緒に風呂に入ることにした。

自分もルウもきれいに洗ってから湯船につかる。

「おい、こら爪を立てるな。あいたたたた！」

夕飯をやると、はぐはぐと一生懸命食べ、今日は寝台に滑り込んできた。

同じ石鹸の香りがする体は柔らかく、温かった。

カール、と言うらしい。

書類の後ろ書きがこの人のものならば、だけど。

「なあう？」

カール？と呼びかけてみる。

「ん？なんだ？」

仕事を持ち帰ってきたらしく、机に向かっていた彼が目を細めて私を見る。

怖い。けど我慢。

「なーう??？」

カール??？

「遊びたいのか？もうすぐ終わるから待ってる」

喉を撫でられてゴロゴロと鳴ってしまふ。

そうじゃないんだけどなー。

思いが伝わらないもどかしさに、彼の前で転がってみた。

正確には、彼の前にある書類の上で。

「こら、邪魔するなよ。明日締め切りの月例報告書なんだ。今夜中に仕上げないとな」

そう言いつつも、彼は私のまんまるのお腹や喉元を優しく撫でてくれた。

昨日今日とお風呂に入れてくれたおかげで、私の毛は真っ白でつやつやだ。

気持ち悪かった目元もすっかりきれいになった。

ひっくり返って彼を見上げると、髭だか髪だかわからない毛が魅惑的に揺れていた。

猫の本能でつい手を伸ばす。

姿に影響されるのか、どうしても我慢できないのだ。

「あ、おい、だめだぞ。あっ、痛^いてて！こら！」

あれ？うわ、どうしよう。

やっ、ごめん、きゃー！

ちょっとしたいたずら心だったのに、私の細い爪が毛にからまってとれなくなってしまった。

もがけばもがくほどにからまり、体は宙に浮いてまるで彼の髭の飾^{オブリション}りのようになってしまった。

「ルウ……。切るしかないな」

えっ、爪切るの？

痛くないでね？

昔孤児院で拾った猫の爪を切ってやろうとして、切りすぎて血を出させてしまったことを思いだす。

彼は猫の扱いに慣れてるみたいだから、大丈夫だと思うけど。

内心冷や汗をかきつつ成り行きを見守っていたら、彼が机の引き出しから取り出したのは大きなハサミ。

そそそそんなので切られたら腕ごと切れちゃいます！！

もうだめ、と思って目をつぶる。

じよきん！

……あれ？

痛くない。

痛みはないけれど、体は自由になった。

そおっと目を開けると、目の前にはやはり腕にからまる大量の毛。

でも私、机の上に着地してるよ？

一体どうしたことだろうと彼を見て納得。

彼が切ったのは私の爪でも腕でもなく、自分の髭（髪？）だった。

「大丈夫か？ほら、今とってやるから大人しくしているよ。

もうこないたずらすんじゃないぞ」

右半分の髭が短くなった彼は、そんなことは全く気にしていない様子で私にからまる自分の毛をとりのぞいていた。

その毛、何かの願掛けとかで伸ばしていたものだったらどうしよう。たぶんただの無精だとは思っただけ。

とりあえず反省の姿勢を見せようと、耳を垂れて「んなー・・・」と鳴いてみた。

彼はにこつと笑って私の頭をぼんぼんと撫でてくれた。

あ、今の顔、結構自然だった。

その夜はこれ以上彼の髪にからまらないように気を付けて寝た。

下弦の月が、窓の外できらめいていた。

5 髪を切ったら・・・

「うわ、隊長、どうしたんすか、それ」

出勤した途端にギウンターが寄ってきた。
まあ今日は俺も用があつたから助かる。

「ちよつとな。この村に散髪屋はあるか？」

「んー、ヨゼフじいさんはこの間死んじまつたからなあ。
手先の器用な奴がいますから、呼んできましょう。

ついでに髪も切っちまいましょうぜ」

ギウンターが呼んできたのは裁縫屋の息子で、裁ちばさみと剃刀を
器用に使って髭と髪を整えてくれた。

「隊長・・・いくつなんすか」

「なにがだ」

久々につるりとなった顎を撫でる。
襟足もすつきりした。

長めに残してもらった前髪は、真ん中で分けて顔の両側に流す。

「年です。おいくつでしたっけ」

「31だが、何か？」

「31い！？俺の2コ上！？」

「何をそんなに驚くんだ。履歴書は王都から届いていたはずだろう」

「いや、そうっすけど、きつと間違いだと思っ・・・いえ、なんでもありません。

うわ、隊長。よく見れば男前じゃないすか。

まいったなあ。村の娘どもがほっときませんよ」

「女は当分いらん」

「うへ・・・なんて贅沢な・・・」

この地に飛ばされたのも女がらみだった。
恋愛ごとはこりこりだった。

兵舎に行くと皆一様に不審げなまなざしを向けてきた。

「何を見ている！訓練はどうした！」

一喝すると「隊長！？」「ええ！？」「詐欺だ！」「実は若かったのか！」となんともわかりやすい反応が返ってきた。

そうか、あの無精ひげと伸ばし放題の髪の毛のせいで俺はずいぶん年上に見られていたらしい。

「つまらんことを言っただけで外に並べ！」

目を覆う前髪がなくなったせいだろうか。

世界が明るくなった気がした。

遠巻きにしていた隊の連中との距離も、心なしか近くなった気がした。

「ルウのおかげだろうか」

「ん？何か言いましたか、隊長」

「いや、なんでもない。ギユンター、月例報告書ができてるから送っておいてくれ」

「はいはい。」

隊長、あとは笑顔つすよ。

村のやつらは単純だから、その顔でにこりともすればすぐに仲良くなれますからね」

「おもしろくもないのに笑えるか」

「ま、そりゃそうですけどね」

兵舎を出て、庭に整列した警備隊員たちの前に立つ。
20名ほどの隊員たちは、どうにも定まらない姿勢で突っ立っていた。

「気を付け！」

全員びくつと震えて不動の姿勢をとる。

その後、休め、右向け右、敬礼などの基本動作をさせる。

ここまでは赴任して3か月。なんとか見られるようにした。

「銃をおけ！」

わたわたわた。

銃を扱う段になって、途端にぎこちなくなる隊員たち。

「銃をとれ！」

おい、そこの右の。

先を自分に向けて、もし暴発でもしたらどうする気だ。
弾を抜かせておいてよかった。

「立て銃！ 下げ銃！ 担え銃！」

とにかく慣れだろうと、立て続けに指示を出す。

左右混乱した奴が隣の奴に銃をぶつけたり、銃同士がぶつかったりして、ゴツンだのガチャンだの騒々しいことこの上ない。

「隊長、無理っすよお」

「俺、鋤や鍬なら得意なんすけど」

「投げ縄ならできます！俺んちの牛が逃げたとき、見よう見まねでやってみたらうまく行ったんでさあ」

「ああ、あれすごかったよな！」

「もう少しで村の柵越えちまうってところで、サジの奴が縄を持ってきて・・・」

ああ、頭が痛い。

こめかみを押さえ、溜息をつく。

「ははは、まあ、隊長。俺らはこんなもんすよ。

そんな根つめてやらなくても大丈夫です」

隣に立つギョウターものんきなものだ。

「おおおおーい、大変だー！
ヤン坊のこの牛が逃げ出したぞー。手を貸してくれー」

庭の反対側から村人の声がした。

「おお、俺の出番！」

「兵舎から縄とってくる！」

「綱も持ってきて。みんなで囲むべ」

「あつ、隊長。行ってもいいっすか!？」

「……行って来い」

いつもこんな調子で訓練が中断される。

牛か……まあ大変だよな。逃げだしたら。

銃を放り出し喜々として駆け出す隊員たちの後ろをついていきながら、今日何度目かの溜息をつく。

はあ……。

ルウの白く柔らかい躰を思い浮かべ、これも任務だ、早く終わらせて家に帰ろうと気持ち^{こころ}を切り替えた。

あつ！帰ってきた！

窓の下、木の向こうに、外套を目深にかぶった大きな人影が見えた。

昨日は失敗してしまっただが、今日こそ玄関でお出迎えするのだ。孤児院でも、院長先生が外出したときにはこうして帰りを待っていたことを思いだす。

彼が一人で住むこの家は、玄関を入れてすぐが居間で、あとは台所、水回り、寝室だけの小さな家だ。

大人数で暮らしていた孤児院からすると驚くほどの狭さだけど、この3日間で一人暮らしには十分だとわかった。

がちやり

鍵の開く音がする。

彼は私の見た目を気味悪がず、赤い瞳をきれいだと言ってくれた。冷たい雨に打たれて死ぬしかないと思っていたところを助けてくれた。

食事とあたたかい寝床を与えてくれた。

野良でやっていこうと思っただけで、一度こんなに心地よい空間を覚えてしまったら、もう外へは出たくない。

精一杯の愛想を振りまくべく、扉の前に座って私は長いしっぽを揺らした。

「ルウ。待っていてくれたのか」

私を見た途端、彼が破顔する。

・・・彼？

「ふぎやーーーーー!!!」

「あつ、おい!? ルウ!?」

いやあああ、誰これー!

反射的に戸棚によじのぼり、背中の毛を逆立てた。
長靴に隠れ、様子を伺う。

「おまえまで……俺だよ、カールだよ」

カール？

カールとはたぶん彼の名だ。

「なーう？」

「んん？それ、カールって言うてくれるのか？

そうだ、カールだよ。おまえを拾ったカールだよ」

見知らぬ人が私に手を伸ばす。

だって、だって、違うよ？

髭はきれいさっぱりなくなってるし、錆色の髪は短くなって前髪だけ顔の両側に垂らしていた。

すつと通った鼻筋といい、きりつと引き締まった口元といい、ちよつとかつこいいとか思ってしまう。

変わらないのは深い碧の瞳だけ。

「おいで」

呼ばれて、彼の大きな手におそろおそろ近づいた。

人差し指で喉を撫でてくれる。

この手。

やっぱり彼だ。

ああ、びっくりした。

「なーう」

「そっだ、カールだ。どっだ、似合っか」

「んなー」

「ははっ、そっか。驚かせて悪かったな。さあ、夕飯しゆうばんにしよう」

6 変化（前書き）

ルウ視点が続きます。

6 変化

カールに拾われて一週間が過ぎた。

「ただいま」

「んなー」

玄関でのお出迎えも習慣となりつつあった。

日中はぽかぽかの窓辺でまどろみ、夜はカールと一緒に風呂に入ってご飯を食べる。

一緒のお風呂って、もっと恥らった方がいいのかもしれないけど、はじめにおじさんだと思ってしまったせいか、カールが私を猫と信じきっているせいか、あんまり意識したことはない。

「すぐ夕飯にするからな。今日は^{シェーブル}山羊チーズをもらったが・・・^{おまえ}猫にはやらないほうがいいのかな」

^{シェーブル}山羊チーズ！

大好き！！

パンに塗ってオーブンで焼くととろりとやわらかくなっておいしい。

「んなっんなっ」

「おいおい、興奮するなよ。欲しいのか？ うーん、でも塩分がな

あ。

「ちょっとならいいか」

「んにゃ〜」

カールの足に頬をすりよせる。

片手で抱き上げられて、肩の定位置に納まると、カールの頬にちゅつとキスをした。

人間だったら絶対にできないけど、子猫ならば許されるでしょ？

山羊チーズのためならば、いくらでも愛想をふりまくのだ。^{シェーブル}

とたんにでれつと相好を崩したカールが、鼻歌を歌いながら夕食の支度を始める。

毎日作らせちゃってごめんね。

人の姿なら私がつってあげるのだけど。

ここところカールは、毎日お土産を持ってきてくれる。

髪を切ってから、村人や隊の人たちと話をするようになってきたらしい。

私といるときのカールはすごくおしゃべりで、他の人とうまくいってないなんて不思議。

表情も、はじめ怖いと思ったのが嘘のように、やわらかく笑うようになった。

「おまえのおかげだ、ルウ」

カールはよくそう言う。

私こそカールに拾ってもらえたから、今こうして生きているのだ。感謝してもしきれない。

カールのために立派な猫になろう！

そう決心して、私は寝台にもぐりこんだ。

夜中。

なんだか体がむずむずして目が覚めた。
温かな寝床を出て床に飛び降り、うーん、と伸びをしてみる。
窓の外を見ると、すっかり細くなった月が中天にかかっている。

「・・・・・・・・」

月を瞳に映した瞬間。

自分の体が宙に溶け出すような、奇妙な感覚にとらわれた。
闇と己の境目がなくなる。

自分が何であったのか、わからなくなる。

カール・・・・・・・・！

寝台に眠る彼に手を伸ばす。

自分の手が視界に入って驚いた。

なんてこと！

そこにあったのは真っ白な毛におおわれた小さな脚ではなく、つるりとした人間の手だった。

慌てて台所に向かう。

それですら、素足がひたひたと猫にはありえない音を立てた。

もうわかっていたけれど、一縷の望みをかけて水瓶をのぞきこむ。

ああ、やっぱり。

そこに映るのは、真っ白な髪に赤い瞳の少女。
親に捨てられ、誰にももらい手がつかなかった、気味の悪い子ども。

『成功するかしないかはあなた次第』

『この魔法はルチノーちゃんがもう猫を辞めたいと思った時か生活
が安定したときには解けるようにしておきます』

エメさんの言葉がよみがえる。

私は猫を辞めたいと思ったのだろうか・・・人間ならばカールにこ
はんを作ってあげられると思った。

生活は安定したのだろうか・・・カールのおかげでこの一週間は何
の不安もない日々だった。

・・・だから人に戻ってしまったのか。

猫だからカールは拾ってくれたのに。

猫だからカールの側にいられたのに。

こんな私を見たらカールはなんて言うだろう。

きつと気味悪がって追い出すに違いない。

騙されたといって罵倒するかもしれない。

私は猫でなければならぬ。

猫じゃなくなったらここにはいられない!!!!

「・・・ルウ？」

寝室からカールの呼ぶ声がした。

私がないことに気付いたのだろうか。

ギシツと寝台を降りる音がする。
どうしよう。

狭い台所である。人になってしまった私には隠れる場所がない。

「ルウ」

近付いてくる足音。

嫌！だめ、来ないで！

がちやり。

扉が開いた。

「なんだ、いそなとじん台所にいたのか。

喉でも乾いたのか？」

水瓶の前。

体を丸めていた私は、いつのまにか猫に戻っていた。

「ルウ？どうした？」

固まって動かない私を気遣って抱き上げるカール。

一体今のはなんだだったのだろう。

大きな手のひらは、私をすっぽりと包んでくれた。

ゴロゴロゴロ。

現金なもので、それだけで私の喉はご機嫌に鳴ってしまふ。

「ははっなんだよ。急にいなくなるから心配したぞ。

まだ夜明けまでには時間がある。もう一眠りしよう」

寢室に向かうカールの肩に乗って、私は決心した。

もう人には戻らない。

私は猫でなければならぬ。

猫でなければここにはいられないのだから。

私はルウ。

白猫のルウ。

人であったことなど忘れてしまえ。

7 モテキとリボン

「あの、隊長さん、これよかったですら……」

兵舎での休憩時間。

若い娘が、赤いリボンで口を結んだ包みを差し出した。

「私が焼いたパンなんです。中に木の実が練り込んであります。お口にあうといいんですけど……」

「ああ、ありがとう」

受け取るときに、指先が触れた。

娘はかああっと頬を染めて、「いええ、あの、その、じゃあっ」とかなんとかもごもごと言って壁の向こうに走り去った。

なんだ、俺は危険人物か。

そんな反応をするなら、差し入れなどしなければいいのに。

「あーあ、やっぱりねえ。隊長モテモテっすね」

「モテ……?」

露骨に逃げられて仏頂面をしていると、ギョンターが話しかけてきた。

「あれ、サジの妹っすよ。」

うちの隊にいるでしょ。そばかすの浮いた細い奴。

妹はなかなかの器量よしだつて言つんで狙つてる奴も多いのになあ。

隊長相手じゃかないませんね」

「なんで俺が相手になるんだ」

「やだなあ、隊長、もしかして恋愛ことには鈍いんすか？」

得意とは言えない。

普通の女性と深い仲になったことはないから、恋愛なんてわからない。

相手にしていたのはもっぱら商売女だ。

「このところやけに皆いろいろくれると思つたら、そういうことか？」

「ですねえ。髪切つた途端これだもの、女つつうのはなあ」

香ばしい匂いを漂わせるパンは魅力的だが、そうとわかつたら安易に受け取るわけにはいかない。

「これは昼飯の時でも隊の連中にわけてくれ」

「いいんすか？別にこれくらいもらつても平気だとは思いますがよ」

「女は当分いらんと言つただろう。パン1つで隊員の恨みを買うのも嫌だしな・・・つとそうだ」

ギョんターに押し付けた包みから、リボンをしゅるりとほどき取つた。

「俺はこれだけでいい」

「……隊長？」

「猫だよ。首輪がほしいと思っていたところだったんだ」

赤いリボンを見たときから、ルウに似合いそうだと思った。

昨夜急にいなくなって心配したから、鈴をつけて首にかけてやるのもいいだろう。

鈴か。どこかにあっただろうか。

とりあえずはリボンだけでも良しとしよう。

「ただいま」

ルウがきてからすっかり習慣になった帰宅のあいさつ。

玄関を開けると、期待通りちょこんと座って俺を待っていた。

「な」

と鳴いてすり寄ってくる。

なんて愛らしいのだろう。

「ルウ。今日のお土産はこれだ」

上着の隠しからリボンを取り出す。

ルウはちょいちょいっと手を出したかと思うと、すぐに揺れる布先

に夢中になった。

「・・・だから、さ。からまるなよ」

数分後、リボンにぐるぐる巻きにされたルウがいた。笑いかみ殺しながらほどいてやる。

「これはここ。こうするためにもらってきたんだ」

首かけ、後ろ側で結んでやった。

白い毛なみに赤いリボンが映える。

「思った通りだ、よく似合う」

なんだろう、と言うように小首をかしげるルウ。

自分では見えないのだろう。

しかししばらくすると、前脚でリボンをひっかけてほどいてしまった。

「なんだ、せつかく結んでやったのに」

床に落ちていたりリボンを拾って、また結んでやる。

ルウがほごく。

俺はまた結ぶ。

それを何回か繰り返して、どうやらルウはリボンを嫌がっていることに気付いた。

「これ、嫌なのか？」

目の前で見せると、

「うなー……」

悲しげに鳴いた。

野良だから嫌なんだろうか。

首輪リボンをすると、俺の飼い猫になると思うから？

俺の……。

ああ、そうだ。

俺がリボンをつけたかったのは、心配したからなどではない。

ルウが俺のものだという、所有の印をつけたかったのだ。

でもルウはそれを嫌がった。

つまり、俺を飼い主だなどと認めてはいないのだ。

「ルウ……俺のこと、嫌いか？」

尋ねると、ルウはふるふると首を横に振った。

まるで人の言葉がわかってるかのようだ。

「これ、つけるの嫌か？」

俺はよつぽど辛そうな顔をしていたに違いない。

ルウが近づいてきて、頬を舐めた。

ざらりとした感触がくすぐったい。

玄関への出迎えといい、決して嫌われてはいないのだと思うけれど。

それでも、首輪リボンは嫌なんだよな……。

せつかくもらってきたリボンだが処分するしかないと思ったとき。

ルウがしつぽを差し出してきた。

「ここに結べって？」

「なー」

尻尾の先に、赤いリボン。

結んでやると、ルウは2、3度振って動作を確認したあと、尻尾を高く上げて居間を2周した。

胸をはり、ぴんと尻尾をあげて歩く。

「ははっ、そうしているとずいぶん上品に見えるな」

「んなー！」

俺が笑ったことに腹を立てたかのように、たしたし！っと足を叩かれた。

こいつ、本当に言葉がわかってるんじゃないのか？

ゆらゆら揺れるルウの尻尾の先で舞うリボン。

当初の予定とはちがったが、そこもなかなかいい。

「気に入ってくれたか？」

「なー！」

ルウがりボンをほどく様子がないのにほっとして、俺は夕飯の支度にとりかかった。

カールがリボンをくれた。
深い赤色をしたリボンは光沢があって、これまで見たどんなリボンよりもきれいだっただ。

首に結ばれて、はじめはうれしかったけれど、はっと気づいた。

もしこれで人に戻ったらどうなるんだろう。

リボンがほどけるか切れるかすればいい。

でももしそのままだったら？

人に戻った途端、私は窒息死だ。

だから尻尾に結んでくれたときには、ほっとした。

尻尾が人型になったときにどこの部分になるのかはわからないけど、首がしまるよりはましだろう。

せつかくカールが私にと持ってきてくれたものだから、大事にしよう。

針のように細い月が、わずかに室内を照らしている。
体がむずむずしてくる。
いけない。

私は2度と人にはもどらないんだ。

ぎゅっと目をつぶり、強く思う。

生きるために。

カールの側にいるために、私は猫じゃなきやいけないんだ。

8 夢

不思議な夢を見た。

純白の少女が隣で眠っていた。

つややかな白い髪の毛の端には赤いリボン。

なぜか驚くこともなく、彼女はルウだと思った。

目を開けることがあれば、その瞳はきつと紅玉のように美しく輝いているに違いない。

だから、いつもルウの背を撫でるように髪を一撫でして、そっと抱き寄せた。

「測量隊？」

「ええ、この村にも回ってくるみたいですよ。今日通知がきてました」

ギョウターに渡された書類には、目的やメンバーなどが書かれていた。

「地図作りか。何百年も前のあいまいなものしかないからな。滞在期間は一週間・・・兵舎に空きはあるのか？」

「5人すよね。家の近い奴は一時的に通ってもらいましょう」

「そうだな」

滞在中の身の回りの世話も頼む、とある。

食事の用意や洗濯など普段は自分たちでしていたが、村の女手を頼むことにする。

明後日には着くというので、早速午後から準備にとりかかった。そして夕方。

「俺、隊長の人気を舐めてました。」

ちよいと村の女に声をかけたら、ほとんど立候補しましたよ。どうしましょう」

「・・・色恋沙汰にならない女性めづにしてくれ」

「了解。明日面接しますから、立ち会ってくださいね」

「おまえだけじゃだめか」

「すぐ、すぐく面倒そうだ。」

俺の好みで選んだなどといわれたら困る。

「隊長見て赤面するようなのは失格っす。座ってるだけでいいからいてください」

「・・・わかった」

面接の結果、2人の女性に手伝いを頼むことにした。調理担当は、警備隊に孫がいるというヨシばあさん。

若い頃、街で料理屋をしていたらしい。

掃除・洗濯をしてくれるのは、スヴァルという背の高い、針金みたいに痩せた女性。

40近いようだが独身とのこと。

子どもを産めない体質だが世話は好き、ということ村の子どもたちを日中預かって乳母のようなことをしている。

今はちょうど誰も預かっていないそうので、測量隊の手伝いを希望した。

早速、食材の調達や部屋の掃除をしてもらう。

手が足りないところは隊員も手伝う。

ヨシばあさんは恰幅の良いばあさんで、孫(ヨゼフJr.)だった。

死んだと言う散髪屋の孫でもある。ということはヨシばあさんはその伴侶()を中心にすぐに打ち解けた。

調理場に早く慣れるため、と作ってくれた夕飯もとてもおいしかった。

スヴァルは穏やかで控えめな女性だった。

控えめ・・・というか存在感そのものが薄く、気付くと背後に立っていたりする。

軍人にあるまじき醜態だが、気配を全く感じさせないので驚きだ。仕事はゆっくりだが丁寧で、いつのまにか兵舎の中がきれいになっていた。

「女性がいると、隊が華やぐっすねえ」

「そうだな。あわただしかったが、こういつのも悪くない」

「あれ……隊長……」

「ん？」

「いえ、なんでもないっす」

にやっと笑うギョンター。

言いかけて途中でやめるなんて、気になる。

しかしどうせろくでもないことなんだろうと、忘れることにした。

「測量隊の到着は明日の午後の予定だったな。

俺はもう帰るが、後を頼んでいいか」

夕飯を兵舎で食べてしまったので、いつもより遅くなっている。

ルウは腹を減らして待っているだろう。

「ええ。お疲れ様でした」

見送るギョンターに片手をあげて挨拶をして、家路を急いだ。

夢を見た。

私は孤児院の前の道で、小石を拾って絵を描いていた。

「これがまあま、これがばあば」

実の両親の面影を覚えていたころだから、4、5歳かな。丸を組み合わせただけの絵だけど、本人は大好きな両親のつもりだ。そのころはまだ、いつか迎えに来てくれると信じていた。母親はドレスを着て、父親はマントをつけている。前日にも読んでもらった絵本の影響か。

「あ、おひめさまにはティアアラがなくちゃね」

仕上げに頭飾りと王冠を描こうとしたところに、

「ルチノーじゃんか！なあにしてんだよッ」

ザツと足が割り込んできた。

土埃が舞い、絵がかき消される。

「あ、ごめんなあ。わざとじゃねえんだ。あははははは！」

「アヒム……」

同じ孤児院の、私の後からやってきた3つ年長になる男の子だった。院長先生の前ではいい子だけど、陰で私をいじめていた。

「うつわ、気持ち悪い。」

赤目でにらむんじゃねえよ。呪われるだろ」

「にらんでない。見てるだけ」

「同じことだよ！真っ白な髪といい、不吉な見た目のせいで捨てられたんだろ！」

ぐいっと髪をひっぱられた。

「やめて！捨てられたのはアヒムだって一緒でしょ！」

「うるせえな！俺は預けられたただだよ！てめえと一緒にすんじやねえー！」

言い返したら酷くなるのはわかってたけど、生来おとなしいほうではない。

特に小さいころは何でもはっきり言っていた気がする。

向かっていっても、子どもの3歳差はとてつもなく大きくて、いつも傷だらけになるのは私だった。

「ふん！いちいち逆らうんじやねえよ。」

おまえは俺におとなしく殴られてりやいいんだよ。

おまえを殴るとなあ、なんでかすつきりするんだ！

親に捨てられたおまえが俺の役に立ってるんだぜ！喜べ！」

アヒムは、おなかや背中、お尻など、服で隠れるところばかり狙って殴ったり蹴ったりした。

院長先生に心配をかけたくない私は、傷やあざを誰にも言わず、アヒムが孤児院を去るまでの2年間、ただ耐え続けた。

彼の親が迎えに来たのか、他の人に引き取られたのかは知らない。

あの頃はつらかったなあ。

カールの家の窓辺で、まどろみから目覚めた。

あれ、今日はちょっと遅いんだな。

いつも夕暮れ時には帰ってくるのに、もう日は沈みきって暗くなっていた。

寝すぎたから、嫌な夢をみたのかな。

夢の残滓が体にまとわりついていているような気がして、ぷるぷると身を振った。

あれは過去。

どんなにつらいことがあっても、私の親は迎えになんて来てくれな
いと思いついた日々だ。

歩く拍子に尻尾がゆれ、赤いリボンが目に入る。

大丈夫。今の私は幸せ。

カールがいるから。

赤目をこのリボンのようにきれいだと言ってくれて、白い毛並みを
優しく撫でてくれる。

私の居場所はここなんだ。

「ただいま」

「んー」

ようやく帰ってきた彼と、いつものやりとり。
カール、大好き。

9 舐めてみました

家に帰ると、出迎えたルウが俺の手を経て肩によじのぼってきた。

「すごいなあ、自分で一気に登れるようになったのか。少し大きくなったのか？」

ゴロゴロと喉を鳴らしながら、耳元に頭をすりつけてくる。髭が頬にあたってくすぐりたい。

「ははっ、どうしたんだ。今日はやけに甘えてくるじゃないか。帰りが遅かったからかな。ごめんな」

ひとしきりルウを撫でまわしてから、ヨシばあさんにもらった夕飯の残りを食卓テーブルに並べた。

鶏胸肉の香草焼きは、皮をとって細かく裂いてやる。

野菜の煮込み・・・は玉ねぎが入っているな。

豆だけ取り出して、指先でつぶしてルウの口元に持って行った。はぐつと豆を食べ、「んなー」と鳴いた。

おお、俺の手から食べている。

感激して次の豆を差し出した。

これも食べる。うれしい。

「うまいか。まだあるぞ」

次々と豆を与えるうち、俺の手は汁だらけになってしまった。ルウが、小さな舌で指の間や手の平の汁を丁寧に舐めとっていく。

そういえば、昨日は妙な夢を見たな。

隣に眠るルウが少女になっていた。

よくは覚えていないが、16・7歳といったところか。子猫だと思っていたけれど、人間の年にすればそれくらいなのか。あまり大きくならない種類なのかもしれない。

指を舐めるルウの姿が、昨夜の少女と重なる。

人型でこんな風に舐められたら・・・？

「うわ！」

立ち上がった拍子に、椅子がガタンと大きな音を立て、倒れそうになった。

驚いたルウが飛びのいて、机テーブルの端から不思議そうに俺を見る。

「あ、いや、すまん。ちょっと・・・」

口元を押さえ、しどろもどろになる。

頬が熱い。

「俺・・・何考えてるんだ・・・。欲求不満か？」

それとも最近秋波を送ってくる村の女性陣に影響されたか。立っただけでに台所で手を洗う。

深呼吸をして戻ると、ルウは鶏肉をほおばっていた。

気を取り直して話しかける。

「ヨシばあさんの料理はうまいだろう。俺のよりいいか？」

ルウが喜ぶなら、毎日わけてくれるように頼んでみるか。

ルウはちらりと俺を見たが、返事はせず残りの鶏肉にとりかかった。なぜルウが人型になるなんて夢を見たのかはわからないが、なれるものならなってみてほしい。

いや、不埒なことを考えてるわけではなくて、ルウが何を考えているのか、話してみたいから、だ、ぞ。

自分で自分の考えに言い訳をしながら、豆のなくなった野菜煮込みを口に運んだ。

昨日のカールは、ちょっと様子がおかしかった。

お夕飯のときは急に立ち上がって真っ赤になってたし、お風呂のときも私を洗っていたかと思うとぴたっと手が止まってしまった。

カールがいつまでも固まっているから、たしたし！と叩いてみたら、慌ててお湯をかけられて耳に入った。

仕返しにぶるぶると体を振って、しぶきを飛ばしてやった。

「わー！やめろ、ルウ」

「んなーッ」

「俺が悪かった。そう怒るなよ」

苦笑しながらあやまって、ふかふかのタオルで拭いてくれた。
しょうがない、許してあげよう。

寝台では、カールの胸の上で丸くなった。

「俺も意識しすぎだよな。明日から客が来るんだから、しゃんとないと・・・」

「んな？」

お客さん？

「兵舎に測量隊が滞在することになったんだ。

手伝いで女性も2人来るんだ。

今日の夕飯は調理担当のヨシばあさんが作ってくれたやつなんだ。
うまかっただろ？」

ちよいちよいつと指で鼻先をくすぐられたので、あぐつと噛んでみる。

どおりでいつもと味付けが違ったわけだ。

香草が効いていて、おいしかった。

その味を思い出し、甘噛みしていたカールの指をぺろつと舐めた。

「俺の指の話じゃないぞ？そうだ、おまえが舐めるから変なことを考えたんだ。ったく・・・」

ぶつぶつと文句を言いながらも、少し満ちてきた月に照らされるカールの瞳は甘い。

私を見て細められる深い碧の瞳がきれいで、身を起こしてじいっと覗き込んだ。

「どうした？」

彼の両目に私が映りこむ。

あらためて猫の自分を見て不思議な気分になり、小首をかしげた。彼の瞳の中の白猫も、首をかしげている。

ひげをふるわせ、鼻をぴすぴすと鳴らしてみた。

「くくつ・・・何してるんだよ」

カールが笑うと体が揺れて、私はずり落ちそうになった。

「おっと」

大きな手に支えられ、そのまま抱きすくめられた。

「かわいいなあ、ルウは。あつたかいし、いい匂いだ」

「んなー？」

カールも同じ匂いだよ??

上を向こうとしたら、顎で頭をぐりぐりされた。痛いっ痛いよっ

「ふぎっ」つと変な声が出て、カールをひっかいてしまった。

「痛いっえ・・・」

鼻先に血がたらりとたれる。

ありゃ、ごめん。

耳もひげも垂らして、カールの血を舐めとった。

「うなー・・・」

「ははっ、猫にひっかかれるなんて久しぶりだな」

痛かったはずなのに、それすらうれしそうに笑うカールに、胸がきゅんと締め付けられた。

私、こんなに甘やかされちゃっていいのかな。

幸せなのが不安だなんて、知らなかったよ・・・。

9 舐めてみました(後書き)

閑話でカールの妄想ルートがあるんですけど、R15でいけるんで
しょうかね(笑)。

ためておいて、お月様のほつに投稿しようかなあ……。

「おお！カール！！ヘルベルト！！ヴュストではないか！」

「ウーリー！！ヒューグラー……。なぜ貴様がここにいる」

測量隊の中に、見たくもない顔が混ざっていた。
事前にもらった書類には入っていないかつたはずだ。

「測量術をおこなえる魔術師が体調をくずしてな！
急ぎよ私に加わることになったのだ。」

僕ほどの高位の魔術師が、測量ごときに関わるなどめったにない
が、国の一大事業プロジェクトだからな。

頼みこまれて仕方なく参加してやったのだ」

「魔術師はみんな出払っていて、うちの師匠くらいしか暇な人いな
かつたんですよ。」

カール様、ご迷惑をおかけします……。」「

「シギも一緒か。苦労するな、おまえも」

ウーリー！！ヒューグラー。

俺が王都を追われるきつかけを作った魔術士おとこだ。
優秀な魔術師を多く輩出する家柄に生まれ、エリートコースを当然
のように歩んできた。

腰まである金髪に紫の瞳。ほとんど左右対称の整った顔立ち。

魔術士として最も適した容姿を持つ。

ただし性格に難あり。

生まれたときからちやほやされたためか、思い込みが激しく、自分の思い通りにならないと気が済まない。

傲岸不遜とは彼のためにある言葉と喋っている。

態度に見合うだけの力があるのが口惜しい。

付き人のシギはといえば、代々ヒューグラー家に使えてきた血筋で、魔術は全く使えない。

そのかわり、魔術の媒介となる特殊技能があるという。

よほど大がかりな術を使うときでないとその技能は発揮されないらしく、普段はウーリーの身の回りの世話をしているそうだ。

「なあにを2人でこそこそと話している！

さあ、部屋に案内しないか。

僕は当然最上階だろうな。他人の階下^{した}で寝る気はないぞ」

「兵舎は2階までしかないし、個室は全部2階だ。

どの部屋も同じつくりだから、文句は言うな……っと、シギの分は用意してなかったな」

「いいんです。師匠と同じ部屋で寝起きしますから。

この人、一人じゃ何にもできません。

あ！部屋だけじゃなくてごはんとかも1人分増えるんですねっ

やっぱり事前にご連絡しておくべきでした。すみません、すみません……」

「おまえの分くらい大丈夫だ。気にするな」

へこへこ頭を下げるシギ。

その間にもウーリーはさつさと階段を見つけて、部屋へあがってしまった。

「シギ！ 行くぞ。この僕が他の奴の後から行くなんてありえないからな」

「あ、師匠！ 待ってくださいよう。結構荷物が重いんですってば。では、カール様、お世話になります」

師匠と弟子は、騒ぎながら2階へと消えていった。溜息をつきながら見送ると、立派な口髭をたくわえた壮年の男が手を差し出してきた。

「カール殿、あいさつが遅れてすまん。

測量隊隊長、ゲオルグ「コルベだ」

「おっと、失礼。

警備隊隊長、カール「ヘルベルト」ヴュストだ。

測量が順調に進むよう出来る限りの支援をする。

何かあったらいつでもいってくれ」

握手をし、簡単に自己紹介をする。

他の隊員も特に問題なくあいさつを済ませて部屋へ入った。

「いやあ、変わった御仁っすねえ」

「ギョインター……」

ウーリーには気をつける。極力相手にするなよ。

何かあったら俺に言え」

「へい。隊長は大丈夫ですか？」

「一週間だろ。こらえてみせる。これ以上とばされるところもないだろうしな」

「ははっ。ま、隊長にとっては左遷先でも、俺らにとっては故郷ふるさとな
んで。

測量がうまくいくように尽力しますよ」

「・・・すまん。言葉が過ぎたようだ」

「いいんすよ。田舎なのは事実っすから。

でもちよつとずつ愛着を持ってもらえると嬉しいです」

「ああ」

愛着ならすでに十分持っている。

ルウと出会えたこの土地を、忘れることはないだろう。

「隊長さん」

「うわっ」

背後から急に話しかけられ、驚いて振り向くとスヴァルがいた。
この俺に気配を悟らせないのがすごい。

「いねいんぞ」

何かと試ってみれば、その手には絆創膏。

「鼻の頭、猫ですか？」

「うちにやんちゃな子猫がいてね。昨夜ひっかかれたんです」

もうかさぶたになっていたが、それゆえに気になっていじっていたらしい。

指先でさわると、ほんの少し血がついた。

「私も、猫、好きなんです。今度会わせてもらえませんか」

「ええ。本当に子猫だから、もう少し大きくなったら兵舎に連れて来ます。」

白猫で、すごくかわいいですよ」

ルウの話をするとつい顔がにやけてしまう。

スヴァルの猫好きというのは本当らしく、自宅にもたくさん猫がいること、それぞれの猫の好物、愛らしい動作、猫同士の関係などを楽しそうに話す。

俺も辺境（こ）にきて初めての猫話に、つい熱が入る。

「おおっと、思わぬ伏兵登場……。隊長は年上好み？」

過去を知ってそうな御仁といい、一混乱ありそうだね」

「ギョインター？ 何か言ったか？」

「なんでもないっすー。ちと部屋の様子見てきますね」

「ああ、頼む」

気付けば、兵舎の入口には、俺とスヴァル以外誰もいなかった。

うーん、ルウのことならいくらでも語れるな。

「ルウちゃんによろしくです。あとでヨシさんにだしを取った後の煮干しをもらっておきます」

「ありがとうございます。スヴァル家の猫たちも後で紹介してください」

「はい」

測量隊の歓迎会も兼ねて、その夜は兵舎の食堂で食事をとった。

ルウが待っていると思うと酒を飲む気にはなれず、適当な理由をつけて断った。

「カール＝ヘルベルト＝ヴュスト。君はそのうち僕を頼るようになる。」

今のうちに恩を売っておいた方が得策だぞ」

そろそろ皆酒がまわりはじめた。

帰る頃合いかと思っていたら、酒瓶片手のウーリーが隣に腰かけた。

「たとえ何が起ころうとも貴様だけは頼るまい。」

余計なことは考えず、きっちり測量しじゆして早く帰れ」

「今の台詞忘れるなよ。」

わずかだが、君からは魔術の匂いがする。

あとで泣きついても遅いからな」

「はっ。ウーリー＝ヒューグレーともあるつものが、つまらん脅し文句を使うようになったもんだ。

飲みすぎか？

シギ！ご主人様がお休みだ。部屋へ連れて行ってやれ」

「はい、ただいまあ」

「こら、シギ。カールのいう事なんて聞く必要はないぞ。僕は酔ってない。酔ってないったら・・・」

千鳥足で反論しても、説得力はない。

ウーリーはシギにずるずると引つ張られていった。

俺に魔術の匂いだと？

この3か月、魔術どころか呪符一つにも触れていない。防具や武具も、ごく一般的な物を身に付けている。

「思い込みもたいがいにしるよな」

食堂のそこかしこで、好き勝手に話の輪ができている。そろそろ退席しても影響はないだろう。

「隊長。ヨシばあさんから、これ預かりましたよ」

「煮干しか。すまんな」

ギョんターからほんのり温かい包みを受け取ると、心はすでにルウの元へ行っていた。

魚はあんまり好きじゃないんだよね・・・っていつか、はつきり言
って嫌い。

せっかくのお土産だけど、食が進まない。

「食わないのか？ スヴァルの家の猫は大好物だそうだがなあ」

スヴァル？ スヴァルって誰？

カールの話によくでてくるのは、ギユンターって人。

おいしいおかずを分けてくれるのはヨシばあさん。

あとはのんきな隊員さんたちの話をよくしている。

「おまえに会いたいって言ってたぞ。

今度俺と兵舎に行ってみるか？」

「なう！」

行く！ 行きたい！！

昼間いつも一人で、カールと一緒に行けたらいいなと思っていたの
だ。

「ははっ、よじ登るな。そうか、行きたいか。

測量隊が帰って落ち着いたら、とりあえず非番の日にでも遊びに
行くっ」

カールの休みは十日に一回。

いままでに2回ほど休みがあり、その度にたっぷり遊んでもらった。
一緒におでかけできるとなれば、もっとうれしい。

「そっいえば、ウーリーがおかしなことを言っていたな。

俺に魔術の匂いがするとかなんとかか。

今日は酔いつぶれていたからいいが、明日以降、兵舎で余計な話をしないでほしいもんだなあ」

ぎくり。

何それ。そんなことを言った人がいるの？

私のせいなのかな。

「ここの任期は3年だ。ほとぼりが冷めれば、それより早く戻れる可能性もある。

その時は一緒に王都に行こうな。

珍しいものがたくさんあるぞ」

脇の下に手を入れて私を抱き上げたカールは、楽しそうに目を細めてそう言った。

カール。

何年も先の話をしてくれるの？

そんなに一緒にいてくれるつもりでいるんだね。

王都に行けば、エメさんに会えるかもしれない。

私がそばにすることで、カールに魔術の影響がないか聞けるかな。

絶対人に戻らない魔術をかけてもらえるかな。

よおし、それまで立派な猫でいるぞ！

満月に近付いた月を背に、私は決意をこめて「なー！」と鳴いた。

「そうか、おまえも行きたいか。じゃあもつと食って大きくなれ」

・・・煮干し。

魚は嫌いだってばあ！

ぐいぐいと口元に押し付けられて、仕方なく食べた。
王都への道は遠いかもしれない……。

11 左遷のわけ

「隊長！ 隊長を巡って女性たちが刃傷沙汰おこしたから左遷されたって本当ですか！？」

「隊長！ 貴族の令嬢をとつかえひつかえして恨まれたあげくに左遷されたって本当ですか！？」

「隊長！ 王女様をもて遊んで捨てたから左遷されたって本当ですか！？」

「隊長！ 王都中に隠し子がいて養育費で首が回らなくなって借金したあげくに左遷されたって本当ですか！？」

「おまえら……兵舎50周！！」

1時間以内に戻らなかつたら10周ずつ追加だ！！！！」

出勤したとたん、隊員どもに囲まれた。

くそつ、ウーリーの奴、つぶれてなかつたのか。

「ええええええ！！」

「横暴！！」

「職権乱用！！」

「せめて答えを！！」

「今しゃべったやつ5周ずつ追加」

低い声で命じると、誰もが黙って走り出した。

「で、どれが本当なんすか？」

「ギユンター……おまえも走るか？」

「いえ、遠慮します」

ギユンターを隊員の見張りに残し、俺は足音も荒々しくウーリーの部屋へ向かった。

「貴様！ 仕事もしないで余計なことばかり言いやがって！」

「早いな、カール」ヘルベルト「ヴユスト。」

あいさつもなしになんだ、いきなり」

見ればウーリーは、兵舎には似合わない真っ白なテーブルクロスを机に敷いて、シギに給仕をさせて朝食をとっていた。

「貴様、馬鹿か……。」

測量はどうした！ ゲオルグ殿はとつくの昔に出かけただろう！」

「僕の出番はまだなんだよ。」

明日は満月。僕の力が最大まじゅつしになるときだ。

その時に一気にやったほうが、合理的ってもんだ。

ああ、僕ってやっぱり天才！」

「この人、食事に2時間かかるんです。」

隊のみなさんには呆れられて置いてかれました。

幸い、師匠の出番はほんとに後なんで」

優雅にナイフとフォークを扱うウーリー。

料理はヨシばあさんの作ったものだが、器まで取り替えているのでやけに高級そうに見える。

「……シギがそういうならそうなんだろう。」

しかし隊の連中にあることないことベラベラしゃべるのは話が別だ。

これ以上余計なことを言うようなら、測量が途中でも叩き出すぞ
「！」

「何が余計なことなんだ？」

ああ、さっきの騒ぎか。部屋こゝろまで聞こえたぞ。

華の近衛騎士だった君に貴族の女性陣が夢中になってたのも、贈り物合戦で鉢合わせた侍女が取っ組み合いの喧嘩をしてけがをしたのも、護衛した隣国の王女が君に本気になって国に連れ帰ろうとしたけど、“国に忠誠を誓った身ですので”って断つたのも本当じゃないか。

借金？ どこだかの孤児院の負債を肩代わりしたんだっけな。

おかげで子どもたちは全員行き先が決まるまでいられたとか。

結局閉鎖されることにはなつたけど、よかつたじゃないか」

「丁寧に説明するウーリーの後ろで、シギがぶるぶると震えている。

「そこまで知っていて、なぜ隊のやつらにいい加減なことを……

「！」

「隊長おおおおお……！！！！！！」

「うわっ」

ウーリーの襟首をつかんでなおも言いつのろつとしたところに、隊員たちがなだれこんできた。

「そういうことだったんですね!」

「いい男つてのは苦勞するもんすね!」

「孤兒院つてマジっすか! 俺、感動つす!」

「隊長! 一生ついていきます!!」

襟をつかんだまま、呆気にとられる。

ウーリーは食べかけの野菜をぱくりと口に含んで、素知らぬ顔で咀嚼を続けた。

くそつ。

こいつに関わると碌なことがない……!

明るい空に、白い月が浮いている。

出窓から庭を眺めていると、カールが撒いたパンくずに小鳥が集まってきた。

うずうずうず。

飛びかかりたい衝動に駆られる。

鳥め。

私がここから出られないのを知っていて、悠々とごはんを食べてるんだなっ

かりかりと窓をひつかいても、開くわけがない。
人間なら、こんな鍵くらい簡単に開けられるのにな。

いや、そもそも人間だったら、鳥に飛びかかりたいなんて思わないか。

出窓の鍵は、ちょうちょみtain形の金具を回して開けるタイプ。
ピンクの肉球がついた前脚では、到底開けることはできない。

ぱたん、ぱたん。

尻尾を揺らす。

暇だなー。

カール、今頃何してるのかな。

11 左遷のわけ（後書き）

カールはばたばたしてますが、ルウはのんきなものです^^

12 左遷のわけ2

「おまえら、兵舎50周はどうした」

「ただいま走つているところであります！」

「兵舎の外とは言われなかったので、兵舎の中を！」

「そしたらたまたま話し声が聞こえて」

「決して、答えが気になつて追いかけてきたものではありません！」

「おま・・・なっ・・・」

敬礼をして背筋を正す面々。

赴任した当時は敬礼それすらできなかった。

3か月かかつて、ようやく形さまになつてきたのだ。

「ぶっ・・・どんな理屈だよ・・・」

ウーリーから手を離し、額に手の平を当てて宙を仰ぐ。

まったくもつて馬鹿馬鹿しい。

兵舎の中を走る奴があるか。

“気になつて追いかけてきたのではない”って、追いかけてきたと
明言しているようなものだろう。

「ぶ・・・くく・・・ははっ、仕方のない奴らだ」

笑いがこみあげてくる。
肩の力が抜けた瞬間だった。
髪や髭を隠し、他人を拒絶してきた。
ルウのおかげで、顔をさらすことはできたが、まだ壁があった。
それが今、取り払われた。

「た、隊長が笑った・・・」
「全開の笑顔・・・確かに凶器だ」
「やべ、俺惚れる」

最後の奴の台詞には、周りの隊員もざつと引いた。
俺だつてご免だ。

「そんなに仏頂面してたか？・・・してたな。すまないな」
「いえいえ、この間からね、ちょこちょこ微笑んではいたんですよ。
気付いてましたか？」

隊員が避けた後方に、ギョンターがいた。
どうせこの男がこいつらを連れてきたのだろう。
今は補佐官とはいえ、元隊長だ。

「雨降って地固まるってやつかい？」
よかつたな、シギ」
「もももも申し訳ありませんんんん！」

噂の出どころはこつちだったか。

「いいぞ。まあこつなったら自分からしゃべったほうがいい。

シギの言ったことはともかく、ウーリーの話はほぼ本当だ。
王女の誘いを断ったのがまずかったんだ」

しがない商家の三男坊だった。

体だけではかく丈夫に生んでもらったから、手っ取り早く職につこうと軍に入った。

元々向いていたのか上司がよかったのか、たいした苦勞もなく戦果をあげ、20代後半で国王直属の隊に入った。

男ばかりの騎士団にいたころはよかったが、近衛騎士として目立ったのが悪かった。

友人もできたが、敵も多かった。そんなところに隣国の王女の護衛話が舞い込んだ。

「ウーリーさんとは何の関係が？」

「元はこいつの仕事だったんだ。

それを面倒くさいとかなんとかいってたまたま廊下で会った俺に押しつけやがって。

それまでほとんどこいつとは面識はなかったんだぞ」

「面倒くさがったんじゃない。

占いで、王女の国の方角が僕にとって凶と出たから避けたまで。

あの日僕と君が出会うもの占いでわかった。

君にとっては幸福のカードが出たんだが・・・おかしいな」

「幸福・・・？　もしかしてそれでやけに俺と王女をくっつけようとしてたのか？」

「そつだよ。一般的に見ても逆玉の輿じゃないか。

それをまあすげなく断るもんだから、王女の自尊心プライドが許さなかつ

「たんだろうねえ」

食後のお茶をすするウーリー。
押しても引いても権力を使ってもダメとわかった王女は、最後は俺の部屋に忍んできた。

とんだ自尊^{プライド}心だ。

きつちり断つたが、泣きながら部屋を出た王女の姿を、近衛団長に見られたのが運の尽きだった。

それまで同情的だった友人も、冷たい目で俺を見るようになり、謹慎処分の上、辺境への赴任通知がきた。

「俺は誓って一切王女には手を触れていない。

誰も信じてくれなかったがな。

あのとき、団長さえいなければまだ言い逃れできたものを。

なんであの日に限って宿舎にいたんだか・・・いや、王女があんな時間にこなければ・・・」

「僕が占つたからだな」

「は？」

「王女に頼まれたんだ。カールと幸せになるにはどうすればいいかって。

王女と君とで占うとうまくいかなかったけど、君の幸せに絞って占ったら、あの日あの時刻に部屋を訪れればいいと出た。

王女はいそいそとでかけていったぞ」

「俺の幸せって・・・おかしいだろう。

団長に見られて、シギが言ったように王女をもてあそんで捨てたって噂がたった。

査問会じゃ、王女や王女の侍女が嘘八百ならべたてやがった。
結局冤罪で辺境へんきょうに飛ばされたんだぞ。
なんでそれが俺の幸せなんだよ」

「わからん。でも僕の占いは当たる！ 絶対いいことがある！」

「ああ、そうかい。

同僚には嫉まれ、友人にはさげすまれ、国王様にまで見限られた
貴様の占いは大したもんだな！」

「・・・ブルクハルト王は見限ったわけじゃない。

王女の趣味は結構有名だったからな。

気に入った男を国に連れ帰っては、自分のハーレムを作ってたらし
いぞ。

でも外交上の問題もある。あのまま王都にいたら、強制退役させ
られてたんじゃないか。

辺境への赴任は王の温情だな。きつと1年もしないうちに呼び戻
されるだろう」

「・・・そうなのか？」

そんな話があるとは知らなかった。

王女のハーレム？

金髪紫瞳、容姿秀丽のウーリーなんて、出会ったその日のうちに拉
致られそうさ。

占いというより、やはりごたごたに巻き込まれたくなくて俺に押し
付けたんじゃないか。

「隊長、王都に戻るんすか」

「せっかく仲良くなれそうだったのに」

「俺の初恋があ」

「馬鹿、黙ってるよ」

「猫どうするんすか」

「隊長の親馬鹿^{ねこ}ぶりを見るまでは帰しません！」

・・・なぜそれを知っている。スヴァルと話してたのを見られたか。

「僕が言うんだから間違いない。

なんならいつ戻れるか占おうか？」

「貴様の占いなど信じられるか。

帰還の命令はきていない。憶測で話をするな」

はじめは戻りたくて仕方なかった。

ルウに出会い、隊員や村人とのかわりが増えるにつれ、王都の華やかだが殺伐とした人間関係より辺境^{こて}のほうが好きになっていた。

「任期はわからんが訓練の手を抜く気はない。

50周と言ったら外周に決まっているだろう！

さっさと行け！」

話は終わりだと言わんばかりに一喝した。

「うへえ、覚えてたんすか」

「酷いっす」

「隊長も一緒に走ってみたらいいじゃないすか！」

「言ったな。俺に負けた奴は50周追加だ。

そら、ついてこい！！」

半分照れ隠しで、先頭をきつて走った。
俺を抜いたのはギョンターだけだった。

走り終え、2人して木陰にばかりと倒れる。
後続の隊員はまだ来ない。

「はあっ、はあっ……。おまえ、本当にただの牛飼いか？」

「ははっ……はあっ……。」

隊長こそ、都会の気障な軍人さんかと思いきや……おっと

「くくっ、それが本音か。」

まあこれで俺も晴れておまえらの仲間入りだな。
今まで以上にしごいてやるから、覚悟しろよ

「お手柔らかにお願いしますよ。カール隊長」

差し出された右手を、しっかりと握った。

「……今度は力比べっすか？」

ぎりぎり握りこめば、ギョンターも負けじと握り返してきた。

「握力にはちよつと自信があつてな」

「痛たたたた！ 降参っす！」

「これで1勝1敗だな」

「……隊長つてば、結構負けず嫌いっすね」

隊員たちがやってくるのと、ヨシばあさんが昼飯の支度ができたのを言いに来るのはほぼ同時だった。

「よおし、追加50周はメシの後でいいぞ。

寛大な隊長おれに感謝しろよ！」

「鬼！」

「悪魔！」

「脇腹痛え……。メシなんて食べないっすよ」

ぶつくさ言う隊員たち。

結局午後の訓練はなくなった。

昼飯中に村人が駆け込んできて、逃げ出した牛の捕物を頼まれたからだ。

まったく、これで何回目だよ。柵の強化をしなければな。

「というわけで、言うてからはかえってすつきりしたよ。

なんで隠してたのか……。人間不信だったんだな、俺も」

「なーう……。」

家路につき、ルウ相手に麦酒キールを呑む。

月明りに照らされ、ルウの毛は銀色に輝いて見えた。

「きれいだな。真っ白な毛も、赤い瞳も。」

おまえがきてから、俺の世界は変わった。

おまえも、俺といてうれしいと思ってくれてたらいいな」

「なう！」

「ん？そうか？」

ははっ。ルウがしゃべれたらいいのにな。

おまえがどんなことを考えているのか知りたいよ。

夢でもいいから、出てきてくれないか？」

思い描いたのはあの少女。

一度きりしか会っていないが、妙に印象に残っている。

「んあ……」

ルウの口が何か言いたそうに動いた。

「無理なこと言ったって？」

年経た猫は人型になるといふぞ。

でもなあ。実家で23年生きたという猫もとうとう人にはなれな
かった。

しゃべったとはいうがな」

気持ちよさそうにお酒を飲むカール。

王都もいろいろあるんだね。

王女様つてどんな人だったんだろう。美人かなあ。

王都にいたころは、カールの周りにはきつときれいな人がたくさんいたんだろうな。

こんなに格好いいんだもん、みんな放っておくわけない。

「ルウがしゃべれたらいいのにな。

おまえがどんなことを考えているのか知りたいよ」

えっ

私と話してみたいって本当？

人型になってほしいって本当？

でもきつと、本当に変化したら驚かれる。

驚くくらいならいいけど、気味悪がられたら？

カールに拒絶されたら、私はきつと生きていけない。

深夜。

窓の外に違和感を覚えて目が覚めた。

「この術の気配は・・・エメ女史か」

「フーーーーーッ」

カーテンの隙間から顔だけだと、空中に浮く金髪の男がいた。

「悪いものではないみたいだね。」

詫びがわりに、被ってやろうかと思ったんだけど。

カールの幸福は君か。

どんな事情があるか知らないが、バレたくなければ新月に気をつ
けるよ」「

どういうこと？

問い返す前に、男は宙に掻き消えた。

12 左遷のわけ2（後書き）

ぐだぐだと長くなって申し訳ありません。
何回か書き直したんですけど（TTT）。
あきらめてUP。

13 お茶

次の日、出勤したら測量が終わっていた。普通の魔術師なら3日3晩かかるところを、ウーリーは昨夜わずか1時間でやり遂げたらしい。

「満月だからね。僕の場合、新月だってその辺の魔術師じゃ足元にも及ばないけど」

偉そうにふんぞり返っていた。

測量隊が次の土地へ出発すると、いつもの日常が戻ってきた。訓練と村の雑用の日々。

家に帰ってルウと過ごすのが一番の楽しみだ。

「ん？」

洗濯をして、そのまま山積みになっていた服。

たたんで長持に入れようと思っていた・・・気がするけれど、片づけたんだっただか。

「なーう」

後ろ脚で立ち上がったルウが、俺の足にじゃれつく。抱き上げると、口の端を舐められた。

「明後日の休みに兵舎に行くか」

「んな！」

「ははっ。うれしそうだな。うちに来て以来の遠出だものな」

肩に乗せると、頭によじのぼってきた。

重くはないが、ただでさえぶつかりそうな鴨居にルウをこすりそうになる。

寝台に腰かけ、開いたのは基本教練の本。

ページをめくるたび、ルウが前脚でちょっかいを出してくる。

「邪魔するなって。」

隊員どもに教えるのに見返したら、結構忘れてることがあったんだ。

普通の隊と近衛では違うところもあるしな」

前脚をどけようとした手にさらにじゃれつかれた。

後ろ脚は俺の頭に置いたまま、体を伸ばして前脚で手にしがみつく。

「ああ、また、噛むなよ、こら。」

歯がかゆいのか？　もしかしてまだ乳歯？」

たしか生後5か月から8か月くらいで生え変わるはずだ。

頭の上から降ろし、ルウの口を指で開けて歯の様子を見る。

「あー、乳歯かもなあ。通りで痛いわけだ」

針のように尖った歯を触っていると、ぽろりと1本とれた。

お、貴重。とっておくか。

そんなこんなでルウをかまっていたら、あっという間に夜が更けてしまった。

朝。

出がけに思い出して、ルウの口の中を確認。
歯茎の腫れや出血がないか見る。

「ん、大丈夫だな」

よし、と仕上げに口づけてやった。

あれ、ルウが固まっている。

そういえば、俺からキスをしてやったことはなかったか。
ルウに舐められることはよくあるが。

「行ってくる」

「う、うなー・・・」

尻尾が逆立ってるのはなんでだ？

いつもルウに振り回されてばかりだから、たまには動揺させるのもおもしろい。

毎朝の習慣にしよう。

「隊長、顔がにやけてますけど、どうしたんですか」

「・・・なんでもない」

兵舎の隊長用の部屋。

香草茶を運んできたギョウキョウターに見られてしまった。
いかん。勤務中はルウのことは忘れよう。

真面目な顔を心がけ、昨夜読み途中になってしまった教本を開く。

「隊員たちは、これは持っているのか？」

「ああ、兵舎の談話室に1冊くらいあったかと思いますが、全員のはないっすねえ。」

字が読める奴ばかりじゃないし」

「なるほど。基礎がわかってないわけだ。」

写本を作るのはどうだろう。字の練習にもなるだろう？」

「一人一冊はきついつす。これから収穫の繁忙期ですし。」

各章ごとに写させて、とりあえず5冊くらい隊の備品にしますか」

「それでいい」

配分はギョウキョウターにまかせた。

ウーリーの言葉をすべて信じるわけではないが、任期満了までいなかもしれないことを考えると、できるだけのもものは残してやりた
い。

「ん、これうまいな」

何気なく口に運んだ香草茶は、優しい花の香りがした。

「村人の差し入れっすよ。牛の捕物のお礼。村のひそかな名産だっ

たりします」

「へえ、そうだったのか」

窓の外を見ると、木板と金槌を持った村人が隊員と話していた。また何か頼まれたのか。

視界いっぱい緑が広がり、遠くには青い山々が見える。

赴任当初は苛立ちを覚えたこの風景も、いつしか心落ち着くものになった。

明日はルウをつれてきて、兵舎の中を案内してやろう。

勝手に歩き回らせるわけにはいかないから、どうしようか。

首輪は嫌がってたしなあ。

ルウは小さいから、俺の胸ポケットに入ってしまうかもしれないな。そうだ、そうしよう。

「隊長、また顔が・・・」

「ほっとけ、どうせ家の猫のことでも考えてんだろ」

「あんな人だったとはなあ」

「俺、修理の許可もらいにきたんだけど、話しかけていいかな」

「もうちょっと黙っとけ。おもしろいから観察しようぜ」

「・・・おまえら、戸口で何をしている」

「補佐官！」

「しいー！」

「ん？ どうした？」

振り向けば、入口で押し合っている隊員とギョウター。

「あ、いえ、井戸の蓋が割れたから修理してくれて頼まれました」
「結構古そうなんで、どうせなら新しく作っちゃまおうかと思うんですが」

「一人じゃ無理だから、何人かで行っていいですか？」

「ああ、行ってこい。」

せつかくだから、他の井戸の蓋も確認してくるようになり。
誰か落ちたら危ないからな」

「はい！」

敬礼して、足取り軽く駆けていく隊員たち。

「急に隊員たちに甘くなつたんじゃないっすか？」

「愛着を持ってといったのはおまえじゃないか」

「おや……それはそれは」

食えない補佐官は、にやりと笑って細長い紙袋を俺の机の上に置いた。

「さっきのお茶の葉っすよ。ご自宅用にどうぞ」

「いいのか？」

「うまいって言うてくれたのが、俺もうれしかったんでね。あとこれも」

ギョントーが差し出した小袋には別の茶葉。

「スヴァルが隊長にどうぞって。

猫って寒くなると水を飲まなくなるんすか？

「このお茶ならよく飲むそうですよ」

「へえ。後で礼を言わねばな」

あまり気温の変化のない王都と違って、この土地は冬になると雪が積もるといふ。

あと2か月ほどで冬が来る。

「冬の間は兵舎に住みますか？

一人暮らしはいろいろ不便でしょう」

「うむ・・・考えておく」

明日ルウを連れてきた様子次第だな。

14 お出かけ

カールとのお出かけを、前の晩から楽しみにしていた。

家から歩いて15分ほどの兵舎は、石造りの2階建。
小高い丘の上にあった。

右が国境で左が村だと、カールが教えてくれた。

国境の方角には茶色い柵が点々と見えただけ、それ以外は見渡す限り緑が広がって、遠くの山々がとつてもきれい。

馬屋には馬じゃなくて牛がいた。

武器庫にも、武器じゃなくて農機具とか大工道具とかが入っていた。

うーん、ここって警備隊の兵舎だよねえ。

これでいいのかなあ？

「まああ、かわいい！

この子がルウちゃんですねー！」

ひとしきり兵舎をまわったあと木陰で休んでいると、やってきたのは細い女の人。

院長先生よりは若いけど、それなりの年だと思つ。

「聞いていたとおり、真つ白な毛。

ふわっふわですね。瞳もなんてきれいな」

「そうでしょう。毎日風呂に入れてますからね」

「毎日？ 大丈夫ですか？

入れすぎはよくないって言いますけど・・・」

カールの服から顔を出す私に、その人が手を伸ばしてきた。

カールは、はじめ私を上着のポケットに入れようとしたんだけど、さすがに入れなくて、ボタンを2つ外した襟元に落ち着いたのだ。あつたかいし、カールにくつつけるし、ここ最高！

でもこの人はキライ。

さつきからカールはデレデレと相好を崩して猫談義。

そういう顔は家の中だけにして！

しかもお風呂に入っちゃだめって何？

余計なお世話だよっ

お風呂が好きな猫だっているでしょう？

カールが入れてくれなくなったらどうしてくれるのっ

そんな思いがあつて、シャー！と牙を剥いた。

「あれ、どうしたんだ、ルウ」

「私、嫌われちゃったみたいですね。

家の猫の匂いがするのかもしれない」

猫を飼っている女の人。

細くて影が薄い。

そっか、この人スヴァルさんだ。

煮干しをくれた人だよね。
魚嫌いの私になんてものを勧めてくれるの。
やっぱり嫌い。

ぶいっと横を向くと、カールが頭を撫でた。

「仕方のないやつだ。確かにいままで他の猫に会ったことはないからな。」

すみませんね、スヴァルさん」

「いいえ、いいんですよ。」

うちの子の中にも焼きもち妬きがいるからわかります。
ルウちゃんに触ったら、きつと家に帰ってから大騒ぎします」

「ははっ、焼きもちね。」

そうなのか？ ルウ」

「んなさ」

別に他の猫の匂いがカールや私につくのが嫌なわけじゃなくて、スヴァルさんが嫌なだけだ。

焼きもち。

焼きもちか。そうかもしれない。

家に帰ってからはいつも2人きりだから、他の人と居るカールを見るのははじめて。

私だけのカールだと思っていたのが、そうじゃないってわかった。よかった。

「白猫は気難しい子が多いですね。」

でも会えてよかったです」

「ああ、わざわざ来てくれてありがとうございました」

あの人、私に会いに来てくれたの？
ちよつと悪いことしたかな。

カール、怒る??

不安になって見上げたら、スヴァルさんと話してたとき以上に顔をくしゃくしゃにしたカールがいた。
怒るどころか嬉しそつだつた。

「そつかあ、焼きもちか！ 大丈夫！ 俺は他の猫に浮気なんかしないからな」

猫だけじゃなくて、女の人もだめだよつ

ついで、そう思つてしまった。

私、こんなに独占欲強かつたつけ。
カールの側に置いてもらえればそれでいいと思つてたけど、どんどん警沢になつてるな。

「隊長・・・予想以上の親馬鹿ねこつぶりつすね・・・」

「この間までの無口無表情の面影はこれっぽつちもないつす」

「他人ひとの趣味に口を出す気はありませんが、一線を越えたら左遷どころじゃすみませぬぜ」

「おまえら、どこから聞いていた・・・」

あつ

この人たちがのんきな隊員さんたちね。

ひよろりとしたそばかすの人がサジさん。
くりくりの短い髪の毛が似合う、男の子って言うてもいいような人
がヨゼフJr.さん。

背の低い、がっしりした人は誰だろう。

ギユンターさん？は違うよねえ。

あと誰がいたっけ。

ブルーノさん、カリストさん、ダニエルさん、ディルクさん……。
カールの話に出てきた名前を一生懸命思い出す。

あ、きつとフェリクスさんだ。

名前負けのごつい人がいるって言ってた。

思い出してすっきりしたところに、兵舎の2階の窓から声がかかっ
た。

「隊長！

メシ食っていきますよねー？ ヨシばあさんの差し入れがありま
すよー！」

窓から顔を出したのは、くすんだ金髪の男の人。

あの人がギユンターさんだ。

近くで見れば、瞳は灰色グレーだろう。

お昼ご飯はヨシさんの差し入れね。

ヨシさんのごはん、おいしいんだよね

「どうする？ ルウ」

「んなつんなつ」

もちろん食べます。

「へえ。言葉わかるんすか」

「利口だなあ。俺んちの猫なんて生意気なばっかりで全然可愛くないっすよ」

「隊長がメロメロになるのもわかりますね」

「メロメ・・・まあ否定はしない・・・」

軽口をたたきあうカールと隊員さん。

ほんとに仲良しになったんだね。よかったね！

兵舎の食堂で。

隊員さんに囲まれて、おいしいごはんをお腹いっぱい食べた。

午後は、ギョウターさんが貸してくれた釣り道具をもって、湖にいった。

私も尻尾をたらししてみようかと思ったけど、大切なリボンが汚れるからやめた。

カールはじつと釣り糸を見つめている。

「なーう？」

どうしたの？

午前中はご機嫌だったのに、お昼くらいから機嫌が悪いような気がする。

スヴァルさんのことを気にしてるのかな。

その後は私も反省して、隊員さんたちには愛想をふりまくようにしてただけ。

釣り糸の先の浮きがぴくりと動いた。

カールが素早く引く。

餌だけとられてた。

湖の真ん中で、銀色の魚がはねた。

そう簡単に釣られないよ！

そう言ってるみたいだった。

「ああ、もうやめだ、やめ！」

釣竿を投げ出したカールが、草の上にごろりと横になる。

カールってば、「ちっ」て舌打ちした。

そんなこと、したことないのに。

怒ってるのかなあ。

苛々してるのかなあ。

こういうとき、どうしたらいいかわからない。

私を殴ってみる？

そんなことでカールが元気になるわけない。

アヒムじゃないんだから。

私ができることで、カールが喜ぶこと。

ひらひらと舞う蝶をかまうふりをして、一生懸命考える。

あ！ そうだ！

身をひるがえしカールの上に飛び乗ると、私は彼にキスをした。

気に入らない。

何が気に入らないって、ルウの態度だ。

午前中はよかった。

スヴァルに焼きもちを妬いて毛を逆立てるルウは、とてもかわいかった。

それだけ俺を好きってことだろうか？

でもその後がいけない。

なぜフェリクスの手から肉を食べる？

ブルーノには果物をもらっていたし、サジの手の平からミルクを飲んでいた。

ヨゼフJr.の頭の上に乗って、カリストが投げた豆を器用にはぐつと捕って拍手をもらってもいた。

俺とはそんなことしたことない。

ルウが皆に好かれるのはいいことだと自分に言い聞かせても、徐々に不機嫌になるのを止められなかった。

ギンターが釣竿を押し付けてくるのがもう少し遅かったら、俺はルウをひつつかんで帰っていたかもしれない。

あいつら、俺のルウにべたべたしやがって！

ルウもルウだ。

スヴァルの事は嫌がったのに、隊員には尻尾を振るってどういこうとだ。

雌猫だからか？

雑念だらけの俺に魚が釣れるわけもなく、釣竿を放り出して寝ころんだ。

ルウは俺の気なんぞ知らないで、蝶を追いかけまわしている。兵舎になんて連れて行くんじゃないやなかった。

冬の間も兵舎には住まん。

どんなに深い雪が降ろうとも、ルウと暮らすあの家から通う。

そう決めたら少し気が静まった。

おや？ ルウはどこにいった？

さっきまでそこで遊んでいたと思ったが……。

見失ったのは一瞬。

胸の上に慣れた重さを感じたと思ったら、口づけられた。花びらほどの、ささやかな感触だった。

驚いて見つめれば、お座りをして小首をかしげる。

「ルウ~~~~!!」

がばつと起き上がり、力一杯抱きしめた。

「ふぎっ」

「おまええええ、やっぱりかわいい！ かわいいなッ

俺以外には絶対にするなよ！・・・あれ？ ルウ？」

ぐったり。

失神してる？

「ルウ！ しつかりしろ！ ルウ!!」

ぺしぺしと顔を叩くこと3回。
目覚めたルウに、がりっとひっかかれて俺の休日は終わった。

14 お出かけ(後書き)

カール兄さんがどんどんあぶない人に・・・(笑)。

*** カールの休日 *** (前書き)

本編の流れからはみだした閑話です。

*** カールの休日 ***

今日は休みだ。

一日中ルウと遊べる。

ルウが来てからはじめての休み。

存外に楽しみにしていたらしい俺は、出勤日と同じかそれより早く目覚めてしまった。

ルウはまだ俺の隣でくうくうと眠っている。

時折ひげがびくつと動いたり、ピンク色の鼻がびすびすと動いたりするのは夢を見ているのか。

小さな前脚に指をかけて引っ張ると、ずるずると体が伸びた。それでも起きない。

「ふっ……熟睡しすぎだろう」

ころりとひっくり返すと、両脚を胸の前で曲げ、まんまるのおなかを晒した。

小さな舌が口から覗いている。

指先でつついてみると、はぐつと食いつかれた。

「ん？起きたのか？」

はぐはぐはぐ。

前脚で俺の指を抑え込んで食む^は。

「痛い。痛い痛い痛い！」

ルウ！寝ぼけてるな！痛いぞ！！！」

細く尖った歯が指先に食い込む。
振り落とそうと腕を上げたら、ルウもついてきた。
猫の一本釣り・・・いや、そうじゃなくて！

「・・・・・・・・・・？」

俺が一人で騒いでいると、ぼんやりと目を開けたルウがぼてっと落ちた。

何があっただらう、とか。

いま食べてたおいしいものはどこにいったんだらう、とか。
そんなことを考えていそうな気がする。

「おはよう、ルウ。」

おまえが食ってたのはこれ。歯形がついてるじゃないか。痛かったぞ」

ルウの目の前で手を振ると、ようやく焦点のあった瞳が見上げた・・・
かと思っただが。

「んなあああう」

あくび。

あくびか。

「おまえと遊んでいたら、寝台の上で日が暮れそうだな。
洗濯だけはしまおうか」

ルウを肩に乗せ、シーツをはがす。

洗って外に干して、朝食を摂ったら掃除。

「こら、邪魔だ。箒はきにじゃれつくな！」

「んなつんなつ」

「ご機嫌だなあ。おまえのせいでちつとも進まないんだぞ。家事を終わらせてから、思う存分遊ぼうと思ってるのに」

動かなくなった箒と俺を交互に見て、「んなつ」と鳴く。長い尻尾で床をたんと叩く。

「なんだ、動かさせていうのか」

ザザーッと箒を右に大きく振れば、ルウも右に駆けていく。左に振れば、ひらりと体の向きを変えたルウが飛びかかる。右へ、左へ。また右へ。

赤い瞳が爛々と輝いている。

「ぶつ……くくつ……。何がおもしろいんだかなあ」

箒の追いかけてこは、ルウが窓辺に寄ってきた鳥に気を取られるまま続いた。

「ルウ。おい、ルウ？」

掃除を終え、昼飯を片手にルウを呼ぶが姿が見えない。

さして広くもない家である。

そう隠れる場所もないと思うが……。

しまった！

玄関が細く開いているのに気付き、焦る。
朝洗濯物を干したときに、きちんと閉めなかったのか。

「ルウ！ どこだ！！ ルウ！」

「んなー」

名前を呼びながら玄関を飛び出すと、すぐ近くで声がした。
なんだ、脅かすなよ。

どうやって登ったのか、ルウは出窓の上から俺を見下ろしていた。

「おいで、ルウ」

手を伸ばすと、ぴよこんと飛び乗った。

外に出たついでにと、乾いた洗濯物を取り込む。

俺の肩を伝って降りたルウは、蝶やバツタを追いかけている。

「俺が留守の間、家に閉じ込めておくのもかわいそうだよな・・・」

一匹の黄色い蝶が、ルウの鼻先をかすめた。

ひらひらと舞い、飛んでいく。

ルウは身をふせ、じりじりと後をついていく。

緑の中に、真っ白な尻尾が揺れる。

だんだん遠ざかる後姿に、このまま声をかけなかったらどうなるんだらうと思う。

蝶を追って、どこまでも行ってしまっのか。

俺はまた一人に戻るのか。

「・・・・・・・・ルウ！」

己の想像に耐えきれなくなつて、短く名を呼んだ。
びくん！

草むらに小さな耳が見えたかと思うと、俺めがけて一目散に駆けてきた。

両手を広げれば、当然のように飛び込んでくる。

「んな〜」

肩に乗り、耳元に体を摺り寄せてきた。

「・・・・・・・・あまり遠くに行くな」

「なーう？」

カール。

そう言っていると思う。

俺が生まれる前母親が飼っていた猫は、「ごはん」としゃべったと言っていた。

「ママって呼んでくれたこともあるのよ」とも。

その時は鼻で笑っていたけれど・・・・。

「んあーうう??？」

今度は「大丈夫？」かな。

なんて、そんなわけないか。

親馬鹿もたいがいにしらないとな。

「ふっ……おまえがしゃべれたらいいのになあ」

ぽんと頭を叩くと、ルウは困ったように小首をかしげた。

「さ、午後は何をしようか。

家事は全部終わったから、たっぷり遊べるからな」

ルウをかまったりかまわれたり？するうち、あっという間に一日が
終わった。

湯船につかれば、満足の溜息。

シーツは日なたの匂いがして、心地よい眠りに誘われる。

「おやすみ……ルウ……」

次の休みは、何をしよう、な……」

ルウを撫でる指がだんだんゆっくりになる。

すうっ意識が遠ざかり、眠りに落ちていく。

「おやすみ、カール」

あれ……おまえ、今しゃべった……？

目を開けたいけれど、眠く……て……

窓から差し込む光に起こされる。

隣に眠るのは白猫のルウで、「おはよう」「と言えは」「んなー」と鳴いた。

昨夜しゃべったと思ったのはまた夢か。

「さてと。また隊員どもを鍛える日々か。あいつら緊張感ってもんがないからなあ。

じゃ、行ってくる」

「んなー」

繰り返される、いつもの日々。

一人と一匹。

かなうならば、いつまでもそばに。

*** お風呂 *** (前書き)

9話あたりのお話です。

ほのぼの路線からなっていますので、ご注意ください(笑)。

*** お風呂 ***

夕飯の後、ルウと風呂に入った。

手で湯をすくって体にかけてやると、白い毛がべったりと体にはりついて、なんとも情けない姿になる。

俺は風呂に入るたび、この姿がおかしくて仕方ない。

石鹸を泡立てて、体を洗う。

頭の後ろを揉むように洗うと、気持ちよさそうに首を伸ばす。

背中、尻尾の先まで洗って、次は腹。

手の平の上でルウをひっくり返し、喉から胸を撫でる。

ゴロゴロと喉を鳴らし、うっとり目を閉じて俺に身をまかせるルウ。

小さいなあ。

かわいいなあ。

30すぎの男が、風呂で子猫を洗って脂下がる姿など、とてもじゃないが人には見せられない。

子猫じゃなければいいのか？

たとえば夢に出てきたような……。

銀とも見まごう、つややかな白髪。

閉じられた瞳にかぶさる長い睫。

ほっそりした体を俺に寄せていた。

裸体だった彼女。

胸元にわずかばかりのふくらみを感じたような……。

たしたし！

ルウに叩かれて我に返った。

俺！

ルウを洗いながらなんてことを………！

どれくらい妄想にふけていたのか、ルウの泡はすっかりなくなつて、赤い瞳がにらんでいた。

手桶の湯を慌ててかけると耳に入ったらしく、「ふぎっ」と飛びのいてぶるぶると俺にしぶきを飛ばしてきた。

「わ！やめろ、ルウ」

「んなーッ」

「俺が悪かった。そう怒るなよ」

いつもならこの後一緒に湯船につかるのだが、先にタオルでルウを拭いてやって風呂場から出した。

ルウが人になるなんて、俺どうかしてるよなあ。

でも、元が猫なら体はやわらかいんだろっか。

首に指をはわせたら、喜ぶだろっか。

腕に抱いて、洗ってやったら……？

むくり、と俺の中心が反応した。

「……俺、終わってるな……」

猫に欲情するなよ。

浴槽の端にがつくりとうなだれて、ひとしきり落ち込んだ後、開き直って自分で又いた。

これは！ きつと、欲求不満だからだ。

辺境こゝに来てから3か月以上、女を抱いていない。

王都ならばいくらかでも処理できたものが、ここではできない。そのせいだ。

・・・たぶん。

*** お風呂 *** (後書き)

失礼しました・・・。

*** あいさつ *** (前書き)

13話のあとです。

未来パラレルがラストにちよこつと入ります。ルウ視点です。
早く人間になってくれないかなー(笑)。

*** あいさつ ***

歯が抜けた。

えー、人間のときはとっくに永久歯になっていたのに、猫になったらまた抜けるの？
不思議な感じ。

朝、カールを見送ろうと玄関についていくと、ひよいと抱き上げられて口を開けられた。

カールの太い指が、私の口腔を探る。

歯に異常がないか、見てくれているみたい。
間違っつて噛んじやわらないように気をつけなきゃ。

「ん、大丈夫だな」

そういつたカールは、ちゅっと私にキスをしてきた。
わわわ、な、なんで!？

ほっぺじゃないよ。おでこでもないよ!

口と口だよ!？

私の動揺をよそに、

「行ってくる」

と手を振るカール。

「う、うなー・・・」

猫でよかった。

人間だったら、きっと今の私は真っ赤な顔をしている。そのかわり、尻尾がばばふに逆立ってた。

それからというもの。

カールは朝起きたときと出掛けるとき、帰ってきたときと寝る前にキスをしてくるようになった。

何回かされるうちに、これは“あいさつ”だってわかった。

孤児院で育った私は、こういうあいさつをしたことがなかった。

時々お迎えが来てくれた子が、本当のお母さんに抱きしめられて顔中にキスをされているのは見たことがある。

孤児院を巣立って家族を持った人が、自分の子にキスをしているのも見たことがある。

家族の親愛のキス。

カールは憧れでしかなかったそれを、私にくれたのだ。

「おやすみ、ルウ」

カールの顔が近づいてくる。

あいさつだってわかってても、慣れるもんじゃない。

今日は勇気を出して、私からも口をくつつけてみた。

驚いたように開かれた碧の瞳が、すぐに細められ笑みの形になる。

端正な顔立ちが甘さを増す。

きゅんつと胸が鳴ったのは、きつと初めて自分からキスをしたせい。
あれえ？ でもあいさつのキスって口と口でするんだっけ？？
したことがない私にはわからないけど・・・カールが嬉しそうだからいつか。
私、猫だしね。

いくら家族でも唇にはしないと知ったのは、ずいぶん経ってから。

「カール・・・？」

「ん？ いや、猫だったからだ。」

君だって、俺のことさんざん舐めてただろう？」

抱き寄せられると、私は大柄な彼の腕の中にすっぽりとおさまって
しまう。

見上げれば、降りてくる唇。

「・・・ん・・・」

触れるだけでは足りなくて、ちろりと舐めて先をねだる。

「くす・・・舐めるのが好きなのは元から？」

「や・・・馬鹿・・・」

耳まで真っ赤に染まった肌を、隠してくれる毛はもうなくて。
うつむいて、厚い胸板で顔を隠そうとしたけれど、大きな手に妨げ
られて上向うわむかされた。

「ん・・・んんっ」

待ち望んだ深い口づけは、熱く甘く、私を蕩とかす。

「これも、家族のキス・・・？」

「家族になって欲しい人へのキス、かな」

1 雪（前書き）

ちよつと話が進みます^^

1 雪

カールに拾われて3か月が過ぎた。

猫の成長は早く、見た目はもう成猫と変わらない。
窓の外は大雪。

こんな中兵舎に通うなんて、大変だなあ。

「はあっ、はあっ……ただい、ま、ルウ」

走ってきたのか、白い息を吐いてカールが帰ってきた。

「なう！」

手袋をしていても、カールの指先は真っ赤になって冷たかった。

おかえりのキスをしてから、指と同じく赤くなっている耳を温めてあげようと、肩にのって首に巻きつく。

人なら部屋を暖めておくとかごはんを作っておくとかできるんだけど、猫にはこれが精一杯。

「おまえも寒かったらろう」

そんなことないよ。

日なたはぼかぼかして温かいから、窓辺で一日中寝てたの。

今も毛布にくるまってたから、大丈夫だよ。

そう答えたいけど、実際に声になったのは「んにゃう、なう」だった

た。

最近「なー」じゃなくて「にゃー」って言えるようになったのよ。

「やっぱり兵舎に引越したほうがよかったかなあ」

暖炉に火を入れながら、カールがつぶやく。

カールの苦勞を思うと、そのほうがいいと思うんだけど……。

この3か月で私が人間に戻ったのは4回。

どれも月が細く尖っているときか、闇夜だった。

あの金髪 of 魔術士が言ったことの意味がわかった。

月が欠け始めると体がむずむずして、特に新月の夜は変化しやすいのだ。

でも強く念じれば猫に戻れる。

幸い、カールが気付いた様子はない。

もし人の多い兵舎だったら、誰かにばれていたかも。

今月も新月が近い。

今夜当たり、危ない。

夜半。

眠ったカールの隣をそつと抜け出す。

椅子にかけられた外套に潜り込む。

きた。

体がむずむずして闇に溶け出す。

「ん……くう……」

手足が伸び、毛がなくなる。

視界が高くなる代わりに、寒さを感じた。
ぶるりと震えて、カールの外套にくるまる。

「カールの匂い……」

ひたひたと素足で歩く。

床がびつくりするほど冷たくて、指先が赤く染まった。

窓の外に目を向けると、地面に積もった雪が星のように輝いていた。

「きれい……」

どうせなら、昼間人型になれたらいいのにな。

お掃除くらいできるんじゃない？

この間、夜中に片づけを試みたときは、予想外に音が響いてあきらめた。

また雪が降り始めた。

小さい頃、院長先生に読んでもらった『雪の女王』という話を思い出す。

人の美しい面は小さく、醜い面は大きく映すと言う悪魔の鏡。

その鏡のかけらが目と心臓につきささった男の子は、心が凍ってしまつた。

男の子をさらった雪の女王は、『永遠』を見つけれたら悪い魔法が解けると話す。

「男の子を救ったのは、男の子のことが本当に大好きな幼馴染の女の子だったのよね……」

もし私とその鏡を覗いたら、どんな風に映るんだろう。

白い髪は逆立ち、真っ赤な瞳はきらきらと光るのだろうか。
いいえ、きつと自分のことばかり考えてカールに甘える心が、一番
醜く映るんだ。

雪の結晶が窓にはりつく。

四角いもの、六角形のもの、矢のように尖ったものなど、一つとし
て同じものはない。

雪はどんどん降り積もり、世界を白く染めていく。

私は出窓に肘をついて、幻想的な景色をいつまでも眺めていた。

1 雪（後書き）

『雪の女王』・・・アンデルセン童話です。

2 危機一髪！？

外套の折り方が違う。

昨夜は雪で濡れたから、袖口が上になるように掛けておいたはずだ。それが今朝起きたら下になっている。

乾いてはいたから、はじめから下だったわけではない。

椅子も濡れていない。

些細な違和感だが、はじめてではなかった。

先月だったか、後で片づけるつもりだった洗濯物が、すでに片付いていたことがあった。

知らぬ間に侵入した者がいる？

「まさか、な」

いくら辺境でのんびりしているとはいえ、寝ている間に誰か来たら目が覚める。

ルウだって騒ぐだろう。

「んにゃー」

「ん、行ってくる。」

今日行けば、2週間程休みだ。新年だからな。

今日は仕事納めで遅くなるから、夕飯も置いていくぞ」

水とちぎったパン、塩抜きした肉を皿に入れて机の上に置いた。

「あれ、隊長。報告書が1枚抜けてますけど？」

月例報告書を確認していたギョンターに言われた。

「む……。家に置いてきたな」

「1枚なら書き直しちまいますか」

「いや、晴れてるし、取りに行ってくる」

「はい、お気をつけてー」

文を書くのは得意なほうではない。

書き直すくらいなら取りにいったほうがいい。

雪が溶け、ぬかるんだ道を歩く。

急に俺が帰ってきたら、ルウはどんな反応をするだろう。

ちよっと楽しみだ。

家が見えてくる。

赴任したとき、兵舎に部屋を用意するといわれたが、他人と関わり合いたくなくあった俺は、一軒家を希望した。

ちよつと空き家があったので、少し手入れをするだけで住めた。

今となっては、ルウと2人で誰に気兼ねすることなく生活できてう

れしい。

雪道を兵舎まで通うのだった、ルウを独り占めするためなのだから、俺の親馬鹿ねこぶりも筋金入りだ。

鍵を開けて中に入ろうとして、違和感を覚える。

窓越しに、家の中に白いものが揺れているのが見えた。

ルウにしては大きい。

泥棒？

夜間ではなく、昼間に侵入していたのか！？

「誰だ！」

剣の柄に手をかけ、いきおいよく玄関をあけて飛び込む。

応いらいえはない。

慎重に足を運び、居間へ行く。

誰もいない。寝室か？

ばさり

音がした。

「動くな！！」

腰をかがめ一気に剣を抜き、切っ先を音の方向に向けた。

「……にゃあん……」

床に落ちたシーツの下から顔をのぞかせたのは、ルウだった。

「おまえだったのか。驚かすなよ」

窓から見えた白い影も、ルウが室内で遊んでいたものだろう。

「これ、ふりまわしてたのか？ 1人でつまらなかつたんだろう」

「んなーう」

タオルを拾ってたたみなおす。

床にはたくさんのタオルやシーツが散らばっていた。

ルウはごめんなさい、と言うように俺の足にすりよってきた。抱き上げると、口の周りを小さな舌でぺろぺろと舐める。

「ははっ、いいき。今夜もできるだけ早く帰ってくるからな。

ああ、今は忘れ物を取りに来ただけなんだ。じゃあな、また行ってくる」

ルウに口づけて、家を後にした。
もちろん鍵をしっかりかけて。

ルウのやつ、俺がいなくてときにあんな遊びをしてたんだな。

だからものの位置が変わることがあつたんだろう。

洗濯ものは、自分で片付けたのを忘れてたんだな。

ルウの知らない一面を見て、俺は鼻歌を歌いながら兵舎に戻った。
仕事納めはやはり忙しく、家に帰れたのは深夜だった。

あああ、驚いた！

自分の意志で、昼間に人型になれるか試してみたら、あっさりなれた。
裸のままでは寒かったので、シーツをかぶって部屋の掃除をした。

そしたら、机の下に書類が一枚落ちていたのに気付いた。
これ、昨日カールが書いてたやつだね。
落ちてていいのかなあ。

上質の羊皮紙ヴェラムに、几帳面な文字が並ぶ。
“字が読めれば職につながる”という考えだった院長先生のおかげで、私もある程度の字はわかる。

今年の警備隊の活動が書かれているようだった。
きっと忘れたんだなと思って机の上に置き、洗濯もしてみようかと思つてタオルをとつたところだった。

ガチャッ

玄関で、鍵の開く音がした。

「誰だ！」

鋭い誰何すいかの声。

とっさにシーツにもぐり、猫に戻れと必死に念じた。
間に合つて、よかつた……。

なぜかご機嫌なカールを見送り、窓辺で丸くなる。
それからカールは夜中まで帰ってこなかったけど、私は人型になる
うとはしなかった。

あんなに怖い目は、当分勘弁。

あ、また雪が降ってきた。

今年ももう終わりだなあ。

来年も、ずっとカールといられますように。

3 休暇（前書き）

小話3つ。

すべてカール視点となります。

3 休暇

*** 年越し ***

「新年おめでとう！」

とっておきの葡萄酒^{ワイン}を出して、ルウ相手に乾杯をする。

「おまえも飲むか？」

指先に葡萄酒をつけて、口の前に持って行ってみた。

くんくんと匂いを嗅いで、ペろりと舐めた・・・かと思ったら、いかにマズイ！と言う風に顔をしかめた。

「あつははは！ なんだ、その顔。酒はだめか。ちょっとくらいつきあえよ」

グラスを差し出すが、ぷいっと横を向かれてしまった。

「そっか。じゃあこれもいらないか？」

グリユイエールチーズをすりおろして葡萄酒^{ワイン}で煮溶かしたものに、パンをつける。

フォークで刺し、息を吹きかけて冷ましてからルウの前に差し出せば、はふはふと大喜びで食べた。

新年を祝う村の祭りに招かれた。

「新年おめでとうございます」

「隊長！ お元氣そうでなによりです」

「ご実家には帰らなかつたんですか？」

隊員たちやその家族、警備隊の活動で知り合つた村人たちと、楽しいひと時を過ごした。

「ただいま、ルウ」

「んにゃ〜」

温かな体を抱き寄せ、暖炉の前に座る。

あぐらをかいた膝の上にルウをのせて、お土産を広げた。

「ヨシばあさんが腕をふるつてたからな。どれもつまかつたぞ」

祝いの席で出された料理のうち、猫に食べられそうなものをもらってきた。

揚げたパンに砂糖をまぶしたものや、骨付きの鶏。

ルウの好物の山羊チーズなど。

自分もつまみながら、小さくちぎつたものをルウに食べさせる。

「甘いもの、結構好きなんだな。あ、こら、舐めるなよ。おっと」

口元についた砂糖を狙われて、顔中を舐められた。

逃げようとした拍子にバランスを崩し、後ろに倒れる。

そんな俺にはおかまいなしで、ルウは倒れた俺に馬乗り（って猫でもいうのか？）になって舐め続けた。

「もう好きにしろ・・・」

パチパチと薪がはぜる音がする。

ルウは満足したのか、俺の胸の上で丸くなっている。

ちよつとだけと勧められて飲んだ酒が効いたのか、眠くなってきた。どうせ明日も休みだ。

ここで寝てしまったとて、誰に咎められるわけでもない。

「ふああ・・・」

なんともいえない幸せな気分で、俺は眠りに落ちた。

*** 熱 ***

「はあっ・・・ふう・・・」

熱を出した。

暖炉の前で転寝うたたねをしたのがいけなかったのか。

それとも昨日雪かきをして、びつしより濡れたからか。
ルウと風呂で遊びすぎて、湯冷めしたのかもしれない。

思い当たることはたくさんあるが、とにかく今は熱がある。

かりかりかり

扉をひっかく音がする。

「だめだ、ルウ……。風邪、がうつつたら……。大変だからな。
今日は居間で寝てくれ……。」

なんとか声を絞り出す。

喉が痛い。頭痛も酷い。

せつかくの休暇なのになあ。

いや、休暇中でよかったか。隊のものに迷惑をかけたくないからな。

ぶるり。

寒気がする。

また熱が上がるのか……。

夜半。

額と首筋に、ひやりとした布が当てられた。

ほてった体に気持ちがいい。

白い手が頬を撫でる。

「お袋……？」

伸ばした手を優しく取って、寝具の中に入れられた。首筋の布を取り替えて、額の布も裏返してくれる。乾いた唇には、湿らせた布を当ててくれた。

「水……もつと……」

ねだると、水差しの水をそつと飲ませてくれた。

白い手が、汗ばんだ髪を撫でる。

頭なんて、久しぶりに撫でられた。

なんだか、すごく安心する。

瞼が重くなってきた。

すう………。

深い眠りが訪れ、俺は朝までぐっすり寝た。

「………ん………」

次の朝目覚めると、体がすっかり軽くなっていた。

起き上がって、うーんと伸びをする。

昨夜、お袋の夢を見た気がする。

熱で気が弱くなっていたのか。

寝台の上を見ると、布や水差しなどは見当たらなかった。

「お、ルウ、おはよう」

扉の隙間から、ルウがタオルをくわえて歩いてきた。

「ちょうど体を拭きたかったんだ。ありがとう」

「なーう」

タオルを俺に渡すと、ルウはすぐに寝室を出て行ってしまった。風邪がうつるから近寄るな、という言いつけを守っているのか。自分で言っておきながら、ちょっと寂しい。

早く治して遊んでやらないとな。

いや、遊んで欲しいのは俺か。ははっ。

4 空からきたもの

「隊長！ お久しぶりです！」

年明け。

兵舎の休みが終わり、総出で雪かきをしたり雪囲いをはじめたりする。

お昼には村人も手伝いにきてくれて、50人くらいの人出になった。

「隊長？ 誰かお探しですか？」

休みの間に届いた郵便物を抱えたギュンターが、俺宛のものを渡しながら聞いてきた。

「ん？ いや？」

「そうっすか？ さつきから若い娘ばかり目で追ってません？ そろそろ嫁さんが欲しくなりました？」

「馬鹿いなよ」

言いながら、視界の隅を通った白い影が気になった。なんだ、ヨシばあさんのエプロンか。

「若くなくてもいいんすね・・・ぐえっ」

腹を一発殴っておいた。

なんだか気になるのだ。
白い、白いもの。
思い出せそうで、思い出せない。
知っただけで、知っているわけではない。
なんなんだろう。

その幻想は、喉の奥にささった魚の骨のように、俺を苛んでいた。

はあ……。

カールの休暇、終わっちゃったな。

出窓に座って外を眺める。

2週間、ずっと一緒に楽しかった。

途中、カールが熱を出したときはびっくりしたけど。
元気になってよかった。

小春日和の今日は、ぽかぽかして温かい。

カールも今頃一生懸命兵舎を片づけてるのかな。

以前一度だけ連れて行ってもらった、兵舎の様子を思い出す。
みんなおもしろい人たちだったなあ。

透き通った高い空を鳥が飛んでいる。

なんの鳥だろう。

カラスにしては大きいな。

鷹？

鷺？

ん？

えっ、ええええ！？

「よつやく見つけた！ ルチノーちゃん！……！！！」

「ふにやなあう！？」

エ、エ、エ、エメさんだああつ

「なぜ貴様がここにいる」

「失敬だなあ。僕はただの案内人だよ。こちらのエメ女史が希少な猫を探してるっていうんでね。教えてあげたんだ」

空からやってきたエメさんは、ウーリーさんという魔術士さんと一緒だった。

ウーリーさんに会ってからというもの、カールの機嫌が悪い。

「カールさん。いきなり来て本当に申し訳ないのですが、ルチ……ルウちゃんをお借りできないでしょうか？」

「だめです」

「そこをなんとか」

「できません」

さつきからこのやりとりの繰り返しだ。

私を守るうとしてくれるカールの気持ちはうれしいんだけど……。

昼間。

窓から飛び込んできたエメさんは、悪い知らせを運んできた。

「ルチノーちゃんのお義母さんがね、病気なのよ。あなたに会いたがってるわ」

院長先生が!?

「猫になったあなたを一番心配してるの。親戚の人が孤児院の周りをくまなく探してくれたけど見つからなくて、王都にいた私に連絡してきたのよ。」

まさかこんな辺境にいるなんて……」

「なーう……」

「さ、私と一緒にいきましょう。魔術で飛んでいけば、明日には着くから」

「んなつんなつ」

だめ! カールがいない間にいなくなったりしたら、心配かけちゃう!
う!

「え? だめなの? ……ってゆーかルチノーちゃんしゃべれな

いの？

おかしいわね。術はほとんど解けかけてるのに・・・」

そうなの？

エメさんが、人差し指と中指をそろえて自分の額に当てた。口の中で何かつぶやいていから、その指を私の額に当てる。

びりっ

静電気が起きたときのような衝撃が額に走る。

「これでどっつ？」

「ふにゃ・・・な・・・あ、あー・・・しゃべれる！」

「よかった。で、いますぐ行けない理由は何？」

子どもに追われて辺境^{へんけい}まで来たこと。

死にそう担^かっていたところをカールに助けられたこと。

カールはすごく私をかわいがってくれて（うぬぼれじゃないと思うの）、突然いなくなったらとても心配するだろうことを説明した。

「ふうん。いい人に会えたのね」

「そう！ カールはとっても優しいの。それに強いし隊員さんにも人気あるし、格好いいからもてるし！」

すごおく背が高くて力持ちで、ごはんも作ってくれるし一緒にお

風呂に入れてくれるし一緒に寝てくれるし・・・」

「くす・・・。ルチノーちゃんはカールさんが大好きなのね」

「大好・・・っ　そ、そうだよっ

拾ってくれた人だもの、す、好きよっ」

いつも思っても、他の人に言うのってなんだか恥ずかしい。

「でもその人30代でしょ？　30でそれって・・・今猫だし、人に戻ってもルチノーちゃんは16歳・・・」

「たぶん17になったけど？」

「そういう問題じゃなくて・・・ふふっ、まあいいか。愛があれば歳の差なんて！」

「エメさん??？」

「とにかく、黙って出て行ったら、ルチノーちゃんを溺愛しているご主人様が、半狂乱になって探すってことね。

わかったわ。何か考えましょう」

「できあ・・・っ」

「また後で来るわ。じゃあね！」

そして夜。

エメさんはウーリーさんと言つ魔術師を連れて、家の扉を叩いたの
だった。

5 迎え

家に帰ってルウと夕飯を食べていると、玄関を叩く音がした。

「カール〓ヘルベルト〓ヴュスト！ いい月の晩だな！」

ばたん。

扉を閉めた。

「こら！ 開けろ！！ 僕に会えて光栄だろう！」

ドンドンドン！

扉の外で騒いでいるが、無視。

「んにゃう」

「いいんだ。あいつと関わると碌なことがないからな」

「なー・・・」

「カールさん、夜分すみません。エメ〓ヴァウラと申します。

そちらの猫ちゃんにお願いがあるんです。話をさせていただきませんか？」

「ルウに？」

聞きなれぬ女性の声に、結局俺は客人を迎え入れた。

「ということで、魔術の依代にルウちゃんをお貸しいただきたいのです」

「・・・なんでルウなんですか？」

「魔術は美しいものを好みます。」

その点ルウちゃんはこの真っ白な毛並みといい、紅玉のような瞳
といい理想的です！

決して危ないことはありませんから。お願いします」

ルウを美しいといわれて悪い気はしない。
が、貸す気もない。

「だめです」

「そこをなんとか！」

「できません」

「なぜですか？」

「何事にも絶対ということはありません。ルウをわざわざ危険な目
にあわせるつもりはない」

「おいおい、カール」ヘルベルト」ヴュスト。

エメ女史は僕が認める数少ない魔術士の一人だ。王都でも彼女ほどの腕前の魔術士ものはなかなかいないぞ。

その彼女が大丈夫だというんだから、いいじゃないか」

「ウーリー」ヒューグラ。貴様は黙ってる。

そもそもおまえの知り合いだという点で印象は最悪だ」

「ウリ坊。あんたのせいなの・・・？」

「ウリ・・・？」

横目でにらむ女魔術士を前に、ウーリーは縮こまっている。

「女史、その呼び名、余所よではやめてください・・・」

肩がふるえる。

ウリ坊？

傲岸不遜なこの男が、ウリ坊呼ばわり！？

「ぶっ・・・くくっ・・・ふはっ・・・」

「あ！　こら、カール！　笑うんじゃない！！」

「だって、おまえ、ウリ坊って・・・くくっ」

「エメ女史は僕の幼少期の家庭教師だったんだ　仕方ないだろっ」

「はははははは！」

「ウリ坊ったら、小さい頃から生意気でねえ。ちよつと純度の高い炎を召喚して浴びせたら従順になっただけど」

「ちよつとつて、女史！ 原始の炎ですよ！ 触れたら一瞬で消し炭です！ あんなの今の僕でも呼び出せません」

「血統に頼りすぎてるからよ。修練なくして技の向上はないわ」

「僕だつて……」

「なーう」

いつまでも言い合いを続けそうな師弟に、ルウが割って入った。そっだ、笑っている場合ではない。

「あなたが優れた魔術士なのはわかりました。でもそれとこれとは別です。ルウだつて行きたくないはずだ」

「そっかしら。じゃあルウちゃんがよければいい？」

女魔術士の瞳がきらりと光った。

「それは……」

ルウは当然嫌がるだろう。

俺の側から離れるはずがない。

「ルウ？ 行きたくないよな？」

「んにゃう」

ルウの耳がくたりと垂れる。

ルウ？ まさか……。

「行きたいわよね」

「な！」

耳がぴんと立ち、ルウは、彼女の足元にすり寄って行った

「ルウ……」

「決まりね。大丈夫、一週間くらいでお返しするわ」

「ルウ、なんで」

「早く行けば早く戻れるから。さっそく今出発します。」

ああ、ルウちゃんのごはんとかは気にしないで。全部私が責任をもつてみます」

呆然とする俺の前で、ルウは女魔術師の腕に抱かれて行ってしまった。

俺を、振り返ることもしなかった。

冷たい夜空を、魔術士エムさんに抱かれて飛ぶ。

「お別れを言わなくてよかったの？」

「いいの。行きたくなくなっちゃうから」

眼下にはすでに、生まれ育った街が広がっていた。

6 ルウのいない日

「隊長！ お茶！ お茶！ こぼれてますって」

「あ……すまん……」

口に付ける前に傾けられたお茶は、そのまま机上きじょうじょうにそそがれていた。すっかり文字が滲んだ書類。書き直した。

「書類これはもういいですから、国境の見回りでも行ってきてください。あ、シャツも後ろ前じゃないすか。着替えてから行ったほうがいいですよ」

ギョンターが手際よくお茶を拭いてくれる。

「補佐官つてば、そんなにかいがいしいとは知らなかっただ」

「まるで世話女房つす」

「お2人はそういう仲だったんですね！ 村の娘たちが悲しむつす」

背後で騒ぐ隊員たち。

いつもならそんな軽口は一喝していた。でも今日は睨む気力さえない。

「あいつらには写本の作業を1時間増やしますから。顔洗って、見回りの後直帰でいいですよ。家でゆっくり休んでください」

ん・・・と返事をして、ギョんターの言うとおり家に帰ることにした。

「補佐官、隊長どうしたんすか」

「まるで辺境（くわん）に来た頃みたいに押し黙っちまって」

「あんな隊長、いじりがいないっす」

「おまえら、写本2時間追加。一字でも間違えてみる、明日の朝まで書かせるからな」

「ひでえ！」

「横暴！」

「さつき1時間っていったのに!！」

「ただいま・・・」

返事があるはずがないのに、つい習慣で言ってしまう。ルウがいない。

昨日は冷たい寝台がなじまなくて、一睡もできなかった。

ルウ。

おまえの存在がこんなに大きくなっていたなんて。

棚から取り出した葡萄酒をグラスにそそぐ。

新年に飲んだときには、向かい側にルウがいた。

舐めさせてみれば、顔をしかめてまずそうにしていた。

なぜおまえは行ってしまったのか。

俺より、エメとかいう魔術士のほうが良かったのか？

いままで2人でうまくやっているとと思ってた。

おまえはそうじゃなかったのか。

すぐに帰ってくる・・・はずだ。

でも別れ際、俺を一瞥すらしなかった。

俺よりエメの側のほうがよくなったら？

もう戻ってこないかもしれない。

床の上に、からっぽのルウの皿が置いてある。

暖炉の前にはお気に入りのクッション。

新しくしたばかりの爪とき用の板は、まだ何の跡もついていなかった。

冷えてきた。

暖炉に火を入れないと。

夕飯、は、どうするか。

何も食う気がしないな。

ふと見ると、脱ぎもしなかった外套の肩に、ルウの毛がついていた。
真っ白でふわふわの毛。

喉元を撫でると、ゴロゴロと鳴らして気持ちよさそうに目を細めた。

「ルウ……」

たった一日しかたっていないのに、服についた毛すら懐かしく、俺は葡萄酒をあおり続けた。

空を飛ぶこと一日。

孤児院のある街を過ぎ、夕方、王都に着いた。

「院長先生は王都にいるの？」

「ええ。昨日は言わなかったけど、かなりお悪いの。親戚の人が有名な医者を探して王都まで連れて来たのよ」

そうだったのか。

院長先生はもうかなりのお年だった。

この冬の寒さも堪えたことだろう。

「猫のままじゃだめよね。私の家に寄って行きましょう。着替えも貸してあげるわ」

「ありがとう」

王都の一画。

住宅街から少し離れた場所に、エメさんの家はあった。

ここだけではなく、各地に家というか隠れ家のようなものがあるという。

「これ・・・着るの？」

エメさんに渡されたのは、淡い水色のドレス。

頭からかぶるだけの衣服しか着たことのない私には、触るだけでも怖いくらいだ。

「そうよ。コタルデイっていう意匠デザインでね、今王都で流行ってるのよ」

手首から二の腕にかけては、ぴったりとした袖。

ウエスト腰は体に沿うように絞られていて、裾はふんわり広がっている。問題は襟ぐり。

「う、こんなに開いてていいの？」

「いいのよ。鎖骨のラインを見せるのが、色っぽくていいんじゃない！

ほら人間に戻って！ 自分でできるわよね？」

エメさんに追い立てられて、衝立ついたての影に隠れて目をつぶり、人に戻るよう強く念じた。

月齢に関係なく、ある程度調整コントロールできるようになっていた。

「ルチノーちゃん、あなた……。孤児院に来たのは何歳ですって？」

なんとか自力で着て、衝立から出た私を見たエメさんの第一声がこれだった。

何か変かな。

胸が見えそうなほど襟が開いていて、落ち着かない。

「たぶん2歳くらいだと思う」

「そう。お父さんやお母さんの名前は憶えてる？」

「ううん。自分の、ルチノーと言う呼び名しか覚えてなかった」

「ふうん……」

「あの、変ですか？」

着方を間違えたかと、裾や背中を確かめる。

「そんなことないわ！ カールが見たらびっくりするでしょうね！」

「似合わないから？」

「その逆よ！ とっても素敵！ お肌きれいねえ。鎖骨もいい感じ！
胸もハリがあってうらやましいわあ」

ふにふに。

いつのまにか結構育った胸を、エメさんがつつく。

「あの、ちょっと・・・やめて・・・」

「いやあん、かわいい！ 飼い主に見せたら速攻襲われそうだわ」

「おそ・・・？」

「いえいえ、こっちは・な・し」

こっちつてどっちだろう。

「エメさんは着替えないの？」

「私は規則で万年魔術士服よ」

「え、でもこの服は？」

「着られないけど好きなのっ つい集めちゃうのっ いっぱいあるから、王都にいる間毎日着せ替えしましょうね！」

「イエ、イイデス・・・」

院長先生のいる治療院を訪ねる前、エメさんが両側の髪を編み込みにしてくれた。

「この赤いリボンは？」

「それはとらないで」

「くす、そういえば猫の尻尾についてたわね。
カールがくれたの？」

「うん」

なんだろう。

エメさんからカールの話をふられるたびに、頬が熱くなる。
こんなふうには他の人とカールの話をしたことがなかったからかな。

「よし、できたわ。今からいけば面会時間にぎりぎり間に合うから、
急いでいきましょう」

「時間決まってたの？　じゃあこんな凝った髪型しなくても・・・」

「つれないわねえ。久しぶりに会うお義母さんに、きれいな格好を
みてもらいましょうよ」

「うーん……。まあいつか・・・」

7 院長先生

院長先生の部屋は、上等な個室だった。

親戚の人は、院長先生をとても大事にしてくれているらしい。

「ルチノー……。きれいになったねえ」

久しぶりに会った院長先生は、涙を流して喜んでくれた。

エメさんに着飾ってもらってよかった。

すっかり痩せて細くなった腕が、病状を知らせる。

この間まで全身に痛みがあつてつらかったけれど、いまは大分おさまったらしい。

夕食の介添えをして、これまでのことを話しているうちに、面会の終了時刻が迫ってきた。

「ルチノーや、これを……」

そろそろ帰ろうかというとき、院長先生が寝台の下からとりだしたのは、古びた羊皮紙。

質が悪くところどころ穴が開いていた。

「お義母さん……？」

「おまえが幼い頃繰り返し書いていた絵だよ。」

一時期を境にぱったりと書かなくなってしまうたけれど。おまえ

の両親を探す手掛かりになるかもしれない」

そこに描かれていたのは、冠ティアアラをかぶったお母さんとマントをしたお父さん。

後ろからエメさんも覗き込む。

「ルチノーちゃん、これは何？」

エメさんが指さしたのは、お母さんがかぶっている冠ティアアラにある飾り。

「ナミダイシ」。何かのお話にでてきたのかな？？」

突然頭に浮かんだ単語。

この絵に色はついていないけど、たぶん深い青だ。

「・・・あなたのご両親、私知ってるかもしれないわ」

エメさんの突然の発言に、私も院長先生も驚いて声もでなかった。

ルウが魔術の実験だかに協力するために旅立って、3日がすぎた。

「隊長、仮眠室行って1時間ほど寝てきてください。

今日は村の子どもたちの護身術講座があるんですよ。

そんな面つらじゃ、とてもじゃないけど人前に出せないっす」

ギョントアの勧めに素直に従って、兵舎の仮眠室で休んだ。
人の気配があるほうが眠れるのは不思議だった。
そろそろ時間だろうと起き出すと、扉に紙がはさんであった。

“ 髭を剃ってからくること！”

鏡を見れば、なるほど、酷い人相だった。

「右手がこうだろ。左手がこうで・・・」

「あははっ くすぐりたい！」

「くすぐったくちゃだめなんだよ！ 腕をつかまれたらこうやって・

・・・」

「やだ、サジ兄ちゃんの下手くそ！ すぐ逃げられるもんね！」

「あっ、言ったな！ 待て！！！」

スヴァルの家の庭で、数名の隊員と子どもたちが訓練をしている。
訓練というか、遊ばれているようだ。

のどかな辺境は、裏返せば国の目の届きにくい場所だ。

軍の守りなど期待できず、我々のような警備隊を頼ったり自警団を
作ったりすることになる。

それでも、最後は自分の身は自分で守るのだ。
年に数回、このような訓練をしているらしい。

「隊長さん、よかつたら中でお茶でもいかがですか」

場所を提供してくれたスヴァルが、ぼんやりと座り込んでいた俺に
声をかけた。

おにごっこと化した訓練を見ているも仕方ないので、その言葉に甘えることにする。

「ルウちゃん、家出しちゃったんですか？」

「いえ、知人に預けただけです」

隊員が何か言ったのか、スヴァルが気遣わしげに尋ねてきた。

「あ、そうなんです。どれくらいの間？」

「一週間くらいでしょうか。先方の都合なのでわかりませんが・・・」

「そう・・・」

しばし無言でお茶をすすっていると、足に何か触れた。

「んにゃん」

猫だ。

「す、すみません。隣の部屋にみんな閉じ込めておいたはずなのに、こら、だめよ。みなさんお仕事なんだから」

「いやいや、いいんです。ほら、もう遊んでるようなもんだ」

庭を見やれば、子どもたちにぶら下がられたり肩車をせがまれたりしている隊員たちがいた。

きゃっきゃとはしゃぐ声が聞こえる。

「そうですか」

「ええ。猫、たくさんいるんでしょう？　せっかくだから会いたいな」

ルウのいない寂しさがまぎれるかもしれない。

「会ってくれます！？　ぜひ！」

ぱっと笑顔になったスヴァルが、隣の部屋の扉を開けた。

「！」

「んにやあああああああああああ！！！！！」

隣の部屋から飛び出してきたものがもたらしたのは、地響き。そして風圧。

それらがおさまって、驚いた。

見渡す限りの猫、猫、猫！

俺はスヴァルの猫好きをナメていた。

茶トラ、白黒、三毛に黒。

何十匹という猫が、部屋の中を埋め尽くした。

「はじめは道で拾った3匹だけだったんですけど、いつの間にか増えてちゃって……」

膝の上だけでなく、腕や肩、頭の上にも猫を乗せたスヴァルは、とても幸せそうに笑っていた。

実家の猫好きの母も、これにはかなうまい。

そのうち、一匹の猫が俺に寄ってきた。

人懐っこい猫で、撫でてやるとゴロゴロと喉を鳴らしてもっととせがんできた。

一匹かまうと次々とよじ登ってきて、結局俺も猫だらけになってしまった。

ボールや猫じゃらしで遊んでやる。

「隊長！俺らに仕事させて何遊んでんすか！」

「子どもって容赦ねえ！見てくださいよ、この青アザ！」

「残留組になればよかつたつす。疲れた・・・」

「まあ、みなさん、ご苦労様でした。

お茶用意してありますから、どうぞ」

「「「ありがたくいただきます！」」」

隊員があがりこむと、猫たちは思い思いの場所に落ち着いたり、庭に遊びに出たりした。

「わ、猫ちゃん！」

「遊ぼ〜！」

子どもたちが嬉しそうに手を伸ばす。

「隊長さん、お茶のおかわりいかがですか」

「あ、いただきます」

スヴァルがお茶を淹れてくれる。
外では子どもと猫が遊んでいる。

冬とはいえ、昼間はぽかぽかと温かい。

いいなあ、こつこつ。

俺ももう31。

家庭を持つてもいい年だ。

嫁さんとか子どもとか、どうなんだろうなあ。

なんだかゆったりした気持ちになって、お茶を口に含んだ。

花の香りが、口から鼻に抜ける。

そういえば、村の特産だったか。

さっきも同じお茶をもらったはずなのに、全く味や匂いを感じなかった。

「ようやく以前の隊長さんらしいお顔になりましたね」

スヴァルに言われて、つるりと頬を撫でてみた。

「そうですか？」

「そうですよ。隊長ってば、この間からむっちゃ怖い顔してるんすから」

「ここに来たとき以来つすよねえ。近寄りがたくつてえ」

「だてに顔がいいだけに、鬼気迫るものがあるっていつかなんていうか」

「おまえらな・・・」

「みなさん心配してるんですよ。」

ルウちゃんだって、帰ってきて隊長さんがそんなにやつれてたら

心配します。

ちゃんと食べて、ちゃんと寝てくださいね」

隊員やスヴァルの忠告をきいて、その後3日間は規則正しい生活を心がけた。

もちろん、帰ってきたルウに心配をかけないためだった。

8 帰宅

院長先生に面会した次の日の朝。

エメさんの家で朝食を摂っていると、鳩が飛び込んできた。

「・・・・・・・・！」

ルチノーちゃん、お義母さんが亡くなったわ」

「え!？」

ど、どうして!？」

昨日はやつれていたとはいえ元気そうだったのに。

「痛みを抑えるために、かなり強い薬を使っていたみたい。
今朝方、心臓発作だったって」

「そんな・・・」

「ルチノーちゃんを待っていたのかもしれないわね」

私のことをずっと心配してくれていた院長先生。

幼い頃描いた絵を、ずっと大事にとっておいてくれた。

「お義母さん……」

「葬儀は明後日だって。」

荷物の整理とかもあるでしょうから、もう2〜3日こっちにおいて全部済んだら辺境へ送るわ。

それでいい？」

「うん……ありがとう……」

院長先生の荷物は、ご自分のものは本当に少なくて、ほとんど孤児院で育った子どもたちの思い出の品だった。

まだ残っていた孤児院の建物での葬儀。

独立したり引き取られたりした子どもたちも大勢集まった。

たくさんの人に見送られ、院長先生は永い眠りについたのだった。

「ルチノーちゃんのご両親の件は、私なりに調べてみるわね。」

ちよっと思いが当たることはあるんだけど、まだ確証はないからはっきりしてから知らせるわ」

両親といっても、きっと私がこんな見た目だったから捨てた人たちだ。

今さら見つかっても困るような気がする。

エメさんがやけに乗り気だから言い出せないけど……私の親は院長先生だ。

「何から何まで、ありがとう、エメさん」

「いいのよ。乗りかかった船だわ。それに私、ルチノーちゃんのこと好きなの」

「・・・すき？」

人から気味悪がられるばかりだった私を、好きといってくれるの？
エメさんって変。

「恋する女の子はいつでもとびきりかわいいものよ。

自信をもって！ 応援してるわ」

「こ・・・ッ」

エメさんは、真っ赤になっておたおたする私を楽しそうに眺めてから、おでこをトンッと指ではじいた。
びりっとな電流が流れたような感触がする。

「変化の術はもう解けてるけど、猫じゃなきやいけないんでしょう？
自由に変身できるようにしたから。猫のままでもしゃべれるから、
鳴き声は気を付けてね」

カールとの生活が安定したことで、私への術は解けていたらしい。
それをなんとか“猫じゃなきや”という思いで継続させていた。

「ルチノーちゃんは魔術の才能があるわよ。カールにフラれたら、
私のところにいらっしやい」

「エメさん、さっき応援してるって・・・」

「あはは！ そうだったわね。きっと今頃死にそうになって待ちわびてるわよ。さあ帰りましょう」

猫になってエメさんに抱かれ、空を飛ぶ。

カールの家に着いたのは、日が暮れ始める少し前。カールはまだ帰っていなかった。

「あ、私鍵もってないよ」

「まかせて頂戴」

エメさんが口の中で何かつぶやいたと思ったら、足元のつる草がしゅるりと伸びて、鍵穴に入っていた。かちやりと軽い音がする。

「エ、エメさん・・・？」

「ルチノーちゃんを寒空で待たせるほうが、ご主人様は怒るわよ。私はあんまり長居できないから、手紙を置いていくわね」

元からそのつもりだったのか、フードの下から手紙や荷物を取り出した。

どこに入っていたのかと思うほど大きなものだ。

「これはクッションね。人間に戻ったときに着られるように、中に服が入ってるわ。」

「こっちは護り石。ペアになってるのよ」

赤い石のついたペンダントを首にかけてくれた。

「これ、人間になったときに首を絞めちゃわない？」

「大丈夫。魔術がかかっているから持ち主に合わせて伸び縮みするの。」

あ、もしかしてそれでリボンは尻尾にしてたの？」

「うん。カールは首につけてくれようとしたんだけど、窒息しそうだったから」

「あはは！なるほどね。これは大丈夫よ。」

こっちはカールの分。この石は引き合うようになってるのよ。
ルチノーちゃんとご主人様カールが、いつまでも一緒にいられますように
ってお祈りしておいたからね」

「ありがとう、エメさん」

「うふ、いいのよ。カールによろしくね」

そういつてエメさんは夕焼けの空を飛んで行った。

ああ、今日も疲れた。

周囲に助けられてなんとか業務を果たしているが、そろそろ限界だ。もう一週間たつ。

ルウはまだ帰ってこないのか。

「ただいま」

いないとわかっていても、声はかけてしまつ。

「なーう」

「!?!」

今、ルウの声が聞こえた気がする。

俺、とうとう幻聴まで聞こえるようになったのか？

「た、ただいま・・・?」

「なーう!」

玄関の扉を開けた定位置に、ちよこんと彼女は座っていた。

「ルウ!」

幻ではない。本物のルウだ!

「んなつ」

飛びついてきた白い体を注意深く抱きしめ、頬ずりする。

「よく帰ってきてくれた・・・!」

「なーう」

にじむ涙を、ルウが舐めとってくれた。

「おかえり、ルウ」

真紅の瞳に俺が映る。

ルウの瞳はなんてきれいなんだろう。

毛並みもいい。大事にしてくれていたようだ。

再会の喜びに浸っていると、胸元にきらりと光るペンダントに気付いた。

金の鎖に、ルウの瞳の色に似た赤い石がついている。

「なんだこれは」

「んにゃ〜」

ルウに促され、居間の机の上を見ると手紙があった。

女魔術士からだ。

家には確かに鍵をかけてあったはず。

あの女、何を勝手なことをしてるんだ。

やはり魔術士は信用ならないと思いつつ、手紙を読んだ。

中には、ルウのおかげでも助かったこと、お礼にクッションと護り石を贈るとあった。

手紙のそばに、布の小さな袋がある。

開けてみると、中からルウとおそろいのペンダントが出てきた。

「双子の護り石か」

元々は一つの石であったものを二つに分けたものを、双子石という。お互い引き合う性質を持ち、魔術に用いられる。それに護りの魔術をかけてくれたのだろう。渡し方は気に入らないが、ルウとおそろいなのは気に入った。

「おまえ、俺からのリボンは首にしなかったのに、なんでこれはいしてらんだ？」

「んあ……」

ばつが悪そうにするルウ。

そんな顔すら愛しい。

たかが一週間だが、俺には長かった。

華奢なペンダントを手を取って、つけてみる。

長さが足りるのかと思ったが、これも魔術なのか、ぴったりと胸元におさまった。

「どうだ、似合うか？」

「んにゃ〜」

あまり装飾品はつけないので少し恥ずかしい気もするが、服を着れば隠れる場所なのでよしとする。

一緒に風呂に入り、湯冷めしないうちに寝台にもぐりこんで、温かな体を抱き寄せた。

「おまえがいない間、寂しかった。もうどこへも行くなよ」

「なーう……」

一週間ぶりのぬくもりは、あつという間に俺を眠りの世界へいざな
った。

9 見られちゃいました!?

「おはよう、ルウ」

目覚めると、カールの顔がすぐそばにあった。

ちゅつとキスをしてくれる。

蕩けそうな目で私を見てるけど・・・いつから見てたの？
まさか寝てないなんてないよね？

カールは私の首や背中を、飽きることなく撫でている。

「行きたくないな。今日は一日中ルウといたい」

そんなこと、そんなこと言わないで。

うれし過ぎちゃうからっ

「んにゃ〜」

お仕事が終わったら、また甘えさせてね。

私のせいで、カールの仕事に支障をきたすわけにはいかないよ。

動きたがらないカールを頭でぐいぐい押しして、なんとか仕事に送り出した。

空になった酒瓶。出しっぱなしの食器。散らかった衣類。明るくなってあらためて見ると、部屋の中はずいぶん荒れていた。昨夜帰ってきたときのカールは無精ひげを生やしていたし、顔色も悪かった。かなり心配をかけてしまったらしい。カールのために何かできないかな。そうだ、せめて片づけをしよう！猫に出来る範囲で、でも面倒なので人になって部屋の片づけをすることにした。

「ふんふんぷん」

「隊長、とうとうおかしくなっちまったか？」

「いや、よく見るよ。あのハリ、あのツヤ」

「猫が帰ってきたんだな」

「なんてわかりやすい」

うるさい。なんとでも言え。

今日の仕事はなんだ？

さっさと終わらせて早く帰ろう。

「……一日分の仕事を午前中で終わらせる気っすか？ そろそろ昼飯にしましょう」

インクの補充が間に合わないほどの勢いで仕事をしていた俺に、ギンターが言った。

「そうか！ 昼！」

「は？」

「一端、家に帰る。午後また来るから」

「あ、そうっすか……。お気をつけて」

そうだ、そうだった。

昼食をルウと一緒にとって、また兵舎に戻ればいい。

何も夜まで我慢することないじゃないか。

足取り軽く、家への道を急ぐ。

俺の気分のように、空は快晴だ。

家が見えてきた。

窓に白い影。

ルウが外を眺めているのか。

「おーい、ル……」

呼びかけようとして、やめた。

窓辺にいるのはルウ？

それにしてもやけに大きい。

前もこんなことがあった。

あのときはルウがシートで遊んでいたのだが。

今日もそうなのか？

一人でどんな遊びをしているのか。
興味をひかれ、気配を殺して近づいた。
壁伝いにそおっと覗く。

「……………」

白いものは髪だった。

腰まで届く、まっすぐな長い髪。

毛先には赤いリボン。

まさか……………!

夢だと思っていた少女がそこにいた。

袖のない膝丈のワンピースを着て、部屋の掃除をしている。
まるやかな肩や、すらりと伸びた手足がまぶしい。

呆然と見つめていると、彼女が近寄ってきて窓を開けた。

俺はとっさに窓枠の下に身を隠した。

「ん〜！ いいお天気！ カール、早く帰ってこないかなあ」

鈴のなるような声とは、このような声をいうのだろうか。

耳に心地よく響き、自分の名を呼ばれると心臓が高鳴った。

窓の下、風に乗ってふわっと漂ってくる石鹸の香り。

俺と同じ、香り。

「あ……………!」

思わず声をかけそうになって、口元を押さえた。

そうだ、以前夢で見たときに思ったんだ。

彼女はルウなんじゃないかって。

ルウは人に化けられるが、それを隠している。

もし俺がここにいることがわかったら、今度こそ本当にルウは出て行ってしまいかもしれない。

そんなこと、耐えられない。

ぱたんと窓が締まる音がする。

無意識に息を詰めていたようで、はぁっと吐き出すと全身の力が抜けた。

俺はしばらく窓枠の下にいたが、昼の休憩時間が終わるのでしぶしぶ兵舎に戻った。

午後はもちろん、仕事なんて手につかなかった。

10 カールの葛藤(前書き)

小話風に3話。

皆様に引かれたらどうしよう……。

10 カールの葛藤

*** 想い ***

あれ以来、ルウのことをさりげなく観察しているが、人型になる気配はない。

猫が人になるなんて、馬鹿馬鹿しい。

ルウが帰ってきて浮かれた頭が見せた白昼夢だ。

そう思う反面、期待してしまう自分がいる。

どんなときになるのだろう。

自分の意志で変化できるのだろうか。

人になれる猫。

普通の猫ではない。

以前ウーリーが言っていた。俺から魔術の匂いがすると。

ルウはどこかの魔術士から逃げ出した猫なのか。

ひよっとすると、あの女魔術士は何か知っていたのかもしれない。

「ルウ、あの、な」

「んな？」

きよとんと俺を見つめる赤い瞳。

人になれるならなっつけてくれないか？

そう言ったらルウはどうするだろう。

「いや、なんでもない」

ごまかすように喉を撫でると、ゴロゴロと鳴らして喜んでいる。人にならなくてもいい。おまえと話せたら、どんなに楽しいかと思うんだ。

逃げ出されるのが怖くて、結局何も言えなかった。

*** シャツ ***

その日。

早く帰れることがわかっていながら、ルウには何も言わなかった。まだ日が高いうちにこっそり帰ってきて、出窓の下に隠れる。家の中を覗くと、人型になったルウがいた。

「……！」

この前は、どこから出したのか清楚なワンピースを着ていた。でも今日は……それ、俺のシャツ！

小柄なルウにはもちろん大きすぎる。

ボタンを数か所留めただけで、大きく開いた襟元から白いふくらみがのぞいている。

まくった袖からは細い腕。

裾からは太ももがちらちら見える。

ルウにするように、すぐにでも抱きしめて撫でまわしたい衝動にか

られた。

元は猫とはいえ、あんな少女に手を出したら犯罪じゃないか……！

いや、猫とわかってる時点で人としてどうなんだ!?

頭を抱え、自問自答する。

ようやく落ち着いたのは、日もとっぷりと暮れ、いつもより遅い時間になってからだった。

「た、ただいま……」

「なーう」

家に入ると、ルウが当然のようにおかえりのキスをしてきた。人型が脳裏をよぎり、妙にぎくしゃくしてしまう。

「んな？」

「いや、すまん、なんでもない」

ルウを肩に乗せたまま椅子に腰かけようとして、椅子の背にかかったシャツに気付いた。

昨日俺がここにかけたシャツだ。

そして昼間、彼女が着ていたのもきつとこれだ。

「うっ……」

殴られたとき以外で鼻血なんて出したの、何年ぶりだ……っ
初心な少年のようになっってしまった自分を情けなく思いつつ、胸の動悸はなかなかおさまりそうにない。

「んなつ、なーう?」

心配そうに俺を見るルウ。

ああ、そんな純粹な目で俺を見ないでくれっ

当分、ルウの目をのぞきこむことはできそうになかった。

*** 猫茶 ***

ルウは相変わらず俺の前で人型になることはない。

はじめはどうしてなってくれないんだと悩んだが、ルウにはルウの都合があるだろう。

一緒に居られるだけで幸せなのだから、これ以上は望まないことにした。

「サジの妹が焼き菓子を差し入れてくれたんだ。食うか?」

夕食前、スープが温まるまでの間に菓子を齧る。

淹れたお茶は、水で薄めてから皿に入れてやった。

「ふに? ふにゃん」

「ん? どうした?」

ルウの様子がおかしい。

「うなう。ふにに」

撫でてもないのに、ゴロゴロと喉を鳴らして寝転がる。
この感じ・・・もじゃ。

ルウに先にやって自分はまだ飲んでいなかったお茶を口に含むと、
いつも淹れているお茶の味ではなかった。
あわてて袋を確認する。

これは確か去年の冬にスヴァルがくれたお茶。
冬場、水を飲みたがらなくなったらあげてみると、ギョントーに言こと
づけたやつだった。

「ふにゃん、うにゃあ」

お茶を舐めては、床に背中をこすりつけたり、ぐにゃぐにゃと体を
揺らしたりしているルウ。
完全に酔っ払っている。

「猫茶・・・またたび茶か！」

元々薄めていたので大した量ではないが、ルウには効果てきめんだ
ったようだ。

「おい、大丈夫か。ル・・・ウ!？」

ルウのそばにしゃがみこみ、様子を見ようとしたそのとき。
ルウの輪郭がぼやけた。
空気に溶けるように、体が広がっていく。

「ん・・・ああん・・・」

こ、これは！

だだだ、だめだ、だめだ、だめだ、だめだ！！！！

寝室に駆け込み、毛布をつかむ。

ばさりと彼女にかけ、極力目をそらして抱き上げた。

「ん・・・カール・・・」

うわぁ、やめてくれ！

首に手をかけるな、顔をうずめるな！！

彼女を寝台に押し込むと、扉を閉め着衣のまま風呂に飛び込んだ。まだ火を入れず水をためただけだった浴槽に、下半身を沈める。

「落ち着け！　落ち着け、俺！」

しびれるほどの冷たさの水が、じわじわと体の熱を奪う。それとともに、頭も冷えた。

「ルウは、やっぱり人型になれた・・・」

はじめて見た変化。

うれしさに顔がゆがむ。

でもあの姿は刺激的だった。

なんで裸なんだ。

猫だから当たり前か。

体、柔らかかったな・・・。

毛布越しの感触を、うっかり思い出す。
せつかく冷えた下半身に、また血が集まりだした。

「うづうづ……」

しばらく浴槽から出られそうになかった。

ようやく出られたのは、手足がすっかりしびれて真っ赤になったころ。

濡れた服を着替え、寢室の様子を伺うと、猫に戻ったルウがすやすやと眠っていた。

ああ、よかった。

「このお茶は封印だ」

戸棚の一番奥に、猫茶をしまった。

これはルウに飲ませてはいけない。絶対に。

でももったいないよな、せつかくもらったのに。

いやいや、いかん。あんなルウ、誰にも見せられない。

見せなきゃいいんじゃないか？ 家の中なら、誰が見るわけもない。違う、俺がだめなんだ。

この次、わかってて飲ませたら、理性が保もつ自信がないじゃないか。だからだめだ。

これはルウに飲ませてはいけない。

絶対に、きつと、たぶん……だめなんだ。

戸棚の前で、俺はいつまでも葛藤するはめになった。

10 カールの葛藤（後書き）

えーと、よろしければ、ご意見・ご感想くださいませ。
路線、いいですか？大丈夫ですか？（笑）

お月様の方に「白猫の恋わずらい〜月光編〜」として裏バージョンを投稿しました。

1 来客（前書き）

皆様のあたたかいお言葉に支えられて続けております^^
ありがとうございます！

1 来客

カールの様子がおかしい。

目を合わせようとしないし、あいさつのキスもぎこちない。

そうかと思うと、ふと気づいた時にじっと見つめられていたりする。

「ルウ、あの・・・」

「なう？」

「いや、いい」

なんてやりとりもしょっちゅうだ。

何が言いたいのかな。

どうしたのかな。

昨日はお風呂で湯船に落とされた。

「ふぎーーーーー!!」

「あああ！ すまん！ 大丈夫か!!」

端正な顔に、見事なひっかき傷ができてしまったのは仕方ないと思

う。

それでも、夜寝るときには優しく撫でてくれて、深い碧の瞳が幸せそうに細められるから、私はここにいていいんだと思える。

今日はカールが非番の日。

でもいつものお休みみたいにウキウキしないのは、薄皮を一枚はさんだような、微妙な空気をを感じるから。

はぁ……。

本当に、どうしたんだろう。

「ルウ、昼飯は何がいい？」

「んな！」

カールが作ってくれるものならなんでも！

燻製肉を焼くいい匂いがただよってきたころ、コンコン、と玄関の扉を叩く音がした。

「隊長さん、こんにちは。ルウちゃんが帰ってきたって聞いたんですけど」

「ああ、スヴァル。これはどうも……」

以前、兵舎で会ったことのある女の人だった。

なんだか影の薄い細っこい人で、優しそうっていうよりトロそうな気がする。

年だって、たぶんカールよりずっと上だ。

ウーリーさんたちが兵舎にお泊りしていたときに手伝いに来てたっていうけど、その人がなんで家まで来るわけ？

「あら、お昼でしたか。ごめんなさい。これ、よかつたらルウちゃんに」

「すみません、ありがとうございます」

「いえ、隊長さんが元気になられてよかったです。またうちにも遊びに来てくださいね」

「ははっ、ご心配をおかけしまして……。ええ、また」

「ちょっと、ちょっと、どういうこと？」

「カールってばいつのまにその人のおうちに行ったの？」

「まさか私が院長先生に会いに行っている間に？」

「……院長先生。」

「院長先生のことを思い出すと気分が沈む。」

「もつと何かしてあげられたんじゃないかって。」

「猫になんかならないで、そばにいてあげたらよかつたんじゃないかって。」

「でもそうしたらカールには出会えなかった。」

「ルウ、スヴァルが^{シェーフル}山羊乳チーズをくれたぞ。おまえ好きだろう」

^{シェーフル}山羊乳チーズ！

「沈みかけた気持ちが一気に浮上する。」

「そそそ、そんなので懐柔しようだったって、だめなんだからねっ」

「パンにのせて焼いてやるからな」

今日のお昼ご飯は、手作りパンの山羊乳チーズシェーブルのせと、燻製肉。細かくちぎった野菜も添えてある。なんて豪華。でもこのチーズ、あの女の人が持ってきたんだよね。おうちに遊びに行ったって・・・カールってば、私がない隙に何してるのよ！

ああ、でもいい匂い。
チーズに罪はないんだよねえ。
食べなきゃもつたないし。
でもあの人は気に入らないし・・・。

「食わないのか？」

「うな・・・」

迷っていると、カールの口の端にチーズのかけらがついているのを発見した。

そうだ、味見をしてから決めよう。

食卓テーブルに飛び乗り、首を伸ばしてカールの口元をぺろりと舐めた。
うーん、やっぱりおいしい！

この塩気がたまらない。

カールは猫の私に気を使って、薄味のものを作ってくれるんだよね。魔術で変化してるだけだから、本当は平気なんだけど。

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

ん？ カール？

なんで口を押えてそっち向いちゃうの？

耳が赤いけど・・・大丈夫？

「そ、そんなに食いたかったのか？ 俺の分もやるから、ほら食べろ」

いやぁん、大盛りっ 幸せー！

結局、誘惑に負けて食べてしまった。

食後の毛づくろいをしていると、また玄関の扉を叩く音。

「なんだ、今日は客が多いな」

席を立つカールにくつついて、玄関に向かう。

「はい、どちら様・・・」

「カール！」

「ミレイユ！？」

カールが扉を開けたとたん、赤毛の美女が飛び込んできた。

2 ミレイユ

シャー！

ルウが足元で毛を逆立てて威嚇している。

「大丈夫だ、妹だよ」

「ふに？」

俺にぶら下がるように抱きついてきたミレイユを、ベリっとはがす。

「あら、かわいい猫。おいで〜」

猫好き一家の一員であるミレイユは、しゃがみ込むとルウに手を差し出して招こうとする。

「気をつけるよ。結構気が強いんだ」

「大丈夫、大丈夫。チツチツチツ、ほーら、お姉ちゃんだよ〜」

鼻先で、人差し指と中指をちらちらつと動かす。

ルウは興味を引かれたようで、徐々に近づいてふんふんと鼻を鳴らした。

「きれいな猫ねえ。瞳が赤いのね」

「そうなんだ。ちょっと前に拾ってな」

ミレイユがちよいと顎をつつくと、びくつとしたルウが反射的に爪を繰り出した。

おいおい、ひつかかれるぞ、と思ったが、妹のほづが一枚上手だったようで、ルウの爪をひらりとよけると脇に手を入れて抱き上げてしまった。

「きゃあん、ふつかふか!」

「ふぎー!」

暴れるルウにおかまいなく抱きしめる。

しばらくじたばたしていたルウだったが、あきらめたのかぐったりと身を任せた。

椅子を勧め、お茶を淹れて戻るころには、ミレイユの膝の上で丸くなって大人しく撫でられていた。

「さすがだな」

「だてに何十匹もお世話してないわ。早くに家を出た兄さんとは年季が違うのよ」

「そういうもんか?」

「そうそう。あら! このお茶、いい香り!」

「だろう。ここの特産だそうだ」

「へえ。うちの店でも置いてみようかしら」

ミレイユは幼馴染と結婚し、王都で小さな店を開いていた。自慢の赤毛を上半分だけ結い上げて、残りは肩に垂らしている。着ている服もなかなか上等で、商売は順調のようだ。

「で、今日はどうした」

「あら、久しぶりに会った妹にずいぶんなご挨拶じゃない？
兄さんこそ、さっきの女の人はなあに？ 田舎に来て趣味が変わったの？」

びくびくとルウの耳が動いている。

ミレイユの撫で方が気に入らないのか。
抱き上げて俺の肩に乗せると、頬をすり寄せてきた。

「こいつに差し入れを持ってきてくれたただけだ。世話好きなんだよ」

「ふうん」

「なんだよ。おまえ、いつからいたんだ？」

「出てきたスヴァルさんに庭先で会ったのよ。立ち話をして別れたわ。あっちはまんざらでもないみたいだけど？」

「ははっ、馬鹿言つなよ。俺もここに来た頃はちよつとすさんでたからなあ。心配してくれてるんだ」

「うん、まあね。どんな暮らしをしてるのかと思ったけど、案外楽

しそつじゃない」

「ルウのおかげだな」

肩におすわりをするルウを撫でてやると、目を細めて「コロコロと喉を鳴らした。」

「ルウちゃんっていうの？」

「ああ。自分で名乗ったんだぜ？」

「あはは、まさかあ！」

「本当だよなー？」

同意を求めるようにルウを見つめると、「なーう！」と返事をした。あまりのかわいさにキスをする。

最近、意識しすぎてついスキんシップを避けていたが、猫のときは猫だと思えばいいんだ！と開き直る。

「……ぶらぶらね」

「いいだろっ」

「はいはい。んん！？ おそろいのペンダントまでしてるのっ？」

おっと、しまった。

ミレイユの目ざとさを忘れていた。

今日は休みだから、開襟のシャツを着ている。

「知り合いがくれたんだ」

「えええ、ちょっと見せてよ！ はずさなくていいから」

引きちぎらんばかりの勢いに押され、首を差し出す。
多少引つ張られても苦しくないのは、魔術のおかげか。

「透明度の高い石ねえ。相当高価よ？ 貴族の指輪に収まっててもおかしくないくらい」

「そうなのか？」

「うん。知り合いって誰？ まさか女の人じゃないでしょうね」

「女は女だが・・・」

ウーリーが連れてきた女魔術士を思い出す。

初めは若いのかと思ったが、時折見せる老成した表情といい、ウーリーの家庭教師をしていたという話といい、見た目通りの年ではないと思う。

「あああ、また！ また女性！ 兄さん、なんで辺境にとばされたか忘れたの！？」

顔を両手ではさまれて、がくがくと揺さぶられる。

「おまつ、や、やめろ、わかってるって。そんなんじゃないから！」

「来た途端、家から女が出てくるし！ 貢ぎ物のペンダントしてるし！」

さあ、あとは何！？　一緒に暮らしてる女でもいるの？　洗いざらい話さない！」

がくがくがく。

頭にしがみついたルウも一緒に揺れている。

一緒に暮らしてる女って、ルウか！？

人型になれます、なんて口が裂けても言えない。

「う、うるさい、話なんてないぞ。おまえこそ何しに来たんだ！」

「私のことはいいのよ！　ほら！　早く話さない、この馬鹿兄貴
！」

「兄にむかって馬鹿とはなんだーっ」

3 知らせ

ミレイユの追及をなんとかごまかし、午後は兵舎を案内した。性格に難はあるが見た目だけは良い妹に、隊員たちは色めきたった。

「隊長の妹!？」

「あの、俺ブルーノって言います。趣味は読書と釣り・・・」

「おまえ本なんて読まないだろ！ ダニエルっす。21歳、夏生まれ」

「はい、はい、はい！ 妹さん、花は好きっすか？ この先に景色のいいところがあるんだけど」

「ミレイユを誘うなら、もれなく旦那もついてくるがいいか？」

「「「ええええええ!!!??」「」」

「あはは、楽しい人たちね。いい職場みたいでよかった」

「まあな。気のいいやつばかりだよ」

ミレイユが既婚者と知って、肩を落として業務に戻る隊員たち。この頃からかわれることが多かったから、いい気味だ。

次の日の朝。

「さあて、兄さんの様子もわかったし、そろそろ帰ろうかな」

昨夜遅くまで飲んでたくせに、ミレイユには二日酔いの気配はない。寝台をとられ、固い床の上に寝た俺は体中が痛いというのに。

「おまえ、結局何しにきたんだよ」

王都からここまで、俺の顔を見るために来るには遠すぎる。飲みながら聞き出そうとしたが、旦那のろけ話しかでなかった。

「あ、そうだったわ。はい、これ」

わざとらしく忘れていたふりをして、手提げから取り出されたのは上質の羊皮紙。

巻き終わりは、ごく丁寧に蠟ろうで封がされている。

「これは・・・帰還指示!？」

「国のお偉いさんが店に来て置いてったのよね。

兄さんの様子次第では渡すのやめようかと思ったけど、ずいぶん立ち直ったみたいだし。

団長さんも謝ってたわよ。部下を信じてやらなかったって」

「団長が・・・」

「騒動の元になった王女様は、国で反乱があったとかで失脚したらしいわ。」

美男子のハーレムも解散。知らなかった?」

辺境へいけいには最新の国政など入ってこない。

全く知らなかった。

「ま、よく考えて返事したら？ お詫びを兼ねてか、結構いい待遇だとは思っけどね」

羊皮紙には王命による帰還指示と、戻った場合の待遇が書かれていた。

ざっと目を通す。

身分や手当、住居など、破格の条件が書かれていた。

しかも帰還を望まないのであれば、辺境での勤務を続けてもいいとある。

帰還の最終期日は1か月後。

それまでにどうするか決めて返事をする。

「王都、か・・・」

ミレイユを見送って、机に向かう。

暗記するほど何度も読んだ指示書は、今はルウの体の下に敷かれている。

「おまえな、なんでそういうところで丸まるんだ？

王の署名が入った書類だぞ。不敬罪で捕まっても知らんからな」

「うなー？」

「辺境じゃ、その取締りも警備隊の仕事か。

ルウ＝ヘルベルト＝ヴュストくん。

貴下を、ブルクハルト国王の名誉と尊厳を害した罪で拘束する！」

がばつと覆いかぶさるうとしたのを、ひらりと避けられた。
赤い瞳がきらきらと光り、長い尻尾がゆらゆらと揺れている。
遊ぶ気だな？

「待て、こら！」

「ふにゃんっ」

家具の間を逃げ回るルウを、どかどかと追いかける。
狭い室内では、小回りの利くルウのほうが有利だ。

「それ！」

棚から棚へ飛び移ろうとしたところを捕まえた。

「やんっ」

え？

「な、なう！」

しばしルウと見つめ合う。
今、しゃべらなかつたか？

「ルウ？」

「にゃー・・・」

目をそらすルウ。耳も鬃も垂れ下がっている。
こいつめ、しらを切るつもりだな。

「よおし、くすぐりの刑だ!」

ルウは撫でられるのは好きだが、おなかをつつかれるのはくすぐりたがる。

「ふにつ、ふにゃんつ、うなーッ」

「もう書類に寝るなよ。書類の上を歩くのもだめだぞ」

「うにゃ、んなーう」

ルウとひとしきり遊んだら、煮詰まっていた気分が浮上した。最終期日まで1か月もあるんだ。ゆっくり考えればいいじゃないか。

「じゃ、風呂入って寝るか」

「な!」

ミレイユにほめられた毛並みを丹念に洗う。

「うなー」

「気持ちがいいか? よかったな」

王都に行ったら、こんな時間はとれないかもしれない。ルウとの生活を考えれば、辺境にいたほうがいい。しかし王都には、知人も友人も、地位も名誉もある。

「どうしたもんかな」

つんとルウの鼻先をつついたら、くしゃん！とくしゃみをした。

「大丈夫か？ 俺につきあって床なんかで寝るから……。早く寝ような」

辺境か、王都か。

答えはまだ当分出そうになかった。

*** 閑話 ルウの冒険 ***

あれ、窓が開いている。

出勤するカールを見送ったあと、いつものように窓辺で日向ぼっこをしようとしたら、窓が開いていた。

カールが閉め忘れらしい。

人型になって閉めるのは簡単だけど、せっかくだからお散歩に行ってみようと思った。

この間まではカラスや犬に襲われたら大変だと思って出かけなかったけど、自由に変化できる今なら、ちよっとくらいの冒険はできそうだ。

出窓から飛び降り、庭を抜ける。

家の前の小道にでると、蛙が飛び跳ねて道を横断していた。むずむずむず。

猫の本能がうずく。

「にゃ
」

前脚でつついてみた。

蛙はぎょっとしたようにこちらを見て、ぴよこんぴよこんと速度を増して逃げはじめた。

「にゃっ にゃっ にゃっ
」

追いかけてからかう。

蛙も一生懸命逃げているけど、猫にかなうはずはない。

ガサツ

余裕でかまっていたら、草むらに逃げ込まれた。

あれ、どこ行っただの？

人間ならたいしたことのない背丈の草も、今の私には見上げるほどの大きさ。

小さな蛙を探すのは大変そうだ。

ガサツガサガサツ

耳を澄ませていると、右の方から音がした。

そこか！

「ふにつ」

後ろ脚で跳びあがり、頭から草むらにつっこんだ。

指先にくにやりとした感触。

捕まえた！

「シャーーーーー!!」

「ふぎゃーーーーーっ」

蛙だと思ったのは蛇だった。

蛇、いやあああああ！

脱兎のごとく逃げ出す（猫だけだ）。

はあっはあっ

ようやく落ち着いた時には、まったく知らない場所にいた。

まずい。

完全に迷った。

私の行動範囲ってば、カールの家の前と一回とお通ったきりの兵舎への道だけ。

カラスにつつかれる心配より、迷子の心配をすべきだった。

こればかりは、人型になってもどうにもならない。

それどころか、裸の女の子が「カールの家はどこですか」なんて聞いたら、どんな騒ぎになることか。

なんとか自力で帰らないと。

見覚えのある景色を探してとぼとぼと歩く。

『おい』

ん？

『おまえだよ、おまえ！ その白いの！』

声のした方をきよるきよると探す。

どうやら声の主は木の上にいるようだ。

ガサッと音がしたかと思うと、くるりと一回転して、黒い影が降りてきた。

『見ない顔だな。おまえ、どこの飼いだ』

お月様みたいな金色の瞳をした黒猫が、話しかけてきた。

「ってゆーことで、カールの家、知らない？」

これ幸いと、道を訊くことにした。

『なんかいまいちわかんねえな。なんで人間の言葉しゃべってんの？ 猫語でしゃべれよ』

「私はこれしかしゃべれないの。あなたも飼い猫なら少しは理解できるんでしょう？」

『飼い猫？ 飼い猫つつたか？ 飼われてんじゃねえよ。スヴァルは俺の恋人だ』

「はあー？ あなた、あの気に入らない女の人のとこの猫なのお？ 恋人って何よ。向こうは人間であなたは猫じゃない」

『なんだよ、細かいとこまではわかんねえけど、今馬鹿にしただろ』

「わかんないならいいよ。とにかく、カールの家知らない？」

『カール？ カールなんて知らねえな』

「あーっ、もうー！」

イライラするっ

こんなのに頭下げて、道を訊かなくちゃならないなんて！

でも訊かなきゃ帰れない。

あの人はカールを何て呼んでた？

「隊長さん……そうだ、隊長さんだ。」

カールは警備隊の隊長さんよ。隊長さんのおうち、知らない？」

「んだとお？ おまえ、あのアホ隊長んこの猫か！」

「アホ隊長ですつてえええ！？」

黒猫風情が、私のカールをアホ呼ばわりッ

許せない！！

「あんたんこの飼い主のほづが、針金みたいな年増じゃないの！」

『なああんだとおお！ 今スヴァルの悪口言ったな！？ 言っただろっ！』

「ふん！ 言葉はわかんなくても悪口はわかるのね。カールはアホじゃないわ。訂正しなさい！」

『この間俺んちに来たときに、一日中ぼーっとして庭ながめてたぞ。あんなんで隊長なんてよくできるよな！ ふぬけだから田舎にとばされたんだろ』

「ちょっと、あんたその話、詳しく教えなさい。あんたんちで一日中なんですつて？」

なんでカールがあんたんちに行くのよ」

『スヴァルは飼い主じゃないぞ。恋人だ』

「だーっ、もう、あんたがあの子の年増をどう思ってたほうがいいから！
カールは何しにいったの？ あんたたちで何したの？」

『スヴァルは誰にもやんないからな。つたくあのアホ隊長が来てから、なんだか浮かれてるんだ。』

『子どもと遊んでるのはいつものことだけど、兵舎にでかけることも増えてさ……』

「だからアホ隊長っていうんじゃないわよ！」

『おまえこそスヴァルを年増っていうな！』

「言葉わかってんじやないの！ あんたわざと道教えないんじゃないでしようねえ？」

『はああ？ 猫語でしゃべってくんねえとわかんねえなあ』

「キーーーー！」

「ルウ？ その傷はどうした」

あのと、黒猫と大乱闘をして見事勝利。
道案内をさせて、なんとかカールより先に帰って来られた。
これは名誉の負傷だよ。ほめて、ほめて！

「背中に草の種もくつつけてるし。」

「ははっ 昼間何してたんだ？ 楽しそうだな」

「んなう、なう！」

カールのために戦ったんだよ！

あいつつたら、アホだのふぬけだの悪口ばかり言うんだから！

「んん？ そうか。楽しかったか。風呂から出たら、薬塗ってやるからな」

ちよつとずれてるけど、頭をぼんと撫でてくれた。

うふん、カールの大きな手、好き。

結局スヴァルさんの家に何しにいったのかはわからなかったけど、別にたいした用事じゃなかったんだろ。たぶん。

「ふにつ、んにゃ・・・」

「しみるだろう。あーあ、せつかくのきれいな毛並みが・・・」

カールはできるだけ優しく洗ってくれたけど、石鹸が傷にしてみた。

あの黒猫め。もっとひっかいてやればよかった。

孤児院育ちを舐めるなよ。

小さい頃はいじめられたこともあったけど、それなりに揉まれて育った私である。

「おまえがしゃべれたらいいのにな」

え？

「今日一日何があったのか、聞いてみたいな」

そうだね。私もカールに聞いてほしいな。
でも猫がしゃべったら変でしょう？

「しゃべる気になったら、いつでもしゃべってくれよ。俺は驚かないからな。というより喜ぶぞ」

「うなー……」

そうなの？

喜んでくれるの？

湯船からあがり、ふかふかのタオルでカールが体を拭いてくれる。ぷるぷるっと体を振りたいけど、カールにかかるから我慢。

「いつそ人型になってくれても……」

「んな？」

え？何？

耳のどこ拭いてるときだったから、よく聞こえなかったよ。

「いや。あんまり怪我するなよ。まあ今日は俺が窓を閉め忘れたからな。家の中にいる分には平気だろう」

毛が乾いたところで、カールが薬を塗ってくれた。

うわ、そんなところまで怪我してたんだ。

うん、もうちよっと自粛するよ。

私も大人気おとなげなかったな。

あの黒猫だって、飼い主のことが大好きなだけなんだから……。

「ん？ 寝たのか？」

カールの膝の上。

背中を撫でてくれる手が心地よくて、眠くなってきた。
寝たくない。

もっとカールの声を聞いていたいし、もっと撫でてほしい。

「疲れたんだな。おやすみ、ルウ」

抱き上げて、キスしてくれる。

寝台に入ると、あっという間に眠ってしまった。

『なんであんたが夢に出てくるの！』

『うるせえ、白猫めっ。今度は負けないぞ！』

夢の中でも戦って、起きたらカールが傷だらけだった。

「おはよう、ルウ。君が強いのはわかったから、ほどほどにな？」

「なーう……」

「じいめんねっ」

4 迷い

「帰還指示、つすか」

「ああ」

昼下がりの兵舎。

午前中いっぱい悩んで、ギユンターにだけは通知が来たことを知らせた。

細かい内容は控えたが、希望すればここに残ることも可能なこと、1か月以内に返事をしなければならぬことを伝える。

「もちろん、戻るんすよね？」

「・・・迷っている」

「迷ってる？」

「なんだよ、おかしいか？」

「いえ・・・」

心なしか、ギユンターが嬉しそうにしている気がする。

「隊長は、冤罪さえ晴れば、すぐに王都に戻りたいんだと思ってました」

「まあな」

「猫ルウですか？」

「それだけじゃないさ」

「ははっ、その迷いの一部に俺らの存在があると思いたいっすね。

俺は隊長がどちらを選んでもいいように準備しておきますよ。それが補佐官の仕事っすから。

隊長は俺たちのことは気にせずに、一番いいほうを選んでくださいね」

「ありがとう。他の奴らにはまだ・・・」

「ええ、言いません。思う存分迷ってください」

「なんだよ、それ」

他人を拒絶し、必要以上の会話をしようとしなかった俺に根気よく話しかけてくれたギユンター。

ルウに出会って少しずつ変わってきた俺が、村になじめるように尽力してくれた。

「基本教練の写本はどうだ？」

「2冊はできました。残り3冊もあと少しっす」

「そうか」

「隊長のおかげで、俺らもずいぶんましになりました。本当に感謝しています」

「・・・なんだか追い出そうとしてないか」

「ははは！ そんなことないっすよ!」

「ったく・・・」

相変わらずの軽いノリだが、暗くならないのは助かる。
夕方まで通常の業務をこなし、ルウの待つ家へと帰った。

「ただいま、ルウ」

「・・・んなさう・・・」

「ルウ？ おい、ルウ!」

5 熱

風邪をひいた。

昨夜からちよつとおかしい感じはしてたんだ。

くしゃみが出るし、体がだるい。

朝カールを見送ってから、ぶるりと寒気が来て、夕方には熱が出ていた。

帰ってきたカールを出迎えたまでは覚えているけど、その後の記憶がない。

頭がガンガンと痛む。

息が熱い。

苦しい。

助けを求めるように手を伸ばすと、大きな手がそつと握ってくれた。カールだ。

乾いた布で、額の汗をぬぐってくれる。

ああ、これはきつと夢だ。

熱のせいで、夢を見てるんだ。

だって私の手は人間の手なのに、カールが平然と側にいる。

髪を撫でて、人ならば気味悪がるはずの目を、心配そうにじつと見つめてくる。

たぶん実際には猫の私を看病してくれてるんだな。

これは、本来の私を受け入れてほしいっていう、私の願望が見せた夢。

ルウが熱を出した。
出がけにだるそうにしているとは思ったが、兵舎から帰ってきてみればふらふらで、出迎えと同時にぱったりと倒れた。

「ルウ？　おい、ルウ！」

抱き上げて見れば、体が熱い。

昨日のくしゃみは風邪の前兆だったか。

寝台に運び、寝かせてやる。

猫ならば寝かせておけばそのうち治ると思うが、ルウの場合はどうなんだろう。

夕食と風呂を済ませてルウの様子を見に行くと、熱のせいなのか、人型になっていた。

はあはあと荒い息をしている。

上気した頬。額に浮かぶ玉の汗。

かなり苦しそうだ。

「うう・・・」

上掛けの下から白い手が伸ばされる。

そつと握ると、うつすら目を開けた。

赤い瞳が熱でうるんでいる。

額の汗を拭いて、頬にかかる髪を梳く。

ルウは一瞬不思議そうな顔をしたが、にこつと微笑むとまた目を閉じて荒い息を繰り返した。

人型でいるならば、人間用の薬湯を飲ませてもいいだろうか。

握った腕を寝具の中に入れ、薬湯の用意をする。

少し苦味があるため、蜂蜜をまぜてやった。

吸いのみなどないから、普通の汁椀に入れてきたが、どうやって飲ませたものか。

苦しそうに眉根を寄せるルウを抱き起こす。

上掛けがずれて肩があらわになるが、できるだけ見ないようにする。

「ルウ、熱さました。飲めるか？」

口元で椀を傾げる。

「……んっ、ごほっ、ごほっごほっ」

いくらか飲まないうちに吐き出してしまった。

「ルウ。ちゃんと飲まないと治らない」

仕方なく。そう、仕方なくだ。

俺は薬湯を口に含んだ。

ルウの顎をとり、上向かせる。

開いた唇に、己のそれを重ねた。

こくり。

細い喉が動く。

ちゃんと飲んだのを確認して、二ふたくち口目。

「んっ……はぁ……っ」

嚥下の合間に吐息が漏れる。

熱のせいで体が熱いのはわかっていても、口移しを繰り返すうち、頭の芯がしびれてくる。

肩を抱き、最後の一口を飲ませる。

量が多かったのか、口の端からこぼりとこぼれた。

あふれた薬湯を舌で舐めとる。

甘いのは蜂蜜か、ルウか。

確かめるように下唇をなぞった。

「ん……」

「ルウ……」

薄く開けられた口からのぞく小さな舌に誘われ、必要もないのに再度唇を重ねた。

いつまでも触れていたい、やわらかな感触。

「カール……?」

真紅の瞳が俺をとらえ、戸惑いに揺れる。限界か。

「おやすみ、ルウ。早く治せ」

「うん・・・」

寝台に横たえ、肩まで上掛けを掛けた。
髪を撫でて、こめかみにキスをする。
ルウは安心したように目を閉じた。

寢室の扉を閉め、居間の椅子に腰かける。

「はあ・・・」

机に肘をつき、顔を両手で覆う。

脳裏に浮かぶのは、先ほどのルウ。

汗ばんだ肌。

熱い吐息。

うるんだ瞳に赤く染まった頬。

唇はどこまでもやわらかく、舌を吸えば小さな声が漏れた。

彼女が猫でも人でもいい。

もう、離せない。

5 熱（後書き）

お約束ですが、入れたかったんです。
カール兄さん、開き直ってロツクオンです（笑）

6 春

えーっと。

これはどういうことなんだろう。

「食べられるか？」

カールがミルクで煮たパンをスプーンですくってくれる。

あーんと口を開ければ、一口ずつ入れてくれた。

「うまいか？」

うん。お砂糖が入ってて、甘くておいしい。

それはいいんだけど。

「髪が邪魔そうだな。しばるか？」

ふるふる。

首を振ると、カールは苦笑して、頬にかかった髪を避けてくれた。そう、私は今、人型ルチノイでいる。

カールのシャツを着て、枕を背もたれに寝台に身を起こしている。

人型の私の手を握ったカール。

あれは夢じゃなかったのか。

「熱は・・・だいぶ下がったな。一応薬湯も飲んでおけ」

カールが私の額に手を当てて熱を診る。

ほどよく冷めた薬湯は、ちよつと苦かったけど蜂蜜の味でなんとか飲めた。

これ、前にもどこかで飲んだことがあるような・・・？

「眠くなくても、横になつてろよ。居間にいるから、何かあったら呼べ」

私の背中を支えて横たわらせてから、空になった食器を持ってカールが席を立つ。

こくりとうなずいたけど、カールがいなくなるのは寂しい。病気のときって心細くなる。

「くす、そんな顔するな。すぐ隣の部屋にいるんだから」

そういつて、寝台にもぐる私に軽くキスをした。

人の姿でのキス。

かあぁつと頬が熱くなって、思わず上掛けを鼻の頭まで引き上げた。

カールはそんな私の頭をぽんぽんと撫でて、部屋から出て行った。

私が入ってわかってるんだよね？

この姿でいいの？ 気味悪くないの？

窓からは春の陽が差し込んでくる。

ぽかぽかとした日差しに誘われて、いつのまにかまた眠ってしまった。

「補佐官、今日隊長休みなんすか？」

「ああ。山羊乳^{ミルク}の配達に行ったノイさんが言付^{こと}かってきた。猫^{ルウ}が熱を出したんだと」

「猫の看病で休みつすか・・・」

「隊長らしいつすね」

「んだ・・・」

「赴任以来、全然有休とつてなかったからな。たまにはいいんじゃないか」

「そつつすね」

ふっ。

思わず笑みがこぼれた。

人型でいるのに俺が普通に接するから、ルウは困っていた。

俺をちらちらと見ては、何か聞きたそうにするが、結局一言もしやべらない。

あのかわいい声が聞きたいのに。

いや、かわいいのは声だけじゃないな。
スプーンを差し出したときに遠慮がちに口を開ける動作とか、キスをしたときに真っ赤になった顔とか。
むしゃぶりつきたくなる。

「いかん。病気が治ってからだ」

猫でも人でも離さないと決めた。

長く人の姿でいられるなら、王都のほうが暮らしやすいだろう。

あの容姿はこんな辺境では目立つ。

いろいろな人種がいる王都ならば、さほど気にされないのではないか。

食器を洗い、洗濯をする。

今日は休暇をとった。

また隊員たちにからかいのネタを提供してしまったが、先ほどの心細そうなルウを思うと休んで正解だった。

寝室をのぞくと、ルウは眠っていた。

昨夜とは違い、規則正しい寝息が聞こえる。

換気のために窓を開け、はみだした手を寝具に入れてやろうとしたら、きゅっと握られた。

それだけで、俺はその場から動けなくなる。

胸の動悸を感じながら、寝台の横に座り込む。

つないだままの手を寝具の中に入れ、もう片方の手でルウの頭を撫でた。

口元が何か言うように動き、にっこり微笑んだ。
いい夢を見ているようだ。

日の光が温かく、さわやかな風が花の香りを運んでくる。

遠くで鳥の声が聞こえる他は、何の物音もしない。

まるでここだけ時間が止まってしまったかのような。

すやすやと眠るルウ。

俺の、ルウ。

まばたきをする一瞬すら惜しい気持ちで、俺はいつまでもルウの寝顔を見ていた。

7 本当の私

目が覚めたら、カールが寝台に寄りかかって眠っていた。私の右手が、カールの大きな手に包まれている。ずっとそばにいてくれたのかな。ずっと、手をつないでくれたのかな。

うれしくなって、左手もカールの手に重ねて頬を寄せる。近くなった顔をじっと見つめた。

最初は怖かったんだよなあ。

髪はぼさぼさだったし、ひげは伸ばし放題だったし。ほとんど目しか見えなくて、でもその碧の瞳がとっても優しかったから拾われたことに感謝した。

髪を切ったら、こんなにカッコいいとは思わなかった。

男の人の容姿をどう言ったらいいのかよくわからないけど、いままで会った人とは違う。

背も高いし、きっちり鍛えてる体は、人になった私でさえ片手で持ちあげられると思う。

「カール」

眠るカールに呼びかける。

カール、好き。

カールが、人の姿の私を受け入れてくれたらうれしいな。もしだめだったら・・・一生猫の姿でいるから側に置いてって頼んでみようかな。

からめた指先に口づける。

そうだ、さつきキスされた。

猫じゃないのになあ。いいのかなあ。

もしかしてカールには猫に見えてるってことあるのかな。うーん・・・。

熱は下がった。

猫の姿になって、カールが起きるのを待ってみよう。

「ん・・・ふああ・・・。寝てしまったか」

カールが大きく伸びをする。

「んなう」

床に座るカールの膝にすり寄ってみた。

「ルウ？」

はい。猫ですが、何か。

あれ、なんか眉間にしわがよってるんだけど。

「そうか。そういつつもりか」

カール、怒ってる？

「俺はなかったことにする気はないぞ。こっちに来て」

抱き上げられて、枕元にたたんでおいたシャツをかけられた。

「人になれるんだろう？ もう俺をごまかすのはやめてくれ。人になつて俺の名を呼んでくれ」

カール、やっぱりわかってたの。

でも“人になれる”って・・・もしかして、猫が本当の姿で、猫から人に変化できるって思ってる？

「ほら、早く」

カールが急かす。

猫が人になれるんでも、人が猫になれるんでもカールにとっては同じなのかな。

でもこれはいいい機会だ。

人でもいい？つて聞く好機^{チャンス}。

だめなら、ずっと猫でいるからつて頼むんだ。

カールの腕の中。

私は人に戻るよう意識を集中した。

なんで猫なんだ。

ここまで来てごまかす気ているのが許せない。

こっちは思い悩んだあげく、猫でもいいと思ったのに。

ルウは、俺に抱かれシャツをかけられると、長い逡巡の後、決心したように目を閉じた。

輪郭がぼやける。

ルウは、俺の膝の上で人に変化した。

「ルウ……」

意識がはつきりした状態で、ようやく見せてくれた姿に感動する。シャツのボタンをとめてから、ルウは不安そうに見上げてきた。

見下ろす形になったため、おそろいのペンダントの先に見えてしまう谷間とか、裾から伸びた太ももとかは視界にいれないようにする。そっちはあとで堪能しよう。今は大事なときなのだから。

「……」

「ルウ、何か言ってる？」

「……」

「ルウ」

「……じゃあ」

は？

にやあ？

そりゃ、「何か」とは言っただけれども。

「ぶっ……く……はっ、ははは！」

それはないだろう！

俺は、真剣に君に向き合おうと思ったのに。

「やつ、なんで笑うの？ だって、だって、何を言えはいいの!？」

ぼかぼかぼか。

頬を染めたルウが、俺の胸をたたく。

「ああ、うん、悪かった。君の声が聞きたかったんだ。しゃべって
くれてうれしいよ。」

「うれしい？」

「ああ。俺の名を呼んでくれるともっとうれしい」

「名前？」

「うん」

「……カール」

「ん」

「カール」

「うん」

「カール」

「うん」

「もっと?」

「もっと」

「カール……ん……」

しまった。

口をふさいだら、声が聞けないじゃないか。
でもこのやわらかな感触も捨てがたい。

「カール……カール……」

口づけの合間に、ルウは律儀に名前を呼び続けてくれる。

「ルウ……。君の本当の名前も教えて?」

「ん……」

拾った当初、瞳の色からルビーと呼ばうとしたら、抗^{あらが}った。
仕方なくルウとしたが、たぶん似ているけれど違う名前がある。

「なんていうの?」

「・・・ルチノー・・・」

「ルチノー。きれいな名だ」

確か、どこかの言語で“光輝く”という意味を持つ。

窓から差し込む春の陽の下、白銀の髪に彩られた彼女はきらきらと輝いて見えた。

「ありがとう」

名前の意味を知ってか知らずか、微笑むルウ。いや、ルチノー。その微笑みにつられて、また口づけた。

「・・・なんでキスするの？」

「君が、好きだから」

するりと言葉が出た。

「好き？」

「ああ」

「こんな見た目でもいいの？」

「こんな？」

人型のことだろうか。むしろ大歓迎だ。

「もちろん」

「本当に？」

「本当に」

ふうつと彼女の身体から力が抜けた。
俺に寄りかかって、身を預けてくる。

「ルウ、いや、ルチノー。泣いてるのか？」

わずかに肩が震えている。

「ルウでいい。カールにはルウって呼んでほしい。カールがつけてくれた名前だから」

「そうか？」

顔を上げたルウの瞳は、涙でぬれていた。
きめ細かな肌を傷つけないように、そつと指でぬぐってやる。

「この姿を見られたら、カールに嫌われるって思ってた。猫じゃな
きゃここに置いてもらえないって」

「なぜ？」

そんな風に思っていたのか。
ごまかそうとしていたわけではなかったのだ。

「だって、気持ち悪いでしょう？ 髪はこんнадし、目も血みみたいな色」

「気持ちが悪いなんでとんでもない。俺はいつも言ってるだろっ？
真っ白な体も、真紅の瞳もきれいだ」と

「でもそれは猫だから・・・」

「猫じゃなくても、ルウはきれいだ。この髪も・・・」

長くまつすぐな髪を一房とって口づける。

「瞳も・・・こども、こども・・・」

まぶたに、そして頬に、つないだ指先に、次々と口づけていった。

「ん・・・くすくす・・・。カール、くすぐりたいよ」

調子に乗って首筋に顔をうずめたら、身をよじって避けられた。
惜しい。

「私、ここにいていいの？」

「ああ。俺の方からも頼む。ルウ、ずっと俺のそばにいてくれ」

「・・・はい・・・」

極上の笑顔とともに、首にまわされる細い腕。

そっと抱きしめて、想いが通じてから初めての口づけを交わした。

「ルウ・・・」

「はい」

見つめれば、幸せそうに見つめ返してくるルウ。
繰り返す口づけは、唇を合わせるだけのもの。

・・・舌を入れたら驚くだろうか。

昨夜は熱で朦朧としていたはずだから、きっと覚えていない。
どう多く見積もっても二十歳ハタチには届かなそうなルウ。
下手したら15・6に見える。こういった経験はないだろう。
ルウを抱き上げ、理性を総動員して寝台に寝かせた。

「カール？」

「熱が下がったばかりだからな。もう少し寝てる」

「でも・・・」

ルウが俺の服の裾をつかむ。
あああ、かわいい。
かわいい過ぎるからやめてくれ。

「大丈夫。そばにいるから。いい子にしてたら後でこぼつびをやる
う」

「こぼつび？ 何？」

手をひっこめながら、目を輝かせる。
幼な子のような反応に、心が温かくなる。

「何かはあとでのお楽しみだ。目を閉じて。眠れ」

「眠くない」

「眠ったほうが早く治るぞ」

「んんん。頭、撫でてくれる？」

ねだられた通りに撫でてやれば、満足そうに目を閉じた。

尻尾があれば、大きく左右に振っていたことだろう。

前脚を交互にふみふみしたかもしれない。

うーむ、猫の姿も好きだ。

結局ルウならどちらでもいいんだな、俺は。

しばらく撫でていたら、すうすうと寝息をたて始めた。

熱のせいで体力が落ちていたのだろう。

さて、ごぼつび。何がいいだろう。ルウが喜びそうなもの。眠るルウを眺めながら、俺は幸せな悩みに浸った。

8 幸せの涙

いい匂い。

くうとお腹が鳴って目が覚めた。

枕元には湯気をたてるチーズリゾット。

「起きたか」

水差しを片手に、カールが扉を開ける。

その姿を見ただけで、じんわりと涙が浮かんだ。

「ルウ！？ どこか痛むのか？」

水差しを置いて、慌てて近付いて来るカール。

「ううん、大丈夫。うれしくて・・・幸せで、涙がでちゃうの」

おでこに手を当てていたカールは、ほっと胸をなでおろした。

「驚かすなよ。」

腹具合が悪いわけじゃなさそうだから、好きなもののほうがいいかと思っただけ、食べられそうか？」

カールがリゾットのお皿とスプーンを手にする。
長細いお米が、チーズとからんでとってもおいしそう。

「うん、ありがとう」

体を起こしてお皿を受け取るうとしたけど、持たせてくれなかった。

「口開けて」

「えっ、もう自分で食べられるよ」

「だめだ。ほら」

スプーンをぐいぐい押し当てられて、口を開けた。

朝ごはんのときは、なんで人の姿でいいんだろうって方に気がいつてたから平気だったんだけど、なんだかすごく恥ずかしい。

「うまいか？」

「うん、すごくおいしい」

ゆっくり噛んで飲み込む。

やさしい塩加減とお米の甘みが、体に染みわたる。

カールは私の返事を聞くと、嬉しくて仕方ないという風に微笑んで、二口目を口元に運んできた。

どうしても、私に「あーん」とさせたいらしい。

まったくもう、甘いんだから。

人の姿になっても変わらない、ううん、それ以上の愛情を示してく

れるカールに、感謝の気持ちでいっぱいになる。
気味悪がられて捨てられると思ったのに、こんな私をまるごと受け入れてくれた。

「また泣いてる」

「だって・・・」

まだ半分以上残っているお皿を置いて、カールが目元に滲んだ涙を舐めた。

「やつ、何・・・」

「悲しいわけじゃないとわかっていても、君の涙を見るとせつなくなる」

深い碧の瞳が細められる。

カールに辛い思いをさせるのは嫌だったから、ぐっと力を入れて涙を我慢した。

「ふっ、そんなに無理しなくてもいい。泣くなとは言わないさ。

そのかわり、泣くときは俺のところまで泣いてくれ。他のやつの前とか一人で泣くとかはするなよ」

んん？

私が泣いているのを見るのは嫌だけど、他の人の前や一人で泣くのはもっと嫌なの？
変なの。

両の目の涙を舐めとったカールは、そのままキスをしてきた。

朝からもう何回したるう。

あいさつには十分だと思っただけ。
そう言ったら、

「あー・・・あいさつ。あいさつね」

カールの目が泳いだ。

「違うの？」

「違う。あいさつって何回してもいいだろう？ 俺はルウが好きだから、何回だってしたいんだ」

「えっ、そ、そう・・・」

好きと言われて胸が高鳴る。

勘違いしちゃだめ。

カールの好きは、猫が好きとかチーズが好きとかの好きなんだから。この姿でもいって言うてくれただけで、満足しなきゃ。

でもあいさつってわかってても、口にキスされると変な気分になる。

「残り、自分で食べるか？」

「うん」

ようやく渡されたお皿にほっとする。

カールの側にいたいけど、カールが側にいるとどきどきするの。

「顔が赤いな。また熱が出てきたか？」

大きな手が額に当てられる。

カールに触れられると思うだけで、さらに頬が熱くなる。私、どうしちゃったの？

「ちよつと待つてる。薬湯を作ってくるからな」

真っ赤になった私を見て、カールは台所に行ってしまった。ごめんね、具合が悪いわけじゃないんだけど・・・。

蜂蜜入りの薬湯を飲んで、午後もたつぷり寝たら元気になった。今日つてもしかして、カールにお仕事休ませちゃった？うわぁ、どうしよう。

「たまにはいいさ。1日や2日俺がいなくても、たいして困るわけじゃない。

いや、ずっといなくなつて・・・」

そういえば、カールの妹さんが王都から手紙をもってきたんだつた。ミレイユさん。

元気な女の人だったなあ。

カールの妹だけあつて、すごく美人だった。

カールが辺境へんきょうに異動してきたのってなんでなんだろう。

ミレイユさんは女性関係がなんとかつて言つてた。

カール、モテそうだもんね・・・。

「一日よく寝たからな。ごほうびだぞ」

夕食のあと、カールが出してくれたのは”アイスクリーム”。初めて食べた！甘くて、冷たくて、なんておいしいの！

喜んで食べてたら、「味見してなかった」と言っつて唇を舐められた。言えは一口くらいあげたのに。

「カールも食べる？」

「俺はルウが食べ・・・いや、なんでもない」

おやすみのキスは、やけに長かった。

2人で寝ると狭いかなと思つたので、私は猫になつて丸まつた。

カールは人型で大丈夫と言つたけど、猫になつた私を見て全身を撫でまわした。

やっぱり猫の方が好きなのかな。

猫の方が顔が赤くなつてもわからないから、もうしばらく猫の姿でいようかな。

8 幸せの涙（後書き）

お月様の「白猫の恋わずらい〜月光編〜」に”アイスクリーム”投稿しました。

9 新婚さんいらっしやい？

朝起きたら、ルウはすっかり元気になっていた。
よかった。

猫のルウにおはよのキスをして、人型になつてくれないかと頼む。
変化してから、もう一度おはよのキスをした。
頬を染める姿が愛おしい・・・が、素肌の感触に悩まされる。
いかん、朝から何を考えているんだ。

「君の服を用意しないとな」

「あー・・・実は、あるの」

ルウに頼まれて、居間に置いてあったクッションを持ってくる。
ボタンで留められた口を開けると、中から女物の服がでてきた。

「エメさんがくれたの」

袖なしのワンピース。

以前見かけた服は、そんなところに入っていたのか。

あの女魔術士め。

もう一つのクッションも含め、数着あるらしい。

この村で女物の服を求めるのは難しそうだから（今度こそ何を言われるかわからない）、正直、助かった。

毎日俺のシャツを着られたら、貧血になりそうだ。

ルウが身支度を整えている間に、朝食を作る。食卓に向かい合って座り、同じものを食べる。そんなささやかなことが嬉しい。

「あのね、カール。お夕飯、私が作ってもいい？」

それは、人型のルウが、夕飯を作って俺の帰りを待っていてくれるということか。

嬉しい。嬉し過ぎる・・・！

「あの、あの、もしよければ、なんだけど。そんなにお料理に自信があるわけじゃないんだけど・・・」

喜びのあまり声もでない俺をどう思ったのか、だんだんとうつぶい
ていくルウ。

「いや、嬉しい。楽しみにしてる」

そういうと、ぱつと顔をあげて花のように微笑んだ。

“花のように”・・・。

くっ・・・俺にそんな表現ができるようになるとは・・・！

家の片づけもしてくれするというルウに、家からは出ないこと、カー
テンは閉め切っておくことを約束させる。

「あ・・・。こんな私、他の人に見られたら恥ずかしいもんね」

「そうじゃない。なんとさえばいいんだ？ 見られたくないのはその
うなんだが、理由が違う」

「髪や目の色が気持ち悪いからでしょう？ 不吉な色だから・・・」

「君の髪も瞳もきれいだよ。そうじゃない。俺以外の、誰にも君を見せたくないんだ」

わかったのかどうか、ルウはとりあえずくくと頷いた。彼女は人型の自分の容姿に、かなり劣等感があるらしい。俺は、人目について余計な虫がつくほうを心配しているのだが。

いつてらっしゃいのキスは、彼女は背伸びをしながらで、俺は身をかがめて。

どこからどうみても新婚の風景に、気恥ずかしくも嬉しくて仕方ない。

ルウは俺とのキスをあいさつだと思っているようなので、そこは存分に利用させてもらう。

しかし、ということは俺が「好きだ」と言ったのは、どう思っているのだろう。

まさか猫が好きとか肉が好きとかと同じように考えているのではないだろうな・・・。

「隊長、ルウちゃん元気になったんすね」

「ああ。昨日は急に休んで迷惑をかけたな」

「いえいえ、大丈夫ですよ。柵の補強と井戸蓋の点検・補修の報告がこれです。」

コレット爺さんの孫娘が結婚するんで、広場を使うって連絡がき

てます。

会場の設営は有志でやるようですけど、できれば手伝ってほしい
って」

「わかった。人選はまかせる。あとは？」

「そんなところっすかね。あ、ここに署名サインください」

ギンターが差し出した書類にサインをする。

元々こいつが隊長だったのだから、俺などいなくても大丈夫だ。

やはりルウを連れて王都に帰るか。

窓の外を見ると、隊員たちが行進の訓練をしていた。

「あれは？」

「やつらが自主的に始めたんすよ。基本教練の写本作りをしたでし
よ？」

あれがよかったみたいで、一から順番にやってみようって。

隊長に教わったこともたくさんあるから、結構できるのがうれし
いみたいで、昨日からやってます」

「そうか」

てんでバラバラだった彼らだが、ずいぶん警備隊らしくなってきた。

「入隊希望もちらほらありますよ。この間までは義務で仕方なく入
った感じですが。」

「かっこいいって言われるようになったからでしょうね。夏の募集
が楽しみです」

辺境の警備隊のほとんどは現地の徴兵だ。

ここでは、18歳から40歳までに3〜5年間入隊する義務を課している。

「これもカール隊長のおかげっす」

「何を急におだててるんだ」

「ははっ、心はもう王都にあるような気がしたんで。最後に決めるのは隊長っすけど、俺らはずっと居てほしいんですからね」

「……ありがとう」

うっかり涙腺がゆるみそうになって、再び窓の外に視線を移した。

「足の上げ方が甘いな。顎が出るから姿勢が悪いんだ」

「直接指導してやってください。喜びますよ」

その日一日訓練に費やし、くたびれて帰ったらルウが出迎えてくれた。
家中にいい匂いが立ち込めている。

「おかえりなさい」

「ただいま」

キスをしてからぎゅっと抱きしめた。

腕の中にすっぽりとおさまってしまっ、かわいいルウ。

「お風呂も用意したの。先に入る？」

こ、これは、以前結婚した同僚が言っていた、「お風呂にする？
ごはんにする？ それとも・・・」のことか！？

「カ、カール？ 大丈夫！？」

しゃがみこんで急に鼻と口元を押さえた俺を心配するルウ。
だだだ、大丈夫だ。ただの鼻血だから・・・。

「お風呂はあとのほうがいいねっ。ごはんの用意するから、座って
て」

焼きたての丸いパンと、細かく刻んだ野菜のスープ。
カリカリに焼いた燻製肉ベーコンに、ゆでたじゃがいもが添えてある。

「材料、適切に使っちゃったけど平気？」

「ああ。足りないものがあつたら言ってくれ。兵舎に行商人が来る
んだ」

「乾燥させた香草ハーブが何種類かあるといいな。今日はお庭にあつたの
使っちゃった。

あ、ちゃんと猫の姿でとりにいったよ！」

庭にそんなものが生えていたのか。前の住人が植えていたのだろう
か。
どおりで香りが違う。

料理に自信はないと言っていたルウの言葉は謙遜で、どこで覚えたのかヨシばあさんよりずつとうまかった。

食材は同じなのに、味付けが上品で、王都の料理屋で食べるようだ。

「わかった。このパンもうまいな。何か入ってる？」

「えっとね、刻んだバジルを練り込んでみたの。バターも多め。・
・ 贅沢だった？」

「いや、本当にうまいと思って。ルウは料理が上手だな。これから毎日楽しみだよ」

「よかったあ。ちょっとときどきしてたの。カールの口に合わなかったらどうしようって」

俺がいない間に、俺の事を考えて料理をしてくれていた。そのことがより一層、おいしく感じさせる。

「風呂、どうする？ 一緒に入る？」

「え……っ も、もちろん猫の姿でよね？」

「俺はどっちでもいいぞ」

さっき寝室で鼻血を止めるついでに又いておいたから、たぶん大丈夫。

「ね、猫でお願いします。カールに洗ってもらうのは好きなの。いい？」

上目使いで様子を伺ってこられて、今すぐにも押し倒したくなる。いかん。全然大丈夫じゃない。

「ああ。じゃあ食休みしたら一緒に入ろう」

「うん」

猫のルウを、いままでよりさらに丁寧に洗ってやった。

「ああん、カール、そこ気持ちいい」

「ここか？ こっちは？」

「そこも、もっと・・・」

猫でもしゃべれるとは驚きだ。

膝の上で洗ってやるのはいいのだが、足にはさんで隠した箇所が辛い。

よくすすいで、一緒に湯船につかる。

俺の肩につかまったルウは、とろんとした目をして気持ちよさそうに尻尾を泳がせていた。

「眠そうだな。先にあがるか？」

「んなー・・・」

うーむ、鳴くのと話すのとはどう使い分けているのだろう。

どちらもかわいいからいいか。

ずるりと落ちそうになったルウを、拭きあげて浴室の外に出してやる。

よろよると暖炉の前まで行くと、ぼてつと横になったのが見えた。春とはいえ朝晩は冷えるので、火を残しておいてよかった。

今日一日人の姿でがんばって、疲れたのかもしれない。

猫から人になるのは、体に負担がかかるのだろうか。

風呂から上がり、ルウを寝室に運ぶ。

早く帰ってくるために持ち帰ることになった仕事を片づけていたら、結構遅い時間になってしまった。

ルウとの時間を大切にしようと思うと、仕事との兼ね合いが難しいな。

こんな悩み、遊びで女と付き合っていた頃は思いもつかなかった。

他のやつらはどうしているんだろう。

明かりを消し、丸くなって眠るルウの隣に滑り込む。

「おやすみ、ルウ」

人型でキスができなかったのが残念だった。

10 告白

私だったら、いつのまに寝てしまったんだろう。

気付けば朝で、カールの腕の中にいた。

今日は朝ごはんを作ろうと思っていたから、カールを起こさないようにそつと寝台から出る。

人に戻って着替えて、朝食の準備にとりかかった。

昨日作っておいたパン生地ペイコンに、刻んだ燻製肉燻製肉を混ぜて焼く。

卵は、カールは半熟、私は固焼き。

昨夜のスープを温めて、お茶用のお湯を火にかけてカールを起こしにいった。

「おはよう、カール」

上掛けを頭までかぶって、丸くなっている。

膝を曲げないと寝台からはみだしてしまうので、いつもこの姿勢だ。

「カール、朝だよ」

比較的寝起きのいいカールが、今日は肩をゆすつても起きない。昨夜遅かったのかな。

「カール？」

上掛けを、顔のところだけめくってみた。
やっぱりぐっすり眠っている。

「カール」

つんつん。頬をつついてみる。ちよつと髭が伸びている。

「カール、起きて」

つんつんつん。まだ起きない。

猫ならば前脚でたしたし！っと叩くところなんだけど、人の姿だから、指で鼻をつまんでみた。

「ん、んん・・・」

あ、苦しそう。

孤児院で、小さい子がなかなか起きないときにやったんだよねえ。
これでも起きないときは・・・あ、忘れてた。お湯！ 火にかけて
たんだ！

慌てて台所に戻ろうとしたとき、ぐいっとな腕をひっぱられた。

「きゃあー！」

そのまま寝具の中に引きずり込まれる。

「カール、だめっ、お湯が・・・んんっ」

唇をふさがれた。
さらに足や背中を撫でられる。

「ちよつ、カール……んっ……今、私、猫じゃな……」

腕をつっぱろうとするけど、カールの力にかなうはずもない。
息継ぎをするのが精一杯で、またキスをされる。

「あつ……ふうっ……。え!?!」

カール、やつ、そこ、胸……!

「カール!! 起きて!!!!!!」

耳元で叫び、腕が緩んだ隙に台所に逃げた。
沸騰したお湯はもうなくなりかけていて、危うくお鍋をだめにする
ところだった。

水を足して沸かし直す。

お茶を淹れていると、寝室でござと音がした。
ようやく起きたみたい。

びっくりした。あんなところまで触るなんて。

カール、寝ぼけすぎだよ、もうっ

猫ならば体中撫でられても平気なんだけど、人の姿では恥ずかしい。
思い出すだけで胸がどきどきして、カールに触れたところがじ
んじんと熱い。

毎朝これじゃ、心臓が持たない。カールを起こすときは、気をつけ
なくちゃ。

「おはよう、ルウ」

「お、おはよう」

起きてきたカールは、ピシッと隊服に着替えていて、先ほどの寝ぼけぶりは微塵も感じられない。
食卓に片手をかけて、かがみこんで私におはよ用のキスをする。

「うまそうだな。朝食、作ってくれたんだ」

「うん……」

どうしよう。カールの顔がまともに見られない。
かあぁと熱くなった頬を、両手で隠す。

「ルウ？ どうした？」

「な、なんでもない。スープ、冷めちゃったかな。温める？」

「いや、もう行かないとならないから、冷めてるくらいでちょうどいい。」

昨日遅かったから、寝すぎたな」

やっぱり昨夜遅かったんだ。仕事、あったのかな。

いってらっしやいのキスをして、カールを見送る。
お夕飯はどうしようかな。

カールってお給料どれくらいもらってるんだろう。
猫と人の食費じゃ違うだろうから、ごはんときは私は猫のほうがいいかな。

あんまりお金かけさせちゃ悪いし……。

夕食のとき、勇気を出して聞いてみたら、苦笑いされた。

「そんなに頼りないか？ 左遷はくせんされたとはいえ、隊長職だぞ。
たぶん同世代の倍はもらっている。ルウがどれだけ食べたとしても、ありあまるさ」

そ、そうだったんだ。

孤児院育ちでいつも節約していた私には、倍といわれてもわからないけど、お金の心配はいらなかったみたい。

「貯金は、こつちに来てからの分しかないな。やけを起こして遣ってきてしまったから・・・。
それでも1年は遊んで暮らせるくらいはある。何か欲しいものはあるか？」

「ううん。今日香草は買ってきてくれたし、何もかも、私には十分すぎるくらい。」

カールの側に置いてくれれば、他には何もいらないの」

「ルウ・・・」

カールが手を伸ばして頭を撫でてくれる。

猫のように頬をすり寄せれば、顎をとられて口づけられた。

カールは何かというキスをしてくるから、だんだん何のキスか考えるのをやめてしまった。

ただ、自然に、そうしたいときにすればいいのかなと思う。

お風呂からあがり、ちろちろと弱く焚かれた暖炉の前で、お茶を飲む。

カールは先ほどから、じつと何かを考え込んでいる。どうしたんだろう。

空になったカップを片づけて暖炉の前に戻ると、カールの膝の上に横抱きに乗せられた。

「お、重くない？」

「ははっ、ルウなんて鳥の羽根くらいの重さしか感じないさ」

「そうかな」

いくらなんでもそんなことないと思うんだけど。

でも、眉間にしわをよせていたカールが笑ってくれたことでほっとする。

「ルウ、あんな・・・」

「うん？」

「俺と一緒に王都に行かないか」

「王都？」

「ああ。ミレイユが指示書を持ってきただろう。ブルクハルト国王ガーディアンの親衛隊員として声が掛かった。

近衛騎士が、目立つ対外的な護衛を司るのに対して、ガーディアン親衛隊は普段は普通の騎士団として王城の警護や訓練をしているんだが、有事には国王の勅命を受けて独立した動きをするんだ。

よほど信頼のおける者でないと就けない仕事だから、とても名誉なんだ。

一度左遷された俺なんかがなれるもんじゃないんだけどな」

「なんだかすごいね。私なんかと一緒にいってもいいの?」

「ルウに、一緒にいてほしい。親衛隊員ガーディアンは王城の周りに家を一軒も
らえる。」

そこに一緒に住んでくれないか。俺の・・・妻として」

「えっ・・・」

っ、妻!?

妻って、妻って、あの妻!?

えええええ!!!!?????

11 月光

突然の告白に、^{プロポーズ}ルウは驚いて固まってしまった。

そりゃそうだろう。

俺だって驚いている。

でもこの結論しかなかったんだ。

俺はルウのことをほとんど知らない。

どうして人になれるのか。俺に出会う前はどんな生活をしていたのか。

あの料理の腕前を考えると、拾った時に子猫だったからといって、ずっと子猫だったわけではないのかもしれない。

俺の前にも誰かに飼われていて、そいつのために料理を作っていたのかもしれない。

今は俺の腕の中におさまっている白い肢体を、他にも知っている奴がいるのかもしれない。

それを思うと、胸が焼けつくような嫉妬にかられる。

それでも、猫だろうが人だろうと一緒にいたい気持ちに変わりはない。

昨日今日とルウが待つ家に帰ってきて、この上ない幸福な気持ちに満たされた。

こんな幸せな気持ちは、いままで知らなかった。

もつと一緒にいたい。
ずっと一緒にいたい。
そのためにはどうすればいいか。

「ルウ、おい、大丈夫か」

呆然とするルウの顔の前で、ひらひらと手を振ってみる。
視線は動くのだが、視線が定まらない。

「人型になるのは大変なのか？ 制限時間とかあるのか？」

とりあえず、気になっていたことを聞く。
ルウはふるふると首を振る。そうか、制限時間はないのか。

辺境^{こて}で暮らすなら猫のほうがいいだろう。
しかしそれでは俺が満足できない。

人型のルウの身体を知ってしまったから。
今朝も起こしに来てくれたのがうれしくて、ついいたずらしてしま
った。

調子に乗って胸を触ったら、逃げられてしまったが。

頻繁に変化していたら、いくらのおんきな村人や隊員でも、いつかは
ばれるだろう。

そのときルウにつらい思いはさせたくない。
かといって、人として今からここで暮らすのは無理がある。

猫のルウはみんなに会っているし、良くも悪くも世話好きの村人た
ちに囲まれたときに、あまり社会的には見えないルウがごまかしき
れるとは思えない。

やはり猫でも人でもあるとわかったときに、ルウがとても気にして
いる“気味悪がられる”ことでもあったら、立ち直れないかもしれ

ない。

そう考えて、それなら王都に行つてしまおうと思つた。
王都なら様々な人種があり、様々な趣味嗜好の者がいる。
ずっと人でいられるなら、辺境で出会つた女性として紹介すれば、
（多少俺の幼女趣味をからかわれるとしても、ああ、自覚はあるぞ。
だからなんだ？）わりと平気なんじゃないかと思つた。

昨夜、眠るルウを眺めながら、共に在る未来を考えたら王都に行く
のが一番いいと思つた。

まあ、全部投げ打つて誰もいない山奥で2人で暮らすということも
できるが、俺だつてルウに珍しいものを見せてやつたり、2人でう
まいものを食つたり、たまにはルウを着飾つて誰かに自慢したりし
たい。

騎士団の宿舎では無理だつた。

近衛も、身辺の調査が厳しいので素性のわからないルウを連れ歩く
のは厳しい。

しかし国王が俺に送つてきた書類には親衛隊とある。ガーディアン

親衛隊員の資格は国王の信頼のみ。隊員本人の氏素性すら関係ない。
その信頼に応えられるだけの力量があればいいのだ。

今の自分にそれだけの力量があるのかはわからないが、ルウのため
なら何でもしてみせる。

まだ動揺しているルウの髪を梳く。

指の間をさらりと流れ落ちる髪は、銀糸のように細く輝き美しい。
すべらかな二の腕を撫で、手を取つて指に口づける。

人差し指を口に含んでちゅっと吸うと、ぴくりとルウが反応した。

「あの、カール？」

「ん？」

「妻って、あの、奥さんだよね？」

「奥さんだな」

「私、を奥さんにするの？」

「そうだ」

「カールの奥さんが、私？」

「そう言っている」

「ええと、なんで？」

「なんだか一生懸命考えているらしいルウは、俺の手が太ももに伸びていることにも気づかないようだ。うーむ、すばらしい撫で心地。」

「ずっと一緒にいたいから。ルウは違うのか？ さっきそばに置いてと言ってなかったか？」

「そ、そうだけど。私もずっとカールのそばにいたいけど・・・」

「だったら、結婚しよう。急だから指輪も何もなくて悪いが、王都に行ったら揃いのものを求めるから」

「け、結婚・・・」

「嫌なのか？」

「嫌じゃないけど、私、こんな見た目で・・・」

「またそれを言う。ルウはきれいだ。他の誰に何を言われたのか知らないが、俺がそう言うんだからいいんだ」

「そ、そう？ でもカール、私のこと何も知らないでしょう・・・？」

う。それを言われると困る。

ワンピースの裾をたくし上げようとしていた手が止まる。

「これから知って行く。大切なのは、君と一緒にいたいって気持ちじゃないのか？」

「そうだけど・・・。あの、じゃあ、私のこと、好・・・き・・・なの、かな？」

なぜいまさらそれを聞く。

やっぱりルウは俺の「好き」をきちんと理解していなかったな。

「好きだ。猫でも人でも、ルチノー、君を愛してる。ずっとそばにいてほしい」

「え、えええええ・・・」

「なんでそこで困るんだ？ 嫌か？ だめか？」

「う、ううん……」

ぼろぼろぼろ。

とうとうルウは泣き出してしまった。

この反応は予想外だった。

「ルウ。俺の気持ちは迷惑だったか」

「め、めいわく……」

「わかった。もういわない。王都の話も……忘れてくれ」

「あ、や、ちが……うう……」

次から次へと涙があふれてくる。

そんなに泣いたら、瞳が溶けてしまう。

まなじり 瞋に口づけて、涙をぬぐう。

振り払う気配はない。

「カール、カール、ごめんなさい。私も好き。カールが好き。

場所なんて関係ない。人でも猫でもいいからそばに置いて。ずっと

とそばにいさせてください……」

「ルウ……!」

だめかと思った。

全て俺の勘違いだったかと。

俺の「好き」とルウの「好き」は違ったのかと。

俺の胸に、顔を押し付けて泣きじゃくるルウを抱きしめる。

頭を撫で、背中を撫でて、落ち着くのを待つ。

「なんで泣くの？」

「わかんない……うっ、ひいっく……止まらな……」

「俺の奥さんになつてくれる？」

「なる。こんな私でいいならっ……」

「君がいい。ああ、うれしいな。俺も泣けてきた」

2人で泣きながら、何度も口づけた。

嗚咽おえつをもらすルウは、自然と口が半開きになり、俺の舌をすんなりと受け入れた。

「ん、うう……んん……っ」

「ルウ……」

「ん……はあ……カール……」

涙で潤んだ瞳で俺を見上げてくる。

これは、いいか？ いいんだろうか。

ルウを抱き上げて寝室に運ぶ。

霞みがかかった春の月が、淡い光で室内を照らす。

寝台に横たわったルウは、広がる白銀の髪に彩られ、どこか神秘的な美しさを帯びていた。

指をからめ、口づける。

こつん、と双子の護り石が触れ合った。

「触っても・・・？」

今朝方、寝ぼけたふりで触れた身体。

ルウはこの先を知ってか知らずか、こくんと小さくうなずいた。

どこまでも優しく、ルウを壊さないように触れる。

のびやかな腕。細い腰。

きめ細やかな白い肌が、月光をうけて輝く。

「ルウ・・・」

ささやけば、確かに俺を見つめて、応えてくれた。

肩に手をかけ、服を脱がす。

衣擦れの音が、やけに大きく響いた。

その夜

俺とルウは、ひとつになった。

11 月光（後書き）

詳細はお月様で（笑）。

12 後朝

翌朝。

人型のまま俺の腕の中で眠るルウ。

あふれる喜びと愛しさで、何度もキスをする。

「んん・・・カール、おはよう」

「おはよう」

照れながらあいさつをする姿がかわいい。
あらためておはようのキスをして、2人でくすくすと笑い合っていると、おもむろにルウが口を開いた。

「あのね、私、猫が人になれるんじゃないの。元々人で、エメさんに猫になれるようにしてもらったのよ？」

「えっ」

ね、猫が仮の姿だったのか！

「孤児院育ちだから、身よりもないの。私には本当にカールだけ・・・」

いい奥さんになれるようにがんばるね」

それこそ俺には好都合だった。

猫になった経緯は後で聞くとしても、ルウに両親がいるとしたら、30男に娘をとられるなんて一発殴られるくらいではすまないかも思っていた。

“俺だけ”という言葉も嬉しくて仕方ない。

「俺も、いい旦那さんになれるよう努力するよ。これからもよろしくな、ルウ」

「はい、よろしくお願いします」

はんなりと微笑むルウは、昨日よりずっときれいになった気がする。それが、俺のせいだと思うのは自惚れだろうか。

「……あの、カール、何か、当たるんだけど……」

「ルウがかわいいから……。体、きつくはないか？ 大丈夫ならもう一回……」

「んんっ、だって、カール、お仕事……あっ」

兵舎には午後から行った。

休んでしまおうかとも思ったが、王都に戻ることにしたからには仕事は山ほどある。

「またルウちゃん具合悪いんすか？」

「まあな。この間ほどじゃないが……寝かせてきた」

「はいはい。午前中はいつも通りでしたよ。午後の予定は……」
ギンターの話を聞きながらも、つい頭は昨夜のルウを思い浮かべてしまう。

「……です。聞いてました？」

「あ？ ああ。2週間後にコル爺さんの結婚式だろ」

「“コレット爺さんの孫娘”の結婚式ですつてば。爺さんが結婚するわけないでしょ。」

まったくもう。そんなに猫^{ルウ}が心配なら、今日はもう帰ってもいいつすよ？」

「いや、そうもいかん。ギンター、おまえには苦勞をかけるが、王都に戻ることにした」

「……そうですか。いつ？」

「ここから王都までにかかる日数と、向こうでの準備を考えると……
・ちようどその結婚式の後だな。
・式が終わったら発つよ」

「わかりました。隊員たちには俺から言っておきます。
今月の報告書、まだ郵便屋が来てないんで出してなかったんすけど、一言添えますか？」

「そうだな。おまえが補佐官でよかった。」

前隊長としての評判と補佐官としての仕事ぶりも追加しておく。
俺の後任はおまえだろうから」

「カーン隊長に比べたら、俺なんてガキ大将程度レベルだったと思い知らされたんすけどね。

隊長が来てからいままでの流れを大事にしたいんで、後任に推してもらえると助かります。

あと2週間か・・・忙しくなりますね」

「ああ、すまんね」

「いえいえ。ただし明るいうちに家に帰れるとは思わないでくださいよ」

「う・・・そうか・・・。今日も？」

愛を交わしたばかりの、愛しい愛しいルウが待っているんだが。

「今日もだめっす。猫のために休むのも、当分だめです」

「うう・・・」

自分で決めたこととはいえ、帰れないのは辛い。
ルウに会いたい。

早く帰って、やわらかな身体を抱きしめたい。

「とりあえず報告書の追記ですかね。引継ぎ書の作成もあります。

引継ぎ書は・・・まあ、家でもできるかもしれませんが。ルウちゃん、具合悪いんすよね」

「いいよ。兵舎へいしやでやっていく。書き方教えてくれ」

「はい。さくさく終わらせて、早く帰れるようにがんばってください」

ギンターが前回俺のために書いた引継ぎ書を参考にしながら、これまでのことをまとめていく。

1年に満たないといっても、それなりに書くことはあるもんだ。

特にこれからの課題については、ギンターや隊員たちの役に立つよう細かく記していく。

「隊長、今日はそろそろいいんじゃないですか。

一日で仕上がるもんでもないでしょ」

夕方、ギンターが明かりを持ってきた。

手元が見づらくなってきたと感じていたところだった。

気が利く男だ。

「隊の奴らには話しましたよ。結婚式の後、壮行会がしたいそうです。」

許可をいただけますか？」

「許可だったって……。悪いな。頼む」

「彼らのお礼の気持ちですからね。盛大にやりますよ。覚悟しておいてください」

「ははっ、覚悟ってなんだよ」

「牛とか縄とか聞こえたから、騎牛ロデオとか」

「見るだけか？ まさかやらされるんじゃない」

「どろでしゅね」

「お、おいおい」

盛り上げようという気持ちは嬉しいが、出立前にけがさせられたんじゃないぞ。

ギョクスターはにやにやと笑っている。
他人事だひたつと思つて、こいつは……。

そんな話をしていたら、帰りがすっかり遅くなってしまった。家路につくと、カーテンの隙間から温かな光がもれていた。

「ただいま、ルウ」

「おかえりなさい」

今日も食欲をそそるいい匂いがする。
風呂ももう入れるようだ。
でも俺が欲しいのは……。

「んんっ……あ、ふ……」
「カール、これただいまのキスじゃないでしょっ」

べりっとはがされた。
下心を読まれたか。

「夕飯の後ならいいか？」

「え……」

途端に顔を赤らめるルウ。

「それとも一緒に風呂に入ってくれるか？ もちろん人の姿でこのまま」

「え、ええっ!?!」

身を引こうとしたルウを離さず、真っ赤になった耳を甘噛みする。

「じゃあ夕飯のあと、一緒に風呂に入ろう。それまでおあずけな」

耳元でささやいてから、たっぷりと口づけた。

自分で立っていらなくなったルウを抱えて、食卓についた。

12 後朝（後書き）

サブタイトル、”きぬぎぬ”です。
ルビがふれませんでした。

1 まどろみ

それから一週間。

穏やかな日々が続いている。

「いつてらっしゃい」

「ああ。今日も遅くなる」

「はい」

引継ぎや訓練の仕上げをしているカールは、とっても忙しそう。

私はと言えば、家事と荷造りを頼まれた。

荷物と言ってもそんなにないんだけど、カールの役に立ちたいからがんばる。

一通り今日の分の用事をすませ、夕飯の下ごしらえをしてから、猫になった。

窓辺で丸まって、お昼寝の態勢だ。

春の日だまりはぼかぼかと温かく、すぐに眠りに誘われた。

『おいしかった！ これはあなたが作ったの？ 上手ね！』

あ、これはエメさんに初めて会ったときの夢だ。

あの日エメさんに会わなかったら、今の私はなかったなあ。

『あとはおまえだけだね・・・』

孤児院の閉鎖で、売れ残ってしまった私をずっと心配していた院長先生。

最期に安心させてあげられてよかった。

『うっわ、気持ち悪い。赤目で睨むんじゃねえよ。呪われるだろ』

アヒム・・・。

そういえば院長先生の葬儀で見かけた気がする。
会わなくてよかった。

夢はどんどん過去にさかのぼる。

『ルチノー』

『ルチノー。私の愛しい子』

思い起そうとしても、声も顔もすでに思い出すことはできない。
夢の中でだけ、おぼろげな影を結ぶ。

まあま・・・ばあば・・・。

「隊長さん、王都に戻られるんだそうですね」

「スヴァル」

「これ、もしよかったら使ってください」

兵舎を訪れたスヴァルが持ってきたのは、猫用のバスケット。中にやわらかそうなクッションが敷かれている。移動時にルウが休めるようにと考えてくれたのだろう。

彼女が向けてくれる好意が、そういう種類のものかもしれないと思わなかったわけではない。

もしルウが普通の猫で、辺境（こし）でずっと暮らしていくことになったら、彼女との未来もあつたかもしれない。

「私からのものをルウちゃんが使ってくれるかはわかりませんが」

「いえいえ、前いただいたチーズも、喜んで食べてましたよ。いつも本当にありがとうございます」

そういえばルウはスヴァルを嫌っていた。

あれは焼きもちだったのか？

だとしたら嬉しいじゃないか。今度聞いてみよう。

その後も、ヨシばあさんや村の女性陣がいろいろなものを持ってきてくれた。

どうやら結婚式の会場設営の打ち合わせにいった隊員の誰かが、俺のことを話したらしい。

嬉しいような申し訳ないような気分になる。

こんな風にしてもらうつほどのことを、俺はこの村のためにしただろ
うか。

それをギョントアに言ったら、

「まったく隊長は真面目つすね。もらえるもんはもらつとけばいい
じゃないすか」

と言われた。

それはそうなのだが……。

赴任当初、この男の軽ギョントアさに救われたのも確かなので、ひとまずその
言に従うことにした。

「隊長が気持ちよく受け取ってくれることが、一番相手も喜びます
よ。

あ、明日は休んでいいつすよ。もうだいたい目処がつきましたか
ら

「そうか。ありがとう」

明日は非番だったが、来る気でいた。

家のこともあるので助かる。

気持ちよく受け取ることが、相手を喜ばせる、か。

そういう考え方もあるのか。

都会の、見返りを期待した人間関係とは根本から違うのだ。

改めて村人や隊員、ギョントアの懐の深さを感じる。

以前の自分も含め、王都の者は田舎を馬鹿にする向きがあるが、大
事なのは利便性や物資の豊かさではない。

心の豊かさのほうが何倍も大切だと知った。

何年後か・・・いつかまた戻って来られたらいいと思う。

2 デザート？

こつん、と窓に何か当たる音で目覚めた。庭を見ると、スヴァルさん家の黒猫がいた。

「どうしたの、あんた」

窓を開けてひらりと外に出る。

『おまえ、引越すんだって？』

「まあね。自称スヴァルの恋人のあんたとしては、恋敵がいなくなつてうれしいんじゃない？」

『・・・・・・・・これやる』

ぼとりと水色の小袋が置かれた。口を青いリボンで結んである。

『俺の宝物。元気だな』

「え・・・・・・・・」

引き留める間もなく、黒猫は身をひるがえして藪の中に消えていった。

残されたのは水色の小袋。
匂いを嗅いでみると、あの猫の匂いにまぎってなんだかとてもいい匂いがした。

「ただいま……っと、ルウ、どうした？」
明かりはついている。
しかし、いつも出迎えてくれるルウがいない。

「ルウ？」

「……ル……」

家の奥から弱々しい声がした。

「ルウ！？」

何事かと、慌てて声がした方へ向かう。
真っ暗な寝室に、ルウはいた。

「カール……身体、熱い……なんか変……」

頬が紅潮し、寝台に寄りかかってぐったりとしている。

「どうした、具合が悪いのか!？」

「具合……? 悪くないよ……くすくすっ……」

「ル、ルウ?」

よく見れば、ワンピースの肩がずりおち、白い肌が見えている。髪は乱れ、目がとろんとしていた。

「おかえりい。カールが帰ってきて嬉しいな……くす……カール、好き」

抱きついて、口づけてくる。

嬉しい……が、いくらなんでもおかしいだろう。

「ルウ、本当にどうしたんだ。俺がいない間に何があった?」

「スヴァルさん家の黒猫があ、ふふっ、宝物くれたのよ」

「スヴァルの? なんでスヴァルの猫が出てくるんだ?」

「これえ、いい匂いなお」

ルウが手にした水色の袋から、つりがね型の実が転がり出た。またたびの実だ。なるほど。

「人の姿でも影響があるのか?」

「ええ? なあに? あのね、猫になって寝てたらね、くれたの。

匂いを嗅いだらすごくおいしい気分になって……くす……く

すくす……。

カール、これおもしろおい。ふふ……」

隊服についている紐が揺れるのすら、可笑しいらしい。

どうやら昼間は猫でいたが、またたびに酔って人に戻ったようだ。

以前この状態になったときは、極力姿を見ないようにして耐えるしかなかった。

しかし今は違う。

頬を染めてしなだれかかってくるルウは、まさに据え膳。

「ルウ、夕飯は？」

「あ……作りかけえ。下ごしらえはしてあるんだけど……くすくす……。」

お肉、焼くの……うふ……」

よし、腹ごしらえをしたらデザートにルウをいただく。

そう思って身を起こそうとすると、ルウに引き留められた。

「カール……行っちゃいや……」

ぼろぼろぼろ。

今度は急に泣き出した。

笑い上戸かと思ったら、泣き上戸か!?

すすり泣くルウの髪を撫でる。

「わかった。行かないから、泣くな」

「ん……カール、キスして？」

お望みのままに。

軽いキスは、次第に深くなり俺の中に火をともす。

「ルウ……。ルウ？」

腕にかかる重さが増した。

たいして重いわけではないが、これは……ね、寝てる!?

俺の腕の中で満足そうに微笑むルウは、すやすやと寝息をたてていた。

「それはないだろう……。」

火照^{ほて}ったこの身をどうしてくれる。

がつくりとうなだれて、しばらく動けなかった。

ルウに起きる気配はない。

仕方なく寝台に寝かせ、ルウが途中まで作っておいてくれた夕飯を仕上げて食べる。

うまい……が一人で食べるのはつまらないな。

3 異変

翌朝。

少し期待をしてルウにまたたびの実を見せる。

「これ、黒猫ちゃんが宝物って言ってたの。なんでこんな実が宝物なのかな??」

手に乗せて、転がしたり匂いを嗅いだりしている。
だが、何の反応もない。
残念。非常に残念だ。

「カール、いつ帰ってきたの？ 夕ごはん食べた？」

「ああ。肉を焼けばよかったんだよな」

「そう。よくわかったね。私なんで寝ちゃったのかな・・・ごめんね」

昨夜のことは何も覚えてないらしい。

「ルウ、今度猫になったら珍しいお茶を飲ませてやる」

「お茶？ 猫じゃないとだめなの？」

「猫用だからな」

「ふうん？ わかった。今からでもいいの？」

「今日は休みだが、片づけをしたいからな。夜かな」

「お休み！ 嬉しい！ 一緒にお片づけできるね。確かに猫じゃ役に立たないから、夜のお楽しみだねっ」

楽しみ。

どちらかというと俺にとつての、だが。

なぜ今ではいけないのかについては、あえて説明しないことにしよう。

「じゃ、朝ごはん作るね。スープ残ってる？」

「少しあるな」

「パスタは好き？」

「ルウの作るものならなんでも」

椅子に腰かけ、台所に立つルウを眺める。

長い髪を後ろで結わえ、鼻歌を歌いながら細長いトマトを刻んでいる。

朝日と、包丁の音と、ルウ。

穏やかな時間が過ぎていく。

トマトを昨夜の残りのスープに加え、煮込む間に粉をこねはじめた。薄く延ばして長方形に切っていく。

「それは何になるんだ？」

「ファンファツレよ。ちょうちよの形の Pasta、知らない？」

ルウが指で中央をつまむと、見たことのある Pasta の形になった。

「あー、見たことも食べたこともある。ファンファツレというのか」

「うん。かわいいから好きなの」

ルウの手の中で、次々と蝶が生まれていく。

その手際も見事で見えていて飽きないが、俺としては、つい頂うなじやら細い腰やらに目が行ってしまう。

「うまいもんだな。どこで覚えたんだ？」

ファンファツレを茹ではじめたルウを、後ろからそっと抱く。

料理の邪魔をしないよう、撫でるのは我慢して手元をのぞきこんだ。

「私のいた孤児院は、通いの料理人さんがいたの。マリオさんっていうおじさんんだけど、Pasta 料理が得意で。

でも他のお料理も上手で、いろいろ教わったよ。

マリオさんが休みの日はみんなで交代でごはんを作ってたんだけど、私が作るが多かったかな。お料理って楽しいよね！」

そうか、孤児院育ちと言っていたな。

ルウの料理の腕は、仲間のためにふるわれていたわけだ。

「どのあたりの孤児院なんだ？ 今もあるのか？」

「今は・・・」

楽しそうに作っていたルウの手が止まった。
まずいことを聞いたのだろうか。

「茹であがったから、この話はまたあとにしよ？ パスタは茹でた
てが一番だよ！」

ぱつと振り向いたルウは、いつもの笑顔だった。

香草で香りをつけ、塩・胡椒で味を調えたトマトソースをかける。
もっちりとしたパスタの食感がよく合い、うまかった。

ルウの出自はおいおい聞かせてもらおう。
俺のことだって、たいして話しているわけではないのだから。

「カール、この本も縛っちゃっていいの？」

「ああ。この棚の本だけ避けておいてくれ。兵舎に持っていくから」

「はあい」

1年に満たない期間でも、それなりに荷物は増えるものだ。
すぐに必要でないものは縛ったり箱に入れたりして、先に送ることに
する。

家の中のことはルウに任せて、俺は洗濯物を干す。
ガサガサッ

庭先の藪から黒猫が出てきた。

「ふにゃあ」

「お、なんだ？　もしかしておまえが、ルウが言ったたスヴァルの家の黒猫か？」

話しかけると、ぱたりとお愛想程度に尻尾を揺らした。

「宝物、ありがとな。喜んでたぞ」

黒猫は窓を気にしていたが、ぷるつと耳を一回振ったかと思うと、金色の目をすがめて帰って行った。
俺はあまり好かれていないようだ。

「おい、ルウ。今、君の友達が来て・・・ルウ？」

洗濯物を干し終え、家の中に声をかける。

「いらい応えはない。
おや？」

積み上げた本の中に、白い尻尾が見える。

「ルウ？　また、またたびの実をいじったんじゃないだろうな？」

近付くと、服の下に横たわり震えるルウがいた。

「・・・ルウ？」

俺の目の前で人の姿になる。

顔色は真っ青で、脂汗を浮かべていた。
そしてまた猫へ。

「だ、大丈夫か？」

「カール・・・変化が止まらない・・・あうっ・・・」

輪郭がほどけ、手足が伸びる。

人になったところを抱き留めた。

「止まらない？ それはどうして・・・」

「わかんない。こんなこと初めてで・・・」

ふう、とルウが息をついた。

額にかかった髪を撫でて避けてやる。

「あ、なんか安定した。驚かせてごめんなさい。私、どうしたんだろっ」

「急に变化してしまったのか？」

「うん。猫になろうとしたわけじゃないよ。ただ本の整理をしてただけなんだけど」

ルウを立ち上がらせて手を離す。

「あっ・・・」

また猫になってしまった。

へたり込むのを慌てて支えて抱き上げる。

「なんなんだ？」

「なんだろう。カールから離れた途端、急に・・・あれ？」

ルウの視線の先。

女魔術士がくれたペンダントが、淡い光を放っていた。

俺のも服の中から取り出して見ると、同じように赤く光っていた。

「何が起こつてる……?」

「エメさんならわかるかも。ああ、でも私エメさんの住所も知らないわ。どうしよう」

ルウの耳がしゅんと垂れる。

「エメか。どうやって連絡をとればいいんだろ。ウーリーならわかるかもしれない」

2人で思案していると、ドンドンドン!と玄関を叩く音がした。こんなときに……誰だ。

ルウを肩に乗せ、扉を開ける。

「はい?」

「カール! 私よ! ルウちゃんは大丈夫!？」

なんとタイミングという頃合。

紫の法衣をまとった女魔術士が、そこにいた。

4 エメ

「エメさん、すごい。なんで・・・」

「一週間前くらいから、妙な気配を感じてたの。気になって気配を追ってきたら、あなたに贈った護り石が反応してるのがわかったわ。」

自分でかけた術だからね、異変があればわかるのよ」

それで飛んで来てくれたのか。

「ルウちゃん・・・いえ、ルチノーちゃんと呼んでもよさそうね？
あなた今何歳だっけ？」

カールに触っていれば変化を自分で調整できるので、一度寝室で人に戻ってからエメさんと話すことにした。

机をはさんで、向かい合って座るエメさんと私たち。

私たちがというのはカールと私で・・・私はカールの膝の上にいる。だって、触ってないと猫になったり人になったりしちゃうし、椅子は2つしかないし、だから仕方なくなんだけどもものすごく恥ずかしい。

エメさんったら、にやにやしないでっ。

カール、足撫でちゃだめ！

「17・・・だと思っ」

「根拠は？」

「根拠？ 拾われた時に年をきかれて、こっぴつたつて言うから・・・
たぶん2歳だろうって」

人差し指と中指で「2」を作る。

「なるほどね。小さいころなら薬指がうまく立てられなかったって
こともあるか」

「エメさん？」

「あなた、たぶん18歳だわ。」

18といえば一般的にも成人の儀をするけど、ルチノーちゃんの場合もつと特殊な事情があるの。

魔術にとって18は特別な数字。眠っていた力が目覚めるのよ」

「眠っていた力・・・。前、私に魔術の才能があるって言ってたけど、それに関係があるの？」

「才能どころの話じゃないわ。」

ルチノーちゃん、あなたはね、今は失^なき湖上の魔術王国、ヴィルヘルミーナのお姫様なのよ」

「ヴィルヘルミーナ？」

「30年前、城ごと湖に沈んだというあのヴィルヘルミーナか？」

私は全然知らなかったけど、カールは知ってるみたい。

そんな国があったの？ で、私がそこのお姫様？？

「そう。前ルチノーちゃんが描いた絵を見せてもらったでしょう。

あの衣装や冠の石に見覚えがあったの。

ヴィルヘルミーナは多くの魔術士を輩出し、かの国にしかない秘術もたくさんあったから、魔術士なら一度は勉強に訪れてたのよ。

私も昔行ったことがあるわ。たぶんあなたのお母さんにも会ってる」

「お母さんに……。あれ？ でもカールが30年前に沈んだってエメさん、いつお母さんに会ったの？」

「あら、うふふ」

「見た目通りの歳じゃないとは思っていたが、その口ぶりじゃ100やそこらは越えてそうだな」

「失礼ね。女性の歳を勘ぐるもんじゃないわよ」

100？ 100って100歳？

私が目をはちくりさせていると、カールが頭を撫でて説明してくれた。

「ウーリーの家庭教師をしていたと言っていただろう？」

あいつのうちは魔術の名門だから、並みの魔術士には頼まない。

それに同じくらいの歳で家庭教師をするわけはないよな。あいつが幼いころすでにそれなりの歳で、かなりの力があつたってわけだ。

魔術の中には、身体を若く見せたり実際に若返らせたりするものがあると聞く。

こいつは若返ってるほうだな、きつと」

「何よ、なんだか言葉にトゲがあるんじゃない？」

「胡散臭い術は嫌いだね。魔術は便利だが、人を惑わすことも多い。年をごまかせるほどの魔術士を、おいそれと信用はできないな」

「ふん。そこそこ評価されてるとろっじゃないの。」

でもあんまり私の機嫌を損ねないほうがいいわよ。ルチノーちゃんの状態を把握してるのは私だけなんだからね」

「……くっ……それは……」

「本当なら18になったときに、解放された力に喰われていてもおかしくなかったわ。」

私のかけた猫化の術が、魔術の暴走を止めてたのね。結果としてはよかったわ」

「ルウ、いつ誕生日だったんだ？」

「え……。わからない。覚えてないの。冬に捨てられてたから、冬生まれってことにしてたけど」

「そうね。正確な日にちはわからないけど、最近だとは思っわ。」

ただ……一週間くらい前って何かあった？ 力を解放する何か。猫化の術とその護り石のおかげで、18になったからってそんなに急激に力があふれるはずはないの」

私を解放する何か。

一週間くらい前って・・・あの、その、もしかして？

カールと2人、顔を見合わせる。

お互い思い浮かべたことは同じだったみたいで、赤くなって目をそらしてしまった。

「あー・・・そういうこと？」

カール、あなたねえ、少しは自制しなさいよ。何歳いくつ離れてると思ってるの？」

「年の話はしないんじゃないかったか」

「それとこれとは別でしょ。ルチノーちゃんに無理させてないでしょうね」

「させてない。大事にしてる」

「本当？ 年だけじゃなくて体格だつてずいぶん違つんだからね」

「体位は配慮してる」

「当たり前でしょ。何やろうとしてんのよ、この変態」

「好きな相手と愛し合って何が悪い」

「うっわ、開き直らないで！ あああ、私のルチノーちゃんがあああ
あ」

「おまえのじゃない。俺のだ」

「出会ったのは私の方が先よ！ まさかこんなに早いとは！ 応援なんてしないで唾つばつけとくんだった！！」

「ちよつ、あの、2人とも、やめて・・・」

エメさんに、その、“初めて”を告白した恥ずかしさから立ち直る途中に、カールに「好きな相手」云々と言われてまた動揺していたけど、このままじゃいつまでも言い合いが続きそうで口をはさむ。ただの喧嘩ならまだしも、私のことを言われていて居心地が悪い。

「ルチノーちゃん、この男が嫌になったらいつでも私のところにいらっしやい」

「そんなことにはならないから安心しろ。な、ルウ」

「う、うん」

「ああら、女同士にしかわからないことだっただってあるじゃないの。またうちに来たいわよね？ ルチノーちゃん」

「うん。エメさんのおうちは楽しかった」

「そうでしょー？ ほらみなさい」

「ルウ、俺よりこの女の方がいいのか？」

「え、そういうわけじゃないけど」

着せ替えとか一緒にお料理とかは楽しかった。

エメさんって優しいし、お姉さんみたいで頼りになる。

「遠慮しないで。いつでも遊びにきてね」

「はい」

「ルウ・・・」

あれ、カールががっくりとうなだれてしまった。

「あの、遊びには行くけど、帰るのはカールのところだよ？ 私の居場所はカールのいるところだから」

「ん・・・。そうか。そうだな」

「うん」

「こらこら。そこ、見つめ合わない。ああ、もう何の話をしにきたんだっけ？

あなたたちねえ、もうちょっと緊張感つてものを・・・」

「おまえが話を逸らしたんだろ」

「そうだったかしら。んじゃ戻そうじゃないの。

だからね、ルチノーちゃんは魔術王国のお姫様なの。

ちよっと！ 私の目の前でおさわりは禁止ね。その手はなんですつと太もも撫でてんのよ」

「いいから続ける」

「はあ、ほんとムカつく。ルチノーちゃん、なんでこんな顔はいいけど性格悪そうなのがいいわけ？」

んで、ヴィルヘルミーナは女王制だったんだけど、ルチノーちゃんは最後の女王の娘である可能性が高いわ。

詳しいことはまだ調べ中だけど・・・。

何にせよ、眠る力ほとんどもないものがあるわ。

できれば側について使い方教えてあげたいんだけど、私もいろいろ忙しい身だしね。どうしようかしら」

「エメさんは今も王都にいるの？」

私もカールの仕事の都合で、一週間後には王都に引越す予定だったんだけど」

「え！ 本当？ それは好都合。リックにも話を通しておくわ」

「リック？」

「リックハルト＝ヴィリオ＝ブルクハルト。あなたのとこの王様でしょ？」

「おま・・・国王をリック呼ばわりするな。何者だよ」

「そうあからさまに不審がるもんじゃないわよ。人よりちょっと長生きしてるだけ」

やっぱり長生きしてるんだ。

本当は何歳なんだろう。

一通り話を終え、エメさんは私に猫化の術を掛け直してくれた。

「とりあえず王都に着くまでは猫でいて頂戴。」

よほどのことがないと人には戻れなくしておいたから」

私の本来の姿をとると、力があふれやすくなるらしい。

エメさんの魔術の影響下にいることで、力を安定させるんだって。カールに触れていると落ち着いたのは、エメさんの術がかかったおそろいの護り石のおかげだったみたい。

「この姿じゃお手伝いできないね。ごめんね」

「いいさ。スヴァルがくれたバスケットもあるし、かえって移動は楽かもしれん」

エメさんが帰った後、カールは片づけを続けていた。

見ていることしかできないのが心苦しい。

ああ、ごはんも作れないんだ。

私を作ったものをおいしそうに食べるカールを見るのが、すごく楽しみだったのに。

「手伝いよりもな」

カールが喉を撫でてくれる。

大きな手が心地よくて、喉がゴロゴロと鳴る。

「一週間、人の姿のルウに会えないほうが辛いな」

そう言って口づけてくれた。

私も、カール。

あなたを抱きしめられないのが寂しい。

5 出立

コメツト爺さんの孫娘の結婚式は、無事行われた。

その後の兵舎での壮行会のほうが、よっぽど大変だった。詳しくは述べないが、負傷者続出、備品の破損も著しく、明日からどうするんだろうとすでにいない身ながら気をもんだ。

しかし酒のせいもあってか、みんな終始笑いつぱなしで、俺も人生で一番腹の底から笑ったんじゃないかと思う一時ひとときだった。

「俺もねえ、一度隊長とサシで酒を呑んでみたかったんすよ」

ようやく会が落ち着いたら頃、麦酒エールの入ったコップを持ち、目元を染めたギョウターと何度目かの乾杯をした。

「言ってくればいつでも呑んだのに」

「本当ですかあ？ 赴任当初なんて暗くって、一言もしゃべらない日だってあったじゃないすか。

明るくなつたなあと思つたら猫に夢中で、定時で帰るし。

誘う隙なんてなかったすよ」

そうか。それはすまなかつた。

確かに測量隊の歓迎会くらいでしか、隊の連中と酒を酌み交わした

ことはなかった。

「後任の件はありがとうございました。カール隊長ほどにはとてもじゃないけどできませんが、精一杯務めますので」

「何をいう。ギンターがいたからなんとかやってこられたんだ。感謝している」

「ははっ、照れるっすね。王都でもお元気で」

「ああ、ありがとう」

「たあいちよー！ のんでますかああああ」

「きょうは、あさまでかえしませんよおおお」

「ほらほら、もっとのんでえええ」

「朝までって……。朝、出立するんだが……」

「あいつらもつすぐつぶれますから。見送りには蹴っ飛ばしてでも連れ出すんで」安心を」

「どうせ二日酔いだろ。寝かせてやれ」

「そうはいきません。全員きっちりそろえますからね。お楽しみに」

お楽しみに？

その言葉の意味を知ったのは、翌朝、見送りにきた隊員たちが見事な行進を見せたときだった。

基本教練に従つての一系乱れぬ行進、行進間動作、執銃時の動作、礼式、どれをとつても完璧だった。訓練で俺が教えたときよりも、格段にうまくなっている。隠れて練習したのか。

「カール隊長のますますのご活躍を祈つて！ 捧げ、銃！」

「みんな・・・ありがとう。」

諸君に会えてよかった！ ここでのことは絶対に忘れない！」

答礼をしながら、胸に熱いものがこみあげてきた。

「隊長！ お元気で！」

「お元気で！」

「また遊びに来てください」

涙をこらえ、見送りに手を振って、俺は数か月を過ごした辺境を後にした。

「よお、カール！ 今日も愛妻弁当か？ うらやましい限りだな！
今度自慢の奥さんを連れて来いよ」

「だから、うちのは体が弱くて外に出られないって言ってるだろう」

「本当は俺らに見せたくないだけじゃないかあ？」

「モテるくせに一人に執着しなかった、カール」ヘルベルト「ヴュストが結婚とはな！」

「おまえを落とした女ってのを、一目見て見たいぜ」

「いいから、早く飯食いにいってこい。どの店もすぐに混んで食えなくなるぞ」

「はいはい。“三匹の子猫亭”のおかみが、おまえに会いたがつてたぜ。今度呑みにいこうや」

「わかった。特に予定はないから、みんなの都合のいい日を教えてください」

「あいよ」

手を振って、にぎやかな同僚たちが昼飯に出るのを見送る。

辺境の兵舎では当番制で昼飯を作っていたが、親衛隊ゴッテでは親衛隊舎のある城内から城下町へ食べに行くのだ。

王都に来て一か月。

親衛隊ガードリアンの中には旧知のものもあり、さほど苦労することなく溶け込むことができた。

「奥さんはそんなに体が弱いのかい？」

同じく弁当組の、ヘルマン副隊長が話しかけてきた。

年の頃は40代後半。薄くなってきた髪を撫で上げ、丸眼鏡をかけている。

神経質そうな見た目通り、細かいことに気がつく性質たちで、名実ともに隊の参謀役だ。

「そうですね。弱いというか、日光に当たると肌が真っ赤に腫れ上がったり、熱を出したりするんです。

家の中にいる分には全くの健康体なんですがね。外に出ることができません」

「へえ。それは大変だな」

これは王都に来た当初、俺とエメで考えた作り話だ。

エメは王都に家もあるが、国のおかかえ魔術士としてブルクハルト城に滞在していた。

ルウはエメの元に力の使い方を覚えるために通うことになったが、できるようになるまでずっと猫の姿でいるのは不便だろうと、エメが家の中と俺のそばでだけ人に戻れるように術を調整してくれた。

家全体に術をかけることで結界とし、ルウの力の暴走を封じ込める。また、俺の持つ双子の護り石のペンダントにも封じの術をかけて、短時間なら俺のそばにいれば外でも人になれるようにした。

そのおかげで、国王への謁見や俺の実家へのあいさつもできた。

とはいえ、ほとんど人前に出られないことにかわりはないので、体が弱いということにしたのだ。

「ん？ なんだ？」

ヘルマン副隊長が、窓の外に視線を向ける。

開け放った窓から、ひらりと白い影が入り込んできた。

「ルウ」

「んなーう」

ルウが窓から俺の肩に飛び移り、頬をすり寄せてくる。

実は、猫の姿でなら何度も親衛隊舎に来ているルウである。

「それがリクハルド様に下賜された猫かい？ よく懐いているな」

「ええ。猫、大丈夫ですか？」

「ああ。飼ったことはないが、嫌いではない。全身真っ白なのか。美しいな」

ルウが猫の姿でエメの元へ通っても不自然でないように、国王にいただいた猫ということにした。

俺のなのに・・・くやしい。

俺とおそろいの双子の護り石は、ペンダントからチョーカーに形を変え、ルウの首におさまっている。

これが通行証がわりとなり、今のルウは城内なら自由に出入りすることができた。

昼休みの間、隊舎で過ごし、ルウはまた窓から出て行った。

「散歩か？ あまり遠くへ行くなよ」

エメのところへ行くとわかっていても、ヘルマン副隊長の手前、その声をかける。

「んな！」

長い尻尾が城の方向へ消えていく。

城内なら危険はないとは思うが・・・心配だ。

6 お引越し

お昼休みのカールにあいさつをして、エメさんのところに向かいながら、王都に来てからのことを思い返す。

もう一か月かあ。

あつという間だなあ。

王都に来たことがあるといっても、城下町にあるエメさんの家や院長先生がいた治療院に行ったことがあるだけで、お城を見るのは初めてだった。

その大きさと迫力に圧倒される。

私はよく知らなかったんだけど、王都は、お城の広い敷地内には騎士団の隊舎や宿舎があつて、さらにその外側に城下町が広がっていた。

お城と城下町の間には高い塀があつて、いつも門番がいる。

城下町はお城の周りとお城から隣国に伸びる街道沿いに栄えていつてるみたいで、その街道の一本は私のいた孤児院のある町へもつながっているそうだ。

カールと私の新しいおうち、そんなブルクハルト城の敷地の一画にあつた。

「こ、こんな立派なおうちに住んでいいの？」

レンガ造りの2階建て。

庭はなくて、家の前がすぐ道だけど、玄関横にちよつと寄せ植えを置きそうな場所がある。

カールの肩に乗って家に入る。荷物は先に届いていた。

「ああ。使用人も1人置いていいことになっているが、いないほうがいいから断った。

だいたいの家事は俺もできるしな」

「私のせいで・・・ごめんね」

「いや、俺がルウと2人きりがいいだけだ」

猫の私にキスをして、ぎゅっと抱きしめてくれた。

せめて人の姿になれば、カールの役に立てるのに。

荷ほどきをするカールの横でただ見ているのも心苦しく、家の中を探検することにした。

辺境の家とは違い、しっかりした造りで部屋数も多い。

1階には、小さいけど居間とは別に応接室があって、そのほかに食堂と台所、お風呂などの水回りがある。

玄関ホールにある白い手すりのついた階段を上がると、2階に寝室と書斎、お客さん用？の部屋が2つもあった。

それぞれに家具が備え付けてあり、すぐに使えるようになっている。

あ！ 出窓！

2階の一部屋に、辺境の家と同じような出窓があるのを見つけた。

うれしくなって、ぴよんと飛び乗る。

家の前の道を、人が行き交うのを見下ろすことができた。
この眺め、新鮮！

「何かおもしろいものでもあったか？」

尻尾をぱたりぱたりと振りながら眼下を見下ろしていると、カールが2階にきて覗き込んできた。

腕を私の両側について、同じように外を眺める。

「ん？ あれはエメじゃないか？」

カールの視線を追うと、城から下ってくる道に、確かに見知った人影があった。

「久しぶり！ ルチノーちゃん！！」

玄関を開けた途端、エメさんが抱きついてきた。

「たった一週間しか経ってないじゃないか」

「うるさいわね。会いたかつたんだからいいじゃないの・・・ってあなたと言いつ合ってる場合じゃないわ。

ごめんね、ルチノーちゃん。

引越しのお手伝いをしたいところなんだけど、ちょっと時間がなくて。

手短に、術の掛け直しと打ち合わせだけしていくわ」

そういうと、エメさんは私を降ろして人に戻してくれた。

すかさずカールが、上着を脱いで肩に掛けてくれる。

「ルウ……！」

「あなた、“たった一週間”って言わなかった？」

人になった私の髪を撫で、いまにも口づけせんばかりのカールを見て、エメさんは呆れ顔だ。
うん、私もそう思う。

「“会いたかったんだからいい”だろう」

「~~~~！人の口真似するんじゃないわよッ」

「あー……エメさん、時間ないんでしょう？カールも、やめて？」

上目づかいにお願いすれば、カールは破顔して、首筋に顔をうずめてぎゅっぎゅっ抱きしめてきた。

あぁん、逆効果だった……。

「はぁぁ。もういいわ。いくつか術をかけてから後で説明するわね。あと、今後のことね」

エメさんは何やら口の中で呟きながら家の中を周り、最後に私のおでこをトンとつついた。
ぴりっと軽い衝撃が全身を走る。

「これで家の中でなら自由に変化できるわ。ペンダントもちよっと貸してね」

カールと私のペンダントを受け取ると、カールの護り石には術をかけ、私のものは貴石がたくさん埋め込まれた金のチョーカーに付け替えられた。

「エ、エメさん、これは……」

ものすごく高価なものじゃないの？

「1つ1つの石に術がかけてあるわ。ルチノーちゃんの力の制御を助けてくれるの。引越祝いよ」

にこつと笑って、首にはめてくれた。

しつとりとした重さがあつて、まるで生まれたときからつけているみたいに私の首になじんだ。

「美しい……が、俺のルウに勝手に首輪をつけられたようで気に入らない」

「ああ、はいはい。そうでしょうね。ついでにもっと気に入らない提案をさせてもらおうわ」

エメさんの提案っていうのは、お城でエメさんに魔術を習うことと、そのために王様の猫になることだった。

カールは渋い顔をして聞いている。

「私も週末は城下町にある家に帰ってるけど、一週間ごとより3日おきくらいのほうが術のなじみがいいのよね。」

午後は比較的時間があるから、城で勉強会をしましょう。

私といるときは人の姿でいられるけど、移動は猫のままだから……

。

リックの猫ってことにすれば、城の中を歩き回れるでしょう?」

「ルウは城に住むのか?」

「ここから通ってくれればいいわ。猫が気ままに出歩くのはよくあることだし。」

でもいちいちカールが送り迎えするわけには……ってそんな顔しないの。あなたも仕事があるんだから無理でしょ!

猫のままで行き来するには、リックの猫のほうが都合がいいのよ」

私はなるほどなあと聞いていたけど、カールは納得がいかなかったみたいで、結局一端王様の猫になるけどそのあとカールが譲り受けるってことになった。

それならカールのところにずっといても平気だし、城を歩いているのも自然だ。

とはいえ、私を物のように扱うことにカールは最後まで難色を示した。

「お話の上だけだし、気にしないで、カール」

「しかし……」

「大丈夫よ。エメさんもカールも、私なんかのことをこんなに一生懸命考えてくれてありがとう」

「いいのよ。乗りかかった船ってやつだわ。」

それにヴィルヘルミーナの女王にはお世話になったの。ルチノーちゃんを助けることは、私の恩返しだと思ってるわ」

「その話だけど・・・私、いまだに信じられなくて・・・」

孤児院に捨てられてた私が、どこかの国のお姫様？

そんな話、にわかには信じられない。

孤児院に居た頃、仲間と似たような話をしたことはあった。

本当は大金持ちの両親がいて、いつか迎えに来てくれるとか、実はどこかの国のお姫様や王子様で、ある日家来が迎えに来てくれるとか。

それが現実のことになるなんて。

「そうね。証拠といえば年と絵と涙石を知っていたこと、あと眠っていた力くらいだけど・・・私はルチノーちゃんがヴィルヘルミーナのお姫様だって確信してるわ」

「それはなぜだ？」

「だって、そっくりなんだもん」

「え？」

「ルチノーちゃん、私が出ったヴィルヘルミーナの女王にそっくり。髪を金にして、瞳を青にすれば、そのまんま若き日の女王だわ」

ヴィルヘルミーナの女王・・・それはつまり、エメさんの話によれば私のお母さん。

私、そっくりなの？

「初めて会ったときは気付かなかったのよねえ。

くやしいけど、カールに会って成長して・・・本当にきれいになったわ。」

私の家でドレスを着たことがあったでしょう？ そのとき思ったのよね。あれ？どこかで会ったことあるって」

カールがちらりと私を見る。

ドレス姿を見たいか思ってる顔だよな。

最近、カールが考えてることがわかるんだ・・・。

「ま、もう30年も前の話だし、いまさら誰かがルチノーちゃんを探し出そうってこともないと思うわ。

もし何かあるならとくに迎えが来てるわよ。

信じてても信じなくてもいいけど、魔術の勉強は必要だから、お城にいらっしやい」

「うん、わかった。本当にありがとう、エメさん」

「いいのよう。かわいいルチノーちゃんに会えるだけで私も楽しいわ。

城なんてねえ、立派な分、肩が凝って仕方ないのよ。午後のお茶をしに来るくらいのもりで気軽に来てね。

ああ、着飾ったルチノーちゃんとお茶！ たくさんドレス用意しておかなくちゃ！」

「着飾った？」

「エメさん、ドレス集めが趣味なの。前おうちに行ったときにいろいろ着せてくれたの」

「ほお」

ああ、カールも対抗する気だ。

余計なお金、使わないでいいからねっ

「でも魔術の勉強って、エメさんさつき・・・」

「もちろんするわよ。でも私の癒しにもなってるね！」

「癒し・・・。私で役に立つなら嬉しいけど」

「立つ、立つ！　じゃ、待ってるから！」

王様に会う日取りとか、猫と人との使い分けとか細かいことを打ち合わせして、エメさんは帰って行った。

このとき、私は体が弱くて外になかなか出られないってことになった。

2人ともうまいこと考えるなあ。

「なんだか急にいろいろあって、気持ちの整理がつかないよ」

「焦ることないさ。荷物の片づけと一緒に、少しずつ取り組んで行けばそのうちあるべきところに落ち着く」

「あ、片づけ。そうだった、お手伝いするね！」

猫じゃ無理だけど、この姿なら手伝える。
もうすぐ夕刻。

急がなくなっちゃ。

「片づけよりも・・・」

腰を引き寄せられた。降りてくる唇。

私を抱くその人は エメさんに聞いたせいだとは思うけど 金の髪
に青い瞳をしていた。

*** お気に入り2000件突破記念小話 *** (前書き)

すっぴい!!

10月9日11時現在、2008件です。

皆様ありがとうございます!!

御礼小話です。お約束ですがwなネタです。

*** お気に入り2000件突破記念小話 ***

カールが私の首輪チョーカーを気にしている。

「これ、はずれるのか？」

「どうだろうね。私の力の制御を助けてくれるって言ってたから、はずさないほうがいいんじゃないかな」

せっかく落ち着いたのに、また猫になったり人になったりしたら困る。

「家の中なら大丈夫じゃないか？ ちょっとはずしてみるか」

「そうかなあ」

自分でははずせそうにないので、カールが私の後ろに回って留め金に手をかけた。
ぱちんと音がして、首輪チョーカーがはずれた。

「どうだ？」

「うーん、大丈夫・・・夫・・・あうっ」

ぐるっと胃の中をかきまわされるような感覚がした。
身体が熱いのに、冷や汗が出てくる。

「カール・・・！ だめっ、首輪チョーカーつけてっ」

ぱちんとはめられると、すっと気分が落ち着いた。よかった。姿も人のままだった。

「もうっ、カール、やっぱりはずすのはだめね」

「……ああ……！」

「？ カール？」

呼吸を整えて後ろを振り向くと、鼻を押さえてうずくまるカールがいた。

ぱたぱたと床に鮮血が垂れている。

「……また？ 今度はどうして……」

鼻血を拭いたカールは、黙って鏡を差し出してきた。

「なあに？ ……きゃ！」

な、な、な、なにこれ！

「耳だな」

「いやああああ！」

鏡の中の私には、白い猫耳がついていた。もしかして……こっちも？ カールも同じことを考えたらしく、私よりも先に服の裾に手を伸ばしていた。

「あんっ、そこつかんじゃだめっ」

尻尾の根元をきゅっとなつかまれて、腰が砕けた。

「どこから生えてるんだ？」

「やだっ、見ないで！ んっ、あんっ」

カールの膝の上で、あっという間に裸にされる。

おしりをつるんとむかれて、そこについた尻尾の根元から先までしゆるんと撫でられた。

ぞくりと背筋が震える。

「うん、いい。すごくいい。しばらくこのままでいてくれ」

さらにカールは、フリフリのレースがついたエプロンを取り出した。いつのまにこんなもの！

「服、返して」

「これで」

「服着てからでしょ？」

「着たら尻尾が見えないじゃないか」

「・・・エプロンだけ？」

「だけ」

期待に満ちた目で見つめられて断りきれず、お昼ごはんを作る間だけ我慢することにした。
裸にエプロンって……いろいろなところがすうすうして落ち着かないんだけど！

「いい眺めだなあ。その耳とか尻尾とかは出し入れできるのか？」

台所に持ってきた椅子に反対向きに座って、背もたれに肘をつきながらカールは私がごはんを作るのを見ている。

「出し入れ？」

あ、そうか。

変化の要領で、仕舞えばよかったんだ。

ん、と念じたら、ぴよこんと引っ込んで元通りになった。

「あああ」

「なんだ、はじめからこうすればよかったんだわ」

「なんてことを！」

「こんな耳や尻尾をつけてたら、生活できないじゃない」

「うう……じゃあ耳はなくてもいいか」

「え、何？ やんつ、どこ触って……」

「見てたら我慢できなくなった。隙間から見えるここがたまらない」

「あつ、ああんつ、ああ……！」

耳や尻尾なんて、関係なかったみたい。

お昼ごはんの前に、私がおいしくいただけられてしまった。

「仕舞えるってことはだな」

「出さないよ」

「……まだ何も言っていないが」

「出しません」

自分で出す気がなくても、首輪チョーカーをはずされたら出ちゃうかもしれない。

留め金に鍵が必要だ。

今度エメさんに会ったときに頼もう、と誓ったルウだった。

*** お気に入り2000件突破記念小話 *** (後書き)

R15つてどこまでですか？(笑)

猫耳・しっぽ&裸エプロン。

カール、やりたい放題ですwww

7 ご両親に、ご挨拶 1 (前書き)

ルウ視点が続きます。

7 ご両親に、ご挨拶 1

王都に着いた翌日。

初出勤は明日だというので、今日のうちにカールの実家にあいさつに行くことになった。

城下町の一画に、わりと大きな店を営んでいるらしい。

一緒にあいさつすることは、あれだよな、お嫁さんとしてってことだよな？

カールが用意してくれた服を着て、馬車に乗りこむ。

おうちにはお父さんとお母さん、お店を継いでる一番上のお兄さんとその奥さんがいるんだって。

二番目のお兄さんは町から町へ行商をしてて、妹のミレイユさんは城下町の別の地区で旦那さんとお店をやっているらしい。

「商人一家なんだが、俺だけ毛色が違ってな。両親には散々心配をかけてるのさ」

口の端を自嘲気味にあげて笑うカール。

そんなことを言いながらも、久しぶりに実家に帰るから嬉しそう。きつと愛されて育ったんだろうな。

馬車の中で、そんなご家族の話を聞いていたら、急にカールが神妙な顔をした。

「いまさらだが・・・俺でいいか？」

「え？」

「話した通り、多少大店おおたなとはいえ俺は所詮商家の三男坊だ。
騎士だ親衛隊だといつても、一代かぎりだしな。一国の姫君をも
らうような身分じゃない」

カールが言っているのは、私が今は失なきヴィルヘルミーナのお姫様
じゃないかって話。

そんな、本当かどうか分からない話なんて、関係ないのに。

「私は私。カールに拾われた、ただのルウだよ。」

カールこそ、こんな面倒ばかり抱えた、気味の悪い不吉な私でい
いの？

「ご両親だって、なんて思うか・・・」

自分で言っつて、急に不安になった。

そうだ、このごろカールやエメさんとはかり会っていたから忘れて
いたけれど、私の見た目は人々に気味悪がられる。

白い髪と赤い瞳のせいで、いまままで何度忌避され差別されてきたか。
カールのご家族は、私を受け入れてくれるだろうか？

「君のことを面倒だなんて思ったことはない。髪の色も瞳の色もき
れいだ。」

うちの親は、商人としていろいろな人と会っているだけあって、
人を見た目で判断するようなことはしないさ。

もししたら、絶縁してでもルウを守る」

「カール・・・。ありがとう。」

でもね、気持ちは嬉しいけど、ご両親は大切にしてください。

私はお母さんの顔もおぼろげにしか思い出せないから・・・。」

「あ、すまない。そんなつもりで言ったのではないんだが」

「うん、わかってる。先に弱音を吐いたのは私だもんね。」

もしカールのご両親が私を受け入れてくれなくても、気持ちが変わるまでがんばるわ」

「無理はするなよ。俺も一緒だから」

「うん。頼りにしてる」

そうこうしているうちに、馬車は町の中心部にほど近い、一軒の大きな商店の前に着いた。

「いらつしゃいませえ！……ってカール!？」

店先で出迎えてくれたのは、カールによく似た男の人。
この人がお兄さんかな。

「おつまえ、いつ帰ってきたんだ!？ おおい、お袋！ カールだ！
カールが帰ってきたぞ！」

「カレヴィ、そんなに大きな声を出さなくても聞こえてるわよ。あら……」

店の奥から、小柄な女性が現れた。

カールの後ろから顔を出した私を見て、カールと同じ碧の瞳が真ん丸に見開く。

「カール、こんな若いお嬢さんを一体どうやって騙したの？」

8 ご両親に、ご挨拶 2

「で、式はいつなんだ」

「いや、彼女は身寄りがないし俺も辺境から戻ったばかりだから、式はしないつもりなんだ」

お店はお兄さん夫婦にまかせて、店と続きになっている自宅の応接室に通された。

カールと並んでソファに座り、向かい側にカールのお父さんとお母さんが座る。

カールが言うとおおり、ご両親は私を特別視することなく、温かく接してくれた。

「ねえ、ルチノーさん。本当にいいの？」

「一回りも年が離れてて、親の私が言うのもなんだけど我が儘だし自分勝手だし、結婚相手としてはどうかと思うわよ」

「お袋、それはないんじゃないか」

「あら、本当のことじゃない」

カールのお母さんは、ふんわりとした雰囲気だけれど、わりとはつきり物を言う女性^{むすめ}みたい。

お父さんと言えば、背が高くって、微笑んだ顔がカールとそっくり。

白髪交じりの錆色の髪が、カールもこうなるのかなって思わせる。

「そうだなあ。こいつにはいつも苦労というか驚かされたよ。せつかく商人の学校に行かせたのに、突然騎士になるなんていつて家を出るわ、気付いたらある日いきなり近衛として王様の行列に混ざってるわ、あげくどっかの国の王女に手をだしたとかで左遷だる?」

「ちょっと、あなた。ルチノーさんの前で言っちゃだめでしょ!」

「おおっと、すまん。まあ誤解だったってことで戻ってこられたんだからいいよな」

「は、はい。大丈夫です」

全然大丈夫じゃない。

あとでカールに聞かなくちゃ。

隣に座るカールをちらっと見ると、ばつが悪そうに目をそらした。

「で、極めつけはこんなにかわいいお嬢さんを連れてくるんだもん
な!」

「そうよねえ。でも結婚式は本当にいいの? 女の子なら一度は憧れるものじゃない。」

親代わりなら孤児院の先生とかいらっしやるでしょう?」

「院長先生はこの間亡くなられて・・・」

「あら! もしかして聖アドリアナ孤児院!？」

「え? あ、はい、そうです。ご存じなんですか?」

「ほら、カール、あなたが寄付をした・・・。」

確か家一軒くらい軽く建つ金額をばんとあげちゃったのよね。あのときも驚かされたわあ。

あそこの院長先生、亡くなったのよね。近所の奥さんが治療院のお手伝いに行つててねえ。

カールにも知らせようかと思つたんだけど、急だったから。

そう、あなたあの孤児院の娘さんなの。それが出会いつてわけね。それなら納得だわ。こんな息子だけよろしくね」

そう言つてカールのお母さんは、私の手を強く握つた。

初めて聞いた話に驚いたけど、とりあえず認めてくれたようなので握手を返す。

カールも片眉をあげてお母さんの話を聞いていた。たぶん知らなかったんだ。

その後、今王都で流行つているといってお菓子をこ馳走になった。

夕飯も食べて行つてというお誘いは丁重にお断りして（私の変化が限界だった）、家に帰つた。

「あの!」「あのな!」

家に着いた途端、2人同時に口を開いた。

カールに先を譲る。

「親父が言つてた王女の件は完全に誤解なんだ。」

向こうが勝手に熱を上げてただけだ。ウーリーに聞けば分かる」

あっそう。

ずいぶんモテてたんだね。

あーあ、これからカールの女性関係では苦労しそうだなあ。
昔の女性ひととかに会ったら、どうしたらいいんだろう。

「ルウが聞いたかったのはこのことじゃないのか？」

私の反応がいまいちだったのを感じたようで、カールが不安げに聞いてきた。

「それもあるけど・・・お礼が良かったの」

「礼？」

「寄付のこと。院長先生は、すごく資金繰りで苦労してたから・・・」

时期的にも一番大変だったときだわ。それがなかったらみんな路頭に迷ってたかも」

「あ、いや・・・」

その、王女の件でな。左遷されて辺境に行くことになったから、
自棄やけになって有り金全部寄付したんだ。

・・・そうか、ルウのところだったのか」

それから私は、孤児院でのこと、エメさんとの出会い、カールに会うまでのことを話した。

前に聞かれたときは院長先生のことを話すのがまだ辛くて、うまく話せなかったことも謝った。

「アドリアナ院長はいい方だったんだな」

「うん。最後まで私のことを心配してた。カールにも会ってほしかったな」

カールを院長先生に会わせてあげたなら、きつともっと安心してくれただろう。

いまはただ、安らかに眠っていることを祈る。

「俺は・・・すまんが適当に選んだ寄付先だった。たまたま知り合いに紹介されて。」

「こんな偶然もあるんだな」

「そうだね。偶然でも・・・すごく感謝してる。ありがとう、カール」

広い胸に、そつと身を寄せた。

カールも私の背中に腕をまわし、髪を優しく撫でてくれる。

「墓はどこにあるんだ？」

「院長先生の親戚が管理する墓地にあるわ。王都の西のはずれだったと思う」

「そうか。今度あいさつに行かなきゃな」

「うん・・・」

カールのご両親も素敵な方たちだった。

式はしないけど、身内だけで食事会をしようということになった。
私に家族ができる。

カールが、家族をくれた。

碧の瞳が私を見つめる。

どちらともなく唇を寄せ、深く、口づけた。

院長先生、私、幸せです

ふんふんふん

もうすぐルチノーちゃんが王都に来る。

嬉しいわ！ 何をして遊ぼうかしら。

「ご機嫌だな」

城の中庭を自分の部屋へ向かって歩いてみると、前方から毛皮で縁取りされた真つ赤なマントを羽織った男が声をかけてきた。

この城の中でそんな派手な格好をしている男は、一人しかいない。

「リック」

リックハルトⅡ ヴイリオⅡ ブルクハルト。

ブルクハルト国の国王だ。

癖のある栗色の髪に、濃い灰色グレーの瞳。

なかなかの偉丈夫で、38歳にして未だ正妃はもたないが、3人の側室の間に5人の子どもがいる。

「またそんな地味な法衣を着て。私の贈ったドレスはどうしたんだ？」

「だから、私は魔術士だからこれしか着られないっていったじゃない」

「そうだったか？ ドレスは好きだろう？」

「集めるのは好きだけど、自分では着ないのよ」

「そうか。残念だ。一度でいいからおまえが着たところを見せてほしいな」

「はいはい。こんなおばあちゃんを口説いてないで、早く正妃を見つけないさい」

「私の正妃はおまえがいいと、幼少のころから言っているはずだが」
そう言いながら、私の結い上げた髪をはらりとほどき、一房とって口づける。

ウーリーの家庭教師をしていた折に、リックにも出会っていた。

「一国の王が何を言ってるんだか。私の本当の姿を見たら、そんなこと言えないわよ」

「本当の姿も何も、おまえは魔術で若返っているんだろう？
変化しているわけではない。」

この艶やかな黒髪も、つぶらな黒い瞳も、白くふっくらとした頬も私は大好きだ」

「あなた、とことん目が腐ってるのねえ。普通魔術で何百年も生きてる人間を見たら、気味悪がって近づかないか、その力を利用しようとするもんなのにね」

「こんなかわいらしいおまえを気味悪がるなんて無理だ。」

出会ったころは姉のようだったが、今は私よりずっと年下に見える

る。

私の庇護下に置きたいとは思っても、利用しようなんて気はおきないな」

「あー、はいはい。この国の大臣たちもかわいそうに。王様がこんなじゃ、正妃を迎える日は遠いわね」

「大臣たちは別に反対していないぞ。」

東の国では漆黒の大魔導士、我が国では月光の魔術士と呼ばれる異界渡りのエメラルダを手中に収められるとあつては、かえって応援しているくらいだな」

「……その大仰な二つ名、やめてくれない？」

「おまえが望むならやめよう。エメ、他に望むことはないか？」

おまえの望みなら、なんでも叶えたいんだ」

甘く囁きながら、じっと見つめてくる。

うーん、たいていの女性はこの手で落ちるんだろうな。

私には効かないけど。

そっちは利用する気はなくても、私は最大限に利用させてもらおう。

「望みはなんでも？」

「ああ、なんでも」

これは都合がいい。

ルチノーちゃんのことを話しておかなければと思っていたのだ。事情をかいつまんで説明する。

「急におかかえ魔術士の話を受けてもいいと言い出して、こそこそ調べていたのはそれか。」

彼のヴィルヘルミーナの忘れ形見だつて？

国が滅亡してからも、女王は側近と共に逃げ延びて、別の地で再興を目指していたという。

結局叶わなかったらしいが……。その娘が我が国にいるのか？」

「そう。私が知ってる女王はまだ位を継いだばかりで、ちょうど今のルチノーちゃんくらいだったわ。」

父親が誰かはわからないけど、側近の一人が女王を保護した国の偉い人もね。

どっちにしろ持つてる力はとんでもないものがあるから、私が導いてあげたいのよ」

「ふうん。そんなに力があるなら、その娘も城に迎えたいな」

さっきまで私を口説いてたくせに、舌の根も乾かないうちにそれかとことん女好きね。」

「あー、それはだめ。もう相手がいるのよ」

「相手？」

「カールⅡヘルベルトⅡヴュスト。あなたの親衛隊員でしょ」

「おお、カール！ あいつか。あいつには悪いことをしたなあ。隣国の王女がしつこくてな。」

つい“君好みのいい男がいる”なんて言って、あいつに押し付けってしまった」

「はあ？ 呆れた。そうだったの？」

「ああ。だからな、王女が失脚したときいて、親衛隊員として呼び戻したんだ。」

「そうか。カールの相手か。では仕方ないな。でもあれほどの男が惚れ込むんだ。いい女なんだろう」

「守ってあげたくなるタイプね」

「なるほど。エメと一緒にだな」

「だから目が腐ってるって……」

私が選んだドレスを着て、カールと連れ立って城を訪れたルチノちゃんは、文句なくかわいかった。

新品の親衛隊服を着込んだカールも、お姫様を守る騎士ナイト役にぴったりだ。

まったく、顔だけはいいんだから。

「カール。よくぞ戻ってくれた」

「過分なお計らい、感謝の仕様もございません。妻と共に、誠心誠意お仕えする所存です」

「まあそう固くなるな。私とおまえの仲じゃないか。」

友情の証に、私がかわいがっている白猫を贈ろう。大事にしてくれ」

「はっ」

その仲って同じ王女に振り回された仲じゃないの？という突っ込みは心の中にしまっておく。

リックは打ち合わせ通りに、猫のルチノーちゃんを下賜する台詞を述べた。

側仕えがうやうやしく猫用バスケットを渡す。

実際は、重しが入っているだけの空のバスケットだ。

これで猫のルチノーちゃんは、城内通過フリーパス自由だ。

カールとルチノーちゃんの謁見を見届けて、城内の自室に戻る。

来週からルチノーちゃんが来る。

まずは成人の儀をしないと。私だけでは荷が重いかもしれない。

あの2人を呼ぶか……。

コンコン

扉がノックされた。

返事を待たずに開かれる。

「リック。何の用？」

「おまえの話に乗ってやったんだ。褒美くらいよこせ」

濃い灰色グレーの瞳が近付いて来る。

「……………んっ……………」

顎をとられ、唇を奪われた。

ねじこまれる舌。

歯列を割って、口腔を好き放題なぶ蹴られた。

「~~~~、長い!!!!!!」

「ちっ、つれないな」

ぐいっと突き放して睨んだが、リックに悪びれるそぶりはない。

「幸せそうな2人だったな。どうだ、おまえもそろそろ伴侶が欲しくなっただろう」

「いまさらよけいな足枷はいらないわ」

「ふん。いつか振り返らせてみせる。エメ、私ほどの男はいないぞ」

「はいはい。さあ、仕事に戻りなさい」

ひらひらと手を振って、リックに背を向ける。

もう何年も繰り返されたやり取り。

自分になびかない女が面白いんだろう。

いつになったら飽きるんだか。

いつもならそれで去っていくリックだったが、今日はしばらくたっても扉を開閉する音が聞こえない。

どうしたのかと振り向こうとした瞬間、後ろから抱きしめられた。

「私はあきらめない。エメラルダ、きつとおまえを手に入れる」

耳元でささやかれて、不覚にもぞくりと腰が震えた。

キツと睨むと、私の動揺を察してか、にやりと笑うリックがいた。

「じゃあな。私の白猫によろしく」

「……カールの前で言うんじゃないわよ。切り殺されるわ」

「ははっ、そのときは反逆罪で死刑だ。ああ、うらやましい。女の為に死ぬのもいいな」

「女好きもそこまでいくと立派だわ。側室どころじゃなくてハーレムでも作ってみなさいよ」

「そのときはおまえも入ってくれるか？」

「入るわけないでしょ！ いいから仕事しろッ」

手近な本を投げつける。

ばん！と扉に当たって落ちた。

いつのまに移動したのか、リックはとうに扉の外だった。廊下から、去っていく笑い声が聞こえた。

「まったく、冗談もいい加減にしてよね」

一時を共にした相手がいなかったわけじゃない。

でも長い長い生は、いつしかそういった感情を私の中から失わせてしまった。

「いけない。ルチノーちゃんの成人の儀の準備をしようとしていたんだっけ。

まったく、リックのせいで……。まずは手紙を書かなくちゃね」

あの子の力は半端じゃない。
普通の魔術陣では抑えきれないかもしれない。
協力者が必要だ。

ルチノー。

失われた魔術王国の、最後の女王。

彼女はこの先、どんな変貌をとげるのだろう。

「ああ、おもしろい。これだから長生きはやめられないのよね」

羽ペンにインクをつける。

拝啓、親愛なるレオナルド

東の国の魔術士に助力を仰ぐべく、私は手紙を書きはじめた。

***閑話　ブルクハルト城（エメ視点）　***（後書き）

エメさんの異名の由来とか、ルウのお母さんの話とか、いつか書けたらいいなあと思います^^

9 お散歩（前書き）

現在のルウ視点です。

時系列がわかりにくくてすみません^^^；

9 お散歩

とつとつと

草をかきわけ、お城の裏口へ向かう。

「あ！ ルウだ！」

「にー」

下働きのおばさんの子どもに見つかってしまった。

乱暴に頭を撫でられる。

うう、子どもは嫌あ。

昔、猫になったばかりの頃、さんざん追いかけてまわされた忌まわしい記憶がある。

「これ、チャム！ 王様の猫にけがでもさせたらどうするんだい！
遊んでないで、この芋を厨房に運んでおくれ」

「はい」

ようやく離れてくれた。

ああ、よかった。

とつとつと

だんだん道が整ってくる。

きゃいきゃいと明るい話し声が聞こえてきた。

「あ！ ルウちゃん」

私に気付いたのは、お洗濯を担当する女の人たち。

濡れた手をエプロンの裾で拭いて、優しく喉を撫でてくれた。

「ふふ、かわいい」

「今はカール様の猫なのよね。あの方が猫を抱いている姿なんて、想像できないわ」

「そうよね。近衛の頃も、いつも厳しいお顔をなさって職務に励んでらしたわ」

「隣国の王女と噂になったときも、まさかって思ったもの」

「あ、でも結構女性関係はいろいろ噂があったのよ」

「ええ？ そうなの？」

「ほら、町で有名な高級娼館があるでしょ。あそこのブランドイー又つていう看板娘がご贖身だったとか」

「貴族の若いご令嬢たちが熱をあげて、贈り物合戦してたとか」

「あら、ご令嬢の侍女たちじゃなかった？ カール様をめぐって取っ組み合いの喧嘩をしたんでしょ？」

「あはは、本当？ 見てみたかったわ。いつも取り澄ましたあの侍女たちが？」

「そうそう。でもわかるわあ。カール様、格好いいもの」

「うーん、私は断然ユ八様派だなあ」

「親衛隊の？ じゃあ私はマルリ様」

「ヴァイノ様のほうが素敵よ」

「ええ？ 私は……」

女の子たちのおしゃべりは尽きることがない。
けど、カール……。
モテるだろうとは思ってたけど、ひどくない？
会話に出てきたいくつかの名前を頭に叩き込んで、私はぶんぶんしながら裏口をくぐった。

「お、来たな」

ずいぶん通い慣れてきた道を通って着いたのは、エメさんの部屋じやなくて執務室。

木目が美しい大きな机の向こうに、この国の王様が座ってる。

「んなーう」

王様の足元にすり寄る。

剣だこのあるごつごつした手が、私を抱き上げた。

「愛い奴よ。いまからでもカールはやめて、私の元へ来ないか？」

「うにっ」

たしたし！

厚い胸板を叩く。

「ははっ、わかった、わかった。そなたは貴重な協力者だ。
嫌われたくはないからな。さあ、エメの部屋へ行こう」

王様に抱かれて、私はエメさんの部屋へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7296w/>

白猫の恋わずらい

2011年10月11日06時58分発行